

平成24年度 博士論文
指導教授 阿部 實
指導教授 中島 健一

老いの超越の質的意味に関する研究

—新しい分析法 TAE (Thinking At The Edge)を用いて—

A Qualitative study of Gerotranscendence

—TAE Based Study—

日本社会事業大学大学院 博士後期課程
学籍番号 22090008 山 口 美 香

目 次

| | |
|--------------------------------|----|
| 第1章 研究の意義と目的 | 1 |
| 第1節 問題意識と問題の所在 | 1 |
| 1. 問題意識 | 1 |
| 2. 問題の所在(高齢者の心理的構造の特徴) | 2 |
| 第2節 先行研究の現状と課題 | 3 |
| 1. 生涯発達の先行研究 | 3 |
| 1) バルテスの SOS 理論 | |
| 2) ロスクバウムの一次的制御と二次的制御 | |
| 3) ヘックハウゼンの内的適応の捉え方 | |
| 2. 老年期の発達課題の先行研究 | 4 |
| 1) ハヴィガーストの発達課題 | |
| 2) エリクソンの第9段階 | |
| 3) トーンスタンの老いの超越 | |
| 4) フランクルの「生きる意味」について | |
| 5) サクセスフルエイジングと主観的幸福感 | |
| 3. 心の問題と人格発達に関する潜在性の先行研究 | 9 |
| 4. これまでの研究の問題点に関して | 13 |
| 第3節 本研究の意義と研究目的 | 15 |
| 1. 先行研究からみた本研究の意義 | 15 |
| 2. 研究の目的 | 15 |
| 第4節 論文の枠組 | 16 |
| 1. 本論文の構成の枠組 | 17 |
| 第2章 本研究で採用した研究方法 | 18 |
| 第1節 調査分析 | 18 |
| 1. 調査分析の概要 | 18 |
| 2. 既存の尺度間からの検討 | 18 |
| 第2節 現象分析 | 19 |
| 1. 現象学的アプローチの源流 | 19 |

| | |
|--|----|
| 2. 解釈学的現象学の源流 | 19 |
| 3. T A E (Thinking At the Edge) | 21 |
| 4. 質的研究法としての T A E | 23 |
| 1) K J 法 | |
| 2) G T A (Grounded Theory Approach) | |
| 3) M-G T A 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ | |
| 4) T A E (Thinking At the Edge) | |
| 5. I O F I 原理について | 28 |
| 6. 交差機能について | 29 |
| 第 3 章 老いの超越に至る要因選定と検討のための定量的調査研究 | 30 |
| 第 1 節 老いの超越に関する調査研究 | 31 |
| 1. 研究目的 | 31 |
| 2. 方法 | 31 |
| 1) 調査対象者 | |
| 2) 使用した質問紙の内容 | |
| 3) 調査日時と場所 | |
| 4) 倫理的配慮 | |
| 3. 分析方法 | 32 |
| 4. 統合感尺度の分析結果 | 35 |
| 1) 統合感尺度の構成要因についての検討 | |
| 2) 統合感尺度の妥当性の検証 | |
| 3) 統合感下位尺度間の関連 | |
| 4) 統合感尺度の男女差の検討 | |
| 5) 統合感尺度と超越尺度との関連について Pearson の相関係数からの検討 | |
| 6) 分散分析結果 | |
| 第 2 節 質的調査に向けた説明概念の検討 | 39 |
| 1. 目的 | 39 |
| 2. 方法 | 39 |
| 3. 質的調査に向けた説明概念の抽出 | 39 |
| 4. 説明概念の抽出 | 41 |
| 第 3 節 考察 | 45 |
| 1. 諦観の捉え方に関する検討 | 45 |
| 2. 受容の捉え方に関する検討 | 45 |
| 3. 達観の捉え方に関する検討 | 45 |
| 4. 高齢者の心的機構を説明する 10 の説明概念 | 47 |

| | |
|---|----|
| 第4節 老いの超越の捉え方 | 48 |
| 1. 従来の老いの超越の捉え方 | 48 |
| 2. 老いや死の捉え方(東洋的視点) | 49 |
| 第4章 老いや死の捉え方の定性的調査研究 | 50 |
| 第1節 本調査 | 50 |
| 1. はじめに | 50 |
| 2. 目的 | 51 |
| 3. 方法 | 53 |
| 1) 調査対象 | |
| 2) 調査期日 | |
| 3) 倫理的配慮 | |
| 4) 調査結果の要因の検討からインタビューガイドを作成 | |
| 5) インタビューの手続き | |
| 6) 分析の手続き | |
| 第2節 先行研究からの分類 | 58 |
| 1. 説明概念からの分類 | 58 |
| 2. 方法 | 58 |
| 3. 説明概念からのカテゴリー化のプロセス | 59 |
| 4. 説明概念からの結果 | 61 |
| 5. 諦観のポジティブとネガティブの捉え方の検討 | 63 |
| 6. 前向きからの現状維持までのパターンの検討 | 63 |
| 第3節 #14 実例による老いや死の捉え方 | 67 |
| 1. TAEを応用した質的分析 | 67 |
| 2. 実例#14の概要 | 68 |
| 3. TAE分析過程 | 71 |
| 4. 実例#14の観念の構造体 | 73 |
| 5. #14 実例分析結果からの考察 | 74 |
| 第4節 澄む・あきらむモデルからのCODE化 | 77 |
| 1. 澄む・あきらむの構造に関して | 77 |
| 2. 分析のプロセス | 79 |
| 3. 49 実例を澄む・あきらむモデルにCODE化した結果 | 81 |
| 4. 2012 年老いや死の捉え方モデルの概念新パターン | 83 |
| 5. 説明概念からの分類とTAEモデル化でCODE化した結果の比較 | 86 |

| | |
|--------------------------------|-----|
| 第5章 総合考察 | 88 |
| 第1節 モデルの検討 | 88 |
| 1. 本研究の仮説モデルの位置づけ | 89 |
| 2. 老いの超越2012年モデル | 90 |
| 1) 説明概念からの老いの超越2012年モデル | |
| 2) TAEで捉えた老いの超越2012年モデル | |
| 3. 諦めが諦観に変化する老いや死の捉え方 | 93 |
| 4. 先行研究と2012年老いの超越モデルの検討 | 97 |
| 5. マイナスをプラスにする支援:こころのケア | 100 |
| 第2節 定性的調査研究結果のまとめ | 102 |
| 1. 老いや死の捉え方 | 107 |
| 2. 支援策の検討 | 107 |
| 3. 今後の課題 | 107 |
| 引用文献 | 111 |
| 参考文献 | 117 |
| 謝辞 | 120 |
| 補論1 | 121 |
| 補論2 | 127 |
| 補論3 | 139 |

第1章 研究の意義と目的

第1節 問題意識と問題の所在

1. 問題意識

我が国においては、近年公衆衛生の整備や医療の進歩に伴い平均寿命が飛躍的に伸びた。国民の平均余命を指標とすると、男性 79・59 歳、女性 86・44 歳という日本は、今や、世界の長寿国である。内閣府(2011)¹⁾。また、2010 年の日本の高齢化率は 23.1%を記録し、この高齢化率は今後も伸び続け、2055 年には 40.5%となり、国民の 2.5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者になると予測されている。「老い」に向き合い受け容れていくかは、今、多くの日本人にとって大変身近な課題となってきた。

周知のように、戦後、日本は高度経済成長を経験し、衣食住等多方面にわたって物質的に豊かになった。しかし、人々の暮らしは物質的には確かに豊かになったが、物質的な豊かさが心理的な豊かさをもたらしたかというこの点においては疑問が残る。物質的に豊かになり平均寿命が伸びたが、「老い」が抱える問題が克服されたわけではない。

そこで筆者は、高齢化社会における「老いの受容」について、老年期にある人たちの「老い」を通して考察し、人間の「幸福の意味」を解明していきたいと考えた。この事は日本のみならず今後高齢社会に向かう国々にとっても共通する重要な課題の 1 つと考えている。近代の若者文化の中で「老い」というものは、一般的にはネガティブに捉えられがちであるが筆者は今回の研究を通じて「老い」を長寿社会におけるポジティブなテーマとして再考していきたい。

2. 問題の所在（高齢者の心理的構造の特徴）

エイジズムとは、ライフレビューの研究で著名なロバート・バトラー（Robert Butler）²⁾が、1968年初めて用いた概念である。バトラーによれば、エイジズムとは、「高齢者が高齢者であるために、彼らに対して抱く、体系的なステレオタイプと差別の過程」であると定義している。

鷺田(2003)³⁾は、老いとは人生のいつの時期にも訪れうるものであり、意のままになしうるという増進ではなく意のままにならないことへの受容、そういう抵抗の経験を積み重ねつつ個人の内面に深く耐える事からの成熟であると考えられるとして、その意味では「老い」とは他なるものの受容の折り重なりとしての現象であると捉えている。

黒田(2005)⁴⁾は、老いの理解に向けて、65歳という社会的な指標によって、個人が機能的な能力とは関係なく「高齢者」に分類される社会システムに対して高齢者はどのようにして適応しているのかという問題を検討している。具体的には「活動能力」「心理的年齢」「自己の統合」「生活満足度」という概念からその構造を探り、活動能力が高いという事は、機能的側面が保有されていることを意味し、それにより幸福感が高まっているという結果を導きだしている。また、年齢イメージが若い者は、自己の統合が高く、統合状態が高ければ幸福感への効果があるという事実を明らかにしている。一方、後期高齢者は高齢であることに受容的になる傾向もあるため、年齢が自己統合に及ぼす影響が後期高齢者において異なり、幸福感への効力が変化するという可能性を示唆している。

後期高齢者は日常生活機能などの身体機能が低下するにもかかわらず、主観的幸福感の心理的側面は低下しないことが佐藤ら(2003)によって報告されている⁵⁾。

これらの報告は、身体機能の低下やそれに伴う活動の減少などに伴う環境側つまり社会的側面の衰退といった状況に対して、超高齢期において高齢者は内的に心理的適応が進むことを示唆していると捉えられる。

加齢に伴い心理的適応が上昇すると示されているが、高齢期における心理的適応の内的な発達のメカニズムはまだ解明されていない。(Diener E, Suh MK)⁶⁾

超高齢期には特異的な心理的適応が進む事が示唆されている。主観的幸福感に与える身体的側面の影響は減少する一方で、家族との電話などの社会的側面の影響は増加するとの報告がされている。(Jopp D, Rott C, 2008 富澤2009他)⁷⁾

超高齢期に高齢者は心理的適応の発達が示唆されるが、どのように心理を支え発達に向うかの内部構造は未だ示されていない。高齢者の内的な構造を捉える事が今後の課題であると言えるだろう。

第2節 先行研究の現状と課題

1.生涯発達の先行研究

これまでの発達理論は、乳幼児期・児童期・青年期に関心が寄せられ、加齢に伴い成人期や高齢期は発達が減退・衰退する老化過程として捉えられてきた。しかし平均寿命が延び健康な高齢者の増加や、高齢期の精神発達の研究成果から、生涯発達(life-span development)という捉え方が見直されるようになってきている。

この代表として、バルテスがあげられる。バルテス(Paul Baltes1980)⁸⁾は生涯発達心理学(life-span developmental psychology)というものは、『人の誕生から死にいたるまでの生涯過程の中で個人内の変化と安定性・連続性がどのように存在し、そこにどのような異質性と同質性があるかを明らかにすることである』と定義づけている。

バルテスの代表的理論は、「選択的最適化とそれによる補償理論」(Selective Optimization with Compensation : SOS)である。

1) バルテスの SOS 理論

バルテス(Baltes, P.B., 1997)⁹⁾は、発達とは獲得(gains)と喪失(loss)の相互作用によって進行する成長と老化の発達の交錯であると捉えている。つまり彼は獲得と喪失が組み合わさった連続体として生涯発達を捉える必要性を指摘している。

バルテスの理論は、身体機能の衰退を個人がどのように適応していくかの対処法として考えている。その方法としてこれまでよりも狭い領域を探索する(選択)、機能を補う手段や方法を見つけ喪失を補う(補償)、狭い領域で適応の機会を増やすこと(最適化)によって、高齢期に適応的な発達の可能性について示唆している。表 1-1 はバルテス (Baltes2002) の SOS 理論である¹⁰⁾。

表 1-1 「選択的最適化とそれによる補償理論」

Selective Optimization with Compensation (SOS)

| | |
|-----|-------------------------------|
| 選択 | 若い頃よりも狭い領域を探索し、特定の目標に絞る |
| 補償 | 機能低下を補う手段や方法を獲得して喪失を補う |
| 最適化 | 狭い領域や特定の目標に最適な方略をとり、適応の機会を増やす |

(出典 Baltes, 2002)

2) ロスクバウムの一次的制御と二次的制御

ロスクバウム (Roshbaum, Weisz, & Snyder 1982)¹¹⁾は一次的制御 (Primary control) と二次的制御 (Secondary control) の概念を取り入れた。この概念は一次的制御では個人の欲求や願望に適するよう外的環境を変えようとする試みとその能力に関することであり、二次的制御では、現状を調整するために内的世界を調整しようとする試みとの関連があると捉えている。表 1-2 ロスクバウムが捉えた一次的制御と二次的制御をまとめた。

表 1-2 一次的制御と二次的制御

| | |
|-------|---|
| 一次的制御 | 個人の欲求や願望に適するよう外的環境を変えようとする試みとその能力のこと |
| 二次的制御 | 現状に対処するために自らの内的世界 (目標, 願望, 信念)などを調整しようとする試み |

(出典 Roshbaum, Weisz, & Snyder 1982)

3) ヘックハウゼンの内的適応の捉え方

ヘックハウゼン (Heckhausen & Schulz 1997)¹²⁾は、身体機能が衰退する高齢期にロスクバウムが提唱する一次的制御と二次的制御の理論が、バルテスの SOS 理論の実践に有効であると考えた。彼は身体機能が衰退する高齢期はこれまでよりも狭い領域を探索し、機能を補いながら適応の機会を増やす事で最適な状態を保っていこうと作用すると捉えている。さらに彼は、機能が衰退する老年期は、外的に調和するために内的世界に関心を持つようになるかと捉えている。ヘックハウゼンはバルテスが高齢期の身体機能の衰退を個人がどのように適応していくかの対処法として考えたのに加え、環境要因を踏まえて内的に適用することを捉えようとしていると考えられる。

2 老年期の発達課題の先行研究

発達研究の中で老年期に着目した発達研究をいくつか挙げてみた

1) ハヴィガーストの発達課題

ハヴィガースト (Robert James Havighurst 1963)¹³⁾は、生物学的適応、個人的行為の形成、生活上の社会的期待への適応などの点から人生を6段階に区分し各段階の課題を設定した。そして、老年期の発達課題として、彼は表1-3にまとめたような7つをあげている。

表1-3 ハヴィガーストの老年期の発達課題

-
- | | |
|---|----------------|
| ① | 身体的変化への適応 |
| ② | 退職と収入の変化への適応 |
| ③ | 満足のゆく生活管理の形成 |
| ④ | 退職後の配偶者との生活の学習 |
| ⑤ | 配偶者の死への適応 |
| ⑥ | 高齢の仲間との親和の形成 |
| ⑦ | 社会的役割の柔軟な受容 |
-

(出典 Havighurst, 1963)

2) エリクソンの第9段階

エリクソン (Erikson E.H., Erikson, JM 1997)¹⁴⁾夫妻も超高齢社会を生きる80歳、90歳を超える人々には第8段階(統合対絶望)とは異なる新たなニーズと困難について考察している。彼らは第9段階は親しい人との死別など多くの悲しみを体験してきており、死についての課題や悲しみに直面する時期であると捉えている。エリクソン夫妻は、超高齢者がこれらの喪失課題に対処することは非常に難しいと否定的に捉えている。しかしそれを可能にするのは人生の出発点で獲得した他者に対する「基本的信頼感」からの「希望」であると捉え希望によって生きる意味を持つことが可能であると信じている。

3) トーンスタンの老いの超越

ジェロトランセンデンス(gerotranscendence)とは、ギリシャ語で老人を意味する *geron* と英語の *transcendence* (超越, 卓越, 優越) を結びつけた合成語で、1980年代半ばにスウェーデンのウプサラ大学の社会学者トーンスタン (Lars Tornstam)¹⁵⁾ によって提唱された概念である。日本語では、「老いの超越」「加齢による超越」と訳されることが多い。

ジェロトランセンデンス理論は、社会老年学におけるそれまでの諸理論や諸種の高齢者論、加齢論などでは説明できない、またはそれらの理論等では引きこもりや風変わりな老人として否定的に評価されがちな高齢期の生き方や生活スタイルに対して全く別の見方があることを捉えており、実証研究も積み重ねられてきている。(Lars Tronstam 1990)¹⁶⁾ ジェロトランスセンデンス理論は、サクセスフルエイジングを物質主義的・合理主義的な観点からではなくて、宇宙的・超越的な観点から捉えている。ジェロトランセンデンスは、生きている限り継続する過程であると捉えている。そして、そこには多くの異なった段階があるが、その究極の到達点を宇宙的超越であると捉えている。¹⁷⁾ (Lars Tronstam 1997) . ちなみに、エリクソンの発達の8段階説は、彼の妻で同時に共同研究者であったジョアン・エリクソンによって第9段階が追加されたが、彼女は、ジェロトランセンデンス理論に触発されて人生の最終段階の課題を Gerotranscendence という造語で議論し直している。¹⁸⁾ (Erikson E.H., Erikson, JM 1997)

トーンスタン (Tronstam, L 1996)¹⁹⁾は高齢に至ると思考が内面化し、社会関係から自由になり自己概念が変容し自己超越する体験が老年期に見られるとして「老いの超越」という概念で捉えた。老いの超越理論は、社会的離脱理論をメタ理論と捉え直し、老年期におけ

る生活満足の問題を物質的・合理的観点ではなく、内面的・超越的観点から把握する試みであると捉えている。（小田 2001）²⁰⁾

老いの超越は、必ずしも年齢とは関係なく若くして不治の病に冒された人など人生の危機的状況(ライフクライシス)にも訪れることがあると捉えている。身体能力の多くを喪失し自律性を失いつつある超高齢期にも訪れやすいと捉えている。

小田は、ジェロトランスセンデンスとは、高齢期以前の物質主義的で合理的な観点から宇宙的かつ超越的な観点へとメタ・パースペクティブな変化が起きるとしている。

(Tronstam,L 1992 : 小田 2001) ²¹⁾

なお、小田はジェロトランスセンデンスの3つの次元を表1-4のように整理している。

表 1-4 ジェロトランスセンデンスの3つの次元

| | |
|----------|--|
| 宇宙的水準 | 時間と場所の定義の変化が促進する。たとえば、過去と現在の超越が起こる。前の世代との関係 生と死：死に対する恐怖が消え、生と死について新しい認識が生まれる。 |
| 自己 | 自己中心的な世界からの撤退 自己との対決：自己の隠された局面 — 良いものも悪いものも～が発見される 表面的な関係に対する関心が減り、選択的になり、一人を望むことが多くなる |
| 社会と個人の関係 | 役割 : 自己と定められた役割の違いを認識する。人生における必要性を楽に理解できる。 日常の知恵 : 善悪の区別や判断の保留。アドバイスを与えることの難しさの認識。善悪二元論の超越。 |

(小田利勝, 2001)

小田(2001)²²⁾の研究によれば、高いジェロトランスセンデンスにある人には、低い段階の個人に比べて社会的活動の自己管理度が高いとの調査結果を得ている。また、より高い生活の内的な満足感を得ていると捉えている。このことは、機能が衰退する老年期において、高齢者は、自己の内面に働きかけ適応していくことが考えられる。ゆえに高齢期の発達の適応を捉える上で外的要因だけでなく内面に対する働きかけつまり内的要因を検討する必要があると考えられる。

4) フランクルの「生きる意味」について

生涯発達の観点から捉えて老年期の発達の究極の課題は、人間がいかに関わるかという生きる意味に関する問いだと考えられる。理由としては、老年期が長くなった現代において「老いや死は誰に対しても間違いなく訪れるということであり、老いや死と向き合うと、“今この一瞬”が意味あるものであり無駄にできなくなり限界と未来を深く考えることに通じておりそこから生きる意味について問う方向へ向かうこと考えられるからである。これまで「生きる意味」に関する研究として、精神医学者のフランクルの理論とアイデンティティ形成に関するエリクソンの理論があげられる。

フランクル (Viktor Emil Frankl, 1946) ²³⁾は、人生の虚しさや目的の無さを病気として捉えず「実存的空虚」と呼び、生きる事の意味を問う状況とは「実存的空虚」が高まった時に自分を越えた存在からの呼びかけに答える心の働きであると捉え、そして生の「意味への意志」が働き、人生の意味への問いを投げかけられている状態であると捉えている。^{注1)}一方、エリクソン (Erikson, E.H. 1959) ²⁴⁾のアイデンティティ理論では、アイデンティティは自己の一貫性との変化のジレンマにさらされ、そのジレンマにどう対処するのかが生きる意味への問いとなって現れると捉えている。エリクソンの理論では、人が変化していく過程で問いが生じるという発達の視点を捉えている。

一般に、老化と発達は反対の意味をもつ対概念と考えられている。しかし、心理学においては、(身体的) 老化の対概念は(心身的) 成長と捉え、精神的発達を含めた心身の時間的変化を発達と捉えている。生涯発達という概念は、このような経緯から出発していると言えるだろう。したがって、加齢現象を身体的機能の衰退と否定的に捉えたとしても、そのような限界のある体を有する高齢者がいかにより良く生きるかを検討することが老年期の心的適応の発達の課題であると考えられる。

注1) 人間の人生の価値は主体がどのように捉えるかによって意味が変わってくると捉えられる。どんなに困難な状況にあってもそれがどのように見えるか、何を見ているかによって捉え方が変化するということである。人間の根本的意思とは「快楽への意思」「力への意思」「意味への意思」の3つの意志があるとフランクが述べている。

その中でも「意味への意思」が最も根本的で他の二つはそれが満たされない事による空虚感の「麻痺」として生じると捉えられる。「意味への意思」は充足によって「快楽への意思」「力への意思」が或る質的に高められた仕方を実現されると考えられる。「快楽への意思」は体験価値を、「力への意思」は創造的価値を、「意味への意思」は態度的価値を実現するものに変質すると捉えられている。

「自己超越」とは「精神的無意識への信頼」と一体のものとして捉えられる。

これは日常のその都度の具体的な務めに専心するその「自己超越」のうちに無意識的に働いている「意思」として捉えられる。「態度的価値」とは、自分の可能性が制約されているという事が、どうしようもない運命であり、避けられず逃げられない事実であってもその事実に対してどんな態度を取るか、という事によって実現される価値である。

5) サクセスフルエイジングと主観的幸福感

医療の進歩と公衆衛生の発達で寿命が伸びこれまで老年期を「隠居生活」として余生として捉えていたものが当てはまらなくなってきた。老年期をより良く生活することが個人の人生の大きな課題となってきた。このような状況の中、加齢現象に適応した老年期のあり方を「サクセスフル・エイジング」と呼びその構成要因として、主観的幸福感が含まれている。

主観的幸福感とは英語では Subjective well-being と言いサクセスフル・エイジングを示す指標の一つとされている。

日本に限らず、これまでも、主観的幸福感を捉えようとする試みはおこなわれてきた。代表的なものとして、ロートンの改訂版 PGC モラールスケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: Lawton, M.P. 1975) がある。これは、主観的幸福感 (subjective well-being) を、17 項目 3 次元 (agitation) (attitude toward own aging) (lonely dissatisfaction) (自分自身への満足感、老いの受容、居場所がある感じ) の尺度で捉えようとするものである。安定した結果が得られるといわれており、生活満足度尺度、(Life satisfaction a scale) 日常生活動作尺度等 (A Daily Living Scale)、他尺度と組み合わせて用いられることが多い。しかし、改訂版 PGC モラールスケールは、イエスノークエスチョンであることからわかるように、現象をおおまかに捉えたいときに有効な尺度であり、個人の複雑な内的世界を捉えることは意図されていない。²⁵⁾

エリクソン (Erikson, E.H. 1973)²⁶⁾ は、人の一生を心理的、社会的な側面から捉え、人格は生涯に渡って発達するライフサイクル論を主張した。そのサイクルの中で、老年期を第 8 段階と位置付け、この段階の解決すべき発達課題を、「自我の統合対絶望」としてとした。エリクソンの研究は、老いの超越を捉える上で有効で、自我の統合は「老い」のポジティブな面をとらえている。彼は、ライフサイクルの 8 段階の発達を各段階 7 問 (計 56 問) でとらえる尺度 (EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage inventory) を開発している。しかし、エリクソンのモデルでは、60 歳以上を高齢者と扱っていることから、衰えや死との直面という「自我の統合」の後に来であろう発達課題に、人がどのように向かい合うのかという問題を、十分に捉えきれていない。

エリクソン自身も、晩年には、第 8 段階に続く第 9 段階があると考えていたことが知られている。エリクソンの発達の 8 段階説は、彼の妻で同時に共同研究者であったジョアン・エリクソンによって第 9 段階が追加された。彼女は、ジェロトランセンデンス理論に触発されて人生の最終段階の課題を「ジェロトランセンデンス」という造語で議論し直している。

ジェロトランセンデンス理論は、社会老年学におけるそれまでの諸理論や諸種の高齢者論、加齢論などでは説明できない、あるいはそれらの理論等では引きこもりや風変わりな老人として否定的に評価されがちな高齢期の生き方や生活スタイルに対して全く別の見方があることを捉えており、実証研究も積み重ねられてきている。そして、介護や看護等の実践的場面での有用性も検証されている。²⁷⁾

第 9 段階は親しい人との死別など多くの悲しみを体験してきており、死についての課題や悲しみに直面する時期であると捉えている。エリクソン夫妻は、超高齢者がこれらの喪失課題に対処することは非常に難しいが可能であると信じている。それを可能にするのは人生の出発点で獲得した他者に対する「基本的信頼感」からの「希望」として捉え「希望」によって生きる意味を持つことが可能であると捉えている。(Erikson & Erikson, 1990)

²⁸⁾

トーンスタン (Tornstam, L. 1997) が提起した Gerotranscendence (以下老いの超越と訳す) は、エリクソンが捉えていた第 9 段階を、カミングとヘンリー (Cumming & Henry, 1961, P. 211) によって提唱された離脱理論 (disengagement theory) と絡めてモデル化している。^{29) 注 1)}

トーンスタン(Tornstam,L2003)は、宇宙的超越(Cosmic Transcendence)は、生活満足度(Life satisfaction)と強い相関関係にあること見出し、両者の関わりの様相の理解を得るためには質的調査が必要であると述べている。³⁰⁾

トーンスタン(Tornstam,L1997)のこのモデルは、加齢に伴いポジティブな視点が生じることを捉えている。彼はまた、10項目3次元(Cosmic dimension, Coherence dimension, Solitude dimension)(宇宙、一貫性、孤独)で、老いの超越を捉える尺度を開発した。しかし、イエスノークエスチョンであり、この尺度では、個人がどのように老いの超越に向かうのか、つまり、第8段階から第9段階へ向かうのかというプロセスの問題にアプローチすることは難しい。

小田(2003)³¹⁾は、トーンスタンのモデルをもとに、日本の高齢者を対象に研究し、現実に高齢化社会の急激な進行に直面している日本において、高齢者がいかにして老いの超越に向かうのか、あるいは、向かわないのかを研究することが重要であると問題を提起している。

また、佃(2008)³²⁾は、老いの超越は個人の内面に深く関わることであるから、内的世界の複雑さに迫る個別的研究の必要性を説いている。また、エリクソンやトーンスタンのモデルは、西洋的であり、日本の高齢者の問題を考えるにあたっては、日本文化の特性を考慮すべきであると指摘している。

山口(2008)³³⁾は、トーンスタンがエリクソンを踏まえて主張した第8段階から第9段階への移行が、高齢者の老いや死に深く関わると考え、そのプロセスを捉えることを目的に、質問紙調査とインタビュー調査をおこなった。

まず、エリクソン EPSI 尺度³⁴⁾の中で現在の高齢期に適すると考えられる質問項目 20 問とトーンスタンの老いの超越尺度の 10 問に、平井(2000)³⁵⁾の臨老式死生観尺度、吉森・有倉(1992)³⁶⁾の幸福感尺度、竹中(2001)³⁷⁾の「高齢者の孤独と豊かさ」から孤独に関する質問項目から選択した。計 50 問からなる質問紙調査を実施し、「個と全体」「自己」「自然なプロセス」「統合」の 4 つの因子を見出した。

さらに、その結果を踏まえてインタビューガイドを作成し、前期高齢者 4 名、後期高齢者 4 名にインタビュー調査を実施し、第8段階から第9段階への移行のプロセスに、「活動型」、「古典型」、「葛藤型」の 3 つがあることを見出した。(補論 3 参照)

前期高齢者には活動型が多く、後期高齢者には古典型と葛藤型が見られたが、個人の中で 3 つの型が複雑に絡みあっていることや、個人によって傾向が異なることも見出された。

また、日本の高齢者も「統合」や「老いの超越」という発達課題に向き合っていることは推察されたが、トーンスタンの老いの超越尺度に由来する「あなたは宇宙と一体感を感じますか」という質問の「宇宙との一体感」という箇所には、「意味がわからない」とか「気持ち悪さを感じる」と違和感を表明するインタビューイも複数存在し、日本の文化的文脈に合った研究をおこなう必要性が認識された。

注 1) 離脱理論では、個人が社会から撤退することを人間に本来備わっている特性あるいは発達の特性であるとみなす。トーンスタン(Tornstam,1997)はこれを、物質主義的・合理的な視点から、より神秘的・超越的な視点へというメタ的な価値観(meta-perspective)への移行としてメタパースペクティブを捉えた。

3. 心の問題と人格発達に関する潜在性の先行研究

心の問題を捉えるにあたって、発達研究の心理的機構のメカニズムを解明するにあたり、潜在性（意識していない事柄）をどのように扱っていくかが究極のテーマであると考えられる。以下先行研究を通してこの潜在性について考察してみたい。

この問題に関して、フロイドは夢とビジョンを扱った。フロイドはイメージ体験を、独自の目的論、意味性があり意味の創造性があると捉えた。フロイドは心的機構として超自我（スーパーエゴ）、自我（エゴ）、本能（イド）を捉え、自我の適応機制としてさまざまな防衛機制を捉えた。防衛機制とは不安を引き起こすそのものの知覚や理解を回避する心理的機構である。³⁸⁾

フロイドが見出した防衛機制は、当初は神経症の人を対象としていたため、病的な事と考えられていた。しかし現在では全ての人間においてこの防衛機制は有効であることがわかっていく。³⁹⁾

精神分析を行なう中でもっとも注意しなければならない事は、実は分析者の「防衛」の問題であり、まったく真っ白な状態で当事者と向き合うことなどできないのだという観点を分析者側が持つ必要がある。面接場面で当事者と分析者は相互に作用しており、展開されるプロセスが、分析者側の潜在性（無意識）の問題なのか、当事者側の潜在性の問題なのかについて判断することは、非常に難しいことであり、ここが精神分析の課題とされる点であると思われる。

生涯発達からの観点から捉えても人格の基盤は、エリクソンの捉えたピラミッド（社会との関係性）が基礎となっており、フロイドが捉えた超自我と本能とのバランスの不均衡から神経症に至るという考えは、現在でも有効とされている。特に日本人は「～せねばならない」という超自我が強いため本能を抑圧しやすい傾向にあるため神経症になりやすい国民性と言われている。

フロイドが捉えた発達、人生前半期の自我形成を主に捉えている。理由としてフロイドは、自分の幼児期の体験から理論を形成したためである。

本能は超自我によってバランスを保つものと捉えたが、本能を性的欲求（エディプスコンプレクス）よりに捉えすぎたため、潜在性の捉え方に偏りが生じたと捉える事ができるであろう。

フロイドの理論から発展してアメリカのサリバン(Sullivan, H.S. 1953)やメニンガーが対象関係論に広げ母子関係を捉えた。母子関係論はエリクソンが捉えたピラミッドの基盤となっている。⁴⁰⁾

エリクソンは社会との関係の中で自我が鍛えられていく過程を精神分析の発展系として捉えた。自我の統合は高齢期の発達課題である。しかし自我統合だけではなく自己（潜在性）を含めて生涯発達の心的機構を捉えていく必要があると考えられる。なぜなら自我の統合の次に来るであろう発達課題とは人間の本質に関する意味への問いであり、潜在の中の全体性や統合性に向かうと考えられるからである。

フロイドは、もともとは潜在性を捉えようとして精神分析理論を展開した。しかし神経症という病理から理論を展開したため、またフロイド自身の体験からエディプスコンプレクス(性的欲求)を見出したため、そこを強調しすぎる結果となった。ゆえに結果としてフロイドの発達理論は、人生前半期を主として捉え後半期を捉える事をしなかった。⁴¹⁾

フロイドが見出した概念をもとに、対象関係論や発達理論が展開され解釈しようとした経緯もあり、精神分析は理論が優先された分析となりつつある。

現在の精神分析は、「相互作用」の問題を捉えていこうとする傾向にあり今なお発展系である。いずれにせよ精神分析でもっとも重要な事は、分析者が自分の「防衛」に気づきにく

い点であると捉えられる。つまりまったく客観的な立場で当事者を捉えることには限界があり、相互に作用している「今ここで」の現象をそのまま取りあげるという視点が大切である。しかし心的問題を抱えている人は、特に発達の問題が絡んでいる場合には、エリクソンが捉えたピラミッドの基礎的部分に一旦退行する必要があるので、「今ここで」の現象だけで解決する方向には至らない場合が多いので、双方からのアプローチを行っていく必要があると言えるであろう。

精神分析は分析者によって焦点の当てる所がさまざまであり、今なお発展していると言えるだろう。

ユング(Jung, C. G.)もフロイド同様、夢とビジョン、イメージ体験には意味性があり意味の創造性があると捉えた。夢現象やビジョン形成による経験値、意識と潜在性との相互作用の中でユングは「集合無意識」や「元型(老賢者)」を発見した。ユングは全体性による特徴機能が、だれの心の中にもあると捉えた。⁴²⁾

そしてユングは夢やイメージに焦点化してそれを発見している。それらは本能性とは違って統合性、創造性があると捉えている。つまり夢がつくられる背後には、統合性、創造性といったものがあると捉えた。ゆえに夢はそういうものを常に指し示していると捉えることが出来る。

ユングは人生前半だけでなく、人生後半にも重きをおき生涯発達の「老いの超越」を捉える上での超越機能を見出している。⁴³⁾しかし潜在性を捉えるために夢やイメージに焦点化し、現象を捉えようとしたため、顕在状態(目覚めた状態)から統合性、創造性を捉える糸口をつかんでいなかった。そのため夢見者自身が潜在性で分析者と相互作用(共感的体験)が本当にできているかという事に関して実証することに必ずしも成功してはいない。ゆえに結果としてユングの分析は系統的とは言えなかったのではないだろうか。

ユングの捉えた超越機能は、老いの超越を捉える上で有効であると考えられるが、夢は眠っている状態であり再現性を担保することは難しく、そこが盲点となり実証することが難しかったと考えられる。

カール・ロジャーズ(Carl Rogers 1977)も、潜在性を捉えようとしている。彼は経験が人格統合に関係していると気付いており、実践により展開しようとした。

彼の仮説は、抽象的で実践的であるため、系統的とは必ずしも言い難いものとなっている。ロジャーズは、分析者側の態度をカウンセリングの3条件として挙げている。彼は純粋性、自己一致、共感的態度で傾聴することと「今ここで」の現象を重視した。彼はクライエント中心療法を1951年に提唱した。⁴⁴⁾

「援助する人が、援助されるものに対して真実さ、ケアリング、および深く感受性豊かな評価しない理解を体験しかつ伝えつつあるような関係の中で、どのような個人も成長する潜在能力が開花される可能性がある」というものである。(C.G., Rogers, 1951)⁴⁵⁾

今日多くの臨床でロジャーズの捉えた援助者の態度の有効性に言及している。傾聴することに重きを置き「伝え返し」を技法とし、分析者の態度に関して言及している。しかし傾聴すれば当事者が語るであろうという事だけでは難しい。そこには関係性による相互作用の問題が重要であると考えられる。またカウンセラーの3条件は、精神分析の分析者側の「防衛」の問題を含んでいると考えられる。

防衛は適応機制でありそれが外れると潜在がごちゃごちゃになる。

ゆえにそこを覚悟して常に当事者と分析者は互いに相互に作用しつつその過程に「防衛」を含んでいるとの反省が必要であると捉えられる。

エリクソンは、フロイドの精神分析を発展させ社会との相互作用によってライフサイクル論を提唱した。(Erikson E.H., 1970)⁴⁶⁾ エリクソンの捉えたピラミッド型は、ライフサイクル論の肯定要素と失調要素が葛藤によってバランスをとっているという捉え方をすれば

有効である。一方肯定要素に失敗すると失調要素におちいるという捉え方もされていてそれが「老いの超越」を捉える上ではネックとなっていると言える。人生後半期は失調要素から「老いや死」をとらえる必要がある。それにはエリクソンが老年期の課題とした「自我の統合」対「絶望」の考え方の内「絶望」の中から肯定要素を見出す視点が必要である。と考える。なぜなら、人生後半期は、身体機能が衰退し身近な人との喪失体験を経験する時期である。平均寿命が長くなったという事はそれだけ衰退や喪失期が長くなったことを意味する。これまでの発達理論が機能を獲得していく段階のみに着目して捉えられてきたが、それでは限界があるという事である。

高齢期は機能が衰退し喪失体験を繰り返す時期であるが、そうであるとすれば、内的には失調要素(辛さや悲しみ、苦しみなど)が強くなる可能性が高くなる。

そのような時期において人間がいかに豊かに活き活きと生きていくか、生涯発達を捉える上で必要とされるものは何かの問いかけが、超高齢社会の現代人が直面している課題である。

エリクソン (Erikson, E.H., 1997) が捉えたライフサイクル論は、自我に焦点がおかれ精神の部分(潜在性)が欠けていた。晩年、彼は超越を第9段階として捉え、それを非常にネガティブなものとして捉えている。人生初期に形成された「信頼形成」を基とした「相互依存」として希望を託している。ネガティブ要素として捉えている相互依存についての詳細な言及はされていない。⁴⁷⁾

西欧では、自我の統合がテーマであり個人主義が精神の基盤となっている。

しかし、身体機能が衰退する高齢期には、自我を確立し個人を重んじ自我統合をテーマとした西欧社会においても、「相互依存」が高齢期における最終的なテーマとなっている。さらにそこには本質である「信頼性形成」から培われた「希望」によって生きる意味を捉え、それが人生に対する「超越」に向かう鍵となるという点をエリクソン夫妻が指摘していると捉える事ができる。(Erikson, 1997)

エリクソン夫妻が超高齢期の発達を捉える上で必要かつ重要な要素として人間の本質を挙げている点に着目しなくてはならないだろう。

マズロー (Maslow, A.H. 1995) は、ユングの個性化の概念の発展系であると捉える事ができる。人間の欲求を人格発達の動機づけと捉えその流れをピラミッド型で表した。マズローは人格発達において人間の欲求が動機づけとなり自己実現、自己超越の概念を導き出した。さらに自己実現が最高潮に達する体験を「至高体験」と概念づけそれを宗教的な体験として捉えている。⁴⁸⁾

マズロー (Maslow, A.H. 1968) のメタ理論は、人間には本能により高次に向かう欲求が潜在性としてあるという事を捉えている。マズローの欲求説は、人間の動機づけ理論に大きな影響を与えている。人間の欲求の本質が他者や社会への働きかけに向いさらに人間社会全体としての幸福感に向いさらに、自己超越について言及している。又マズローの自己実現の概念は、論理的であり、個人の幸福を捉える上でその概念が用いられることが多いと言えるだろう。したがって人間社会全体性としての幸福感を考える上でその再現性に関しては、実践的な位置づけがなされたとは言い難い。⁴⁹⁾

ジェンドリン (Gendlin, E. T. 1998) はユングの夢に対する概念について高く評価している。⁵⁰⁾ ユングが潜在状態の中に超越機能を見出していることである。ジェンドリン (Gendlin, E. T. 1998) は顕在(目覚めた)の状態とつながるために、身体を中心に注意を向けて、そこでもやもやする存在(意識されていない何か)に身体感覚的なところで注目する。その注目に身体感覚に触れるものあるいは含んでくるものや自分の納得できるものが出てきたりするそういった現象を「フォーカシング」と呼んでいる。⁵¹⁾

またその感覚を「フェルトセンス」と名前を付けた。

このフェルトセンスは、顕在(目が覚めた状態)でアクセスできる「統合性」、あるいは「創

造性」とも関係していると考えている。

ジェンドリン(Gendlin.E.T.,2004)は,そういう統合性や創造性の可能性を秘めた感覚であるフェルトセンスを発見し,提唱し検証した。そして誰もが実践可能な方法としてフォーカシングやTAE (Thinking At the Edge)を位置づけた。⁵²⁾

フォーカシングをカウンセリングに還元する方法を体系化したものがフォーカシング指向心理療法(Focusing Oriented Psychotherapy)である。今日フォーカシングは,クライアントが「自分の内なるクライアント」と相談しながら問題を解決するプロセスをカウンセラーがクライアントの体験過程に添う形で援助していく方法で進められている。(Gendlin.E.T., 1982&1991)⁵³⁾

ジェンドリン(Gendlin1996)は,フォーカシング指向心理療法において大切なことは,第一にカウンセラーとクライアントの関係性であり,第二に傾聴,第三にフォーカシングを用いるとしている。⁵⁴⁾

ジェンドリンの理論は意味創造理論であり,身体感覚に着目し体験過程(潜在性)を身体で感じその感覚に着目しそこから他者や他のものとの相互交流によって新たな意味を創造していく事であると考えている。

筆者はジェンドリンが捉えた理論が,人間の生涯発達や人格統合に関係しており,「老いの超越」を捉えていく上で「統合性」や「創造性」が深く関係すると考えられるので,超高齢社会における高齢者の心的適応の内的発達の機構を捉える上で深くかかわっており,生涯発達理論や人格統合理論は筆者のテーマである「老いの超越」を考察する上において意味が深くそこを活用していきたいと考えた。

4. これまでの研究の問題点に関して

これまで高齢期の発達を捉える上で先行研究から捉えて欠けていた点を以下に示す。

これまで老年期の発達は、エリクソンの捉えたライフサイクル論・第 8 段階として自我の統合 VS 絶望の課題が顕著であった。しかしエリクソンの理論は 1970 年代のアメリカの白人男性社会を主に捉え、当時の寿命から高齢者を 60 歳前後と捉えていたため、現代のような平均寿命が伸び機能が衰退し身近な人との喪失体験を繰り返す喪失期の発達の意味という捉えかたはなされていなかった。

一方トーンスタンが捉えた老いの超越の概念は、離脱理論の一段上の捉え方として機能が衰退する老年期のポジティブな側面として捉えられている。

トーンスタンはジェロトランスセンデンスを人生の危機的状況によって阻害されまた促進されもすると捉えている。老いの超越は、最終的には宇宙との一体感と言う次元として捉えているがスピリチュアルな側面が強く個人がどのようにして喪失や衰退期に老いの超越の次元に向かうかの道筋に関しては十分に捉えきれているとは言えない。ゆえに高齢期の発達を捉えるにあたっては、エリクソンが捉えた自我統合 VS 絶望のマイナス要素としての絶望側からトーンスタンが捉えた第 9 段階の老いの超越に至る移行期の道筋を捉える必要がある。その方法として個人の内的な意識の流れを捉える必要がある。しかし内的な意識の流れは主観的であり系統だった手法というものが少なかった。これまでも臨床的に内的な意識の流れを捉えることは試みてこられていたが難しかった。その理由を以下に示し新たな手法を本研究で試みる理由を示した。

①まずこれまでの発達研究にとっては、潜在意識（フェルトセンス）を直感のようなものとして扱い、分析の手順を明確に示すことが出来にくかったことが系統的でなかった理由として挙げられる。

②再現性がなかったこともきちんとしたステップを確立することが難しかったことが理由だとして挙げられる

③ジェンドリンの理論は、潜在意識を扱ったフロイド、ユング、ロジャーズとの共同研究に至りその発展形であり今ここでの「あるがままの状態」を、身体に注意を向けフェルトセンスを使って感じ潜在意識と顕在意識を相互に行き来する過程で体験（経験）から思索するという事だと思われる。

その手順としてフォーカシングを行ない TAE ステップを踏むことで可能となる。TAE ステップの手順を踏むことで、論理の枠組み(文法)に体験過程(フェルトセンスから感じた言葉)をのせる事によって新たな経験値の概念パターンを見出すことが可能となり、それが人格統合に関係しひいては、変化が見られ認知の変容が見られる可能性があるという事だと思われる。他者との相互作用により（インタビューの場合は人だが自然やその他の相互作用による）分析者側の見え方、捉え方が変わる事から現象の見えが変わり他者との相互作用（インタビューの場合はトランスクリプトから感じるフェルトセンス）で新しい可能性に開かれそれが成長につながるという視点だと思われる。

④ジェンドリンの理論的背景は現象学を基盤にしており根本は暗在性(潜在性)の哲学であり、体験過程から意味を創造し他者や万物との相互作用によって新しい価値や意味を切り開く可能性があると思われる。

⑤ジェンドリンは意識の流れを身体性に着目して捉えようとした。この理論は、人間の身体は、人間が感じている事を間主観的に自分の体験から質的に感じる事が出来るという視点によるものであると考えられる。つまり同じ身体をもつ種が同じ人間であればそれは理

解（創造的理解）が可能であるという観点によるものである。単に現象自体があるのではなくその現象をどのように経験し認識するかは常に何らかの関心によって重要性を裏付けていると考えられる。人間がいかに経験するかの意味を理解することは相互に作用している現象を捉えているという視点によるものである。それには身体性によると考えられる。身体は潜在性（無意識）を帯びており身体感覚を感じそこから体験過程の意味を他者や他物との相互作用によって新たな意味を切り開く可能性があるという観点である。

例えば人間はトンボが捉えている世界は身体感覚から感じるができないが、同じ身体をもつ種が同じ人間が感じる事であれば相互に理解できるという観点によるものである。

理解するという事は新たな意味を創造するという事である。そして個人のフェルトセンスから感じた体験（経験値）は普遍性をもつ。経験は多側面でありその意味にはなんらかしらの類似性があるという視点からである。

ジェンドリンの理論的背景の基盤は現象学であり身体感覚に着目しそこから感じているものを意識化する実践法として臨床的に TAE やフォーカシングを位置づけていると考えられる。理論的背景は19世紀後半、フッサールが捉えた志向性の概念が基盤となっており個々人の質感つまりクオリアやメタ認知など個人の感じるそれぞれの質感・気付き・志向性を表現することが普遍に通じるという視点であると考えられる。

第3節 本研究の意義と研究目的

1. 先行研究からみた本研究の意義

高齢社会といわれる今日、誰もが80歳、90歳を生きられるようになった。年を重ねるということは、そこに辿りついた人しか知りえない精神状態に到達するという面がある一方で身体的衰えや病をもたらす時期でもあるという二面性をもっている。このように衰え、病や死、それに伴う不安といった状況の中であって人間がどのように生きるかが問われている。

本研究は身体機能が衰退する高齢期に老いや死が一般的にネガティブに捉えがちであるがもっとポジティブに老いや死を捉え再考すべく生涯発達の観点に着目した。

機能が衰退する高齢期は思考が内面化しやすい特徴がみられ心的適応が発達に与える影響は大きいと考えられる。ゆえに高齢期の内的構造を解明する必要性を言及した論考は多い。しかし個人の内的構造にアプローチするのに系統だった手法はこれまで少なかった。結果内的構造を系統だった手法で可視化することはなされておらず知見もほとんど見当たらない。

2. 研究目的

本研究は、老いをネガティブに捉える事が一般的であるが、老いをもっとポジティブに捉えていく必要があるとの視点にたち、加齢という現象の老いの本質を探り、それに起因する高齢者の心理的適応の発達の機構を推察し支援策を検討する事が目的である。そのために以下の4点を具体的な目的として設定した。

- ① 高齢者が老いや死をどのように捉えているかその大まかな内的要因が何かを量的調査により統合感尺度を作成し因子から大まかに選定する。
- ② 調査研究から質的研究のカテゴリー分類の際の説明概念を選定する。
- ③ 現象分析（TAE）によって高齢者の心的機構を捉え内的構造を可視化する。
- ④ 高齢者の心的機構を支える支援策を検討する。

第4節 論文の枠組

本論文における研究の基本的枠組みを提示する。とりわけ、「老いや死」の捉え方は非常に主観的であり当事者の世界観があることから個別に着目した文脈からの解釈によってでなくては見出せない側面がある事を言及し、TAE という新たな手法を用いる有効性について論及する。

第1章では、先行研究をレビューし、生涯発達の視点からエリクソンの捉えたライフサイクル論に着目し発達課題としての「人格統合」とトーンスタンの捉えた「老いの超越」と言う概念に着目した。これまでの老年期の発達課題として取り挙げてこられたエリクソンのライフサイクル論の第8段階とトーンスタンの捉えた概念を第9段階として捉えその移行の過程に着目し高齢者の内的構造を可視化する必要性について言及した。

第2章方法について言及した。本研究のテーマである老いの超越の質的意味を探究するためには第1章でまとめた先行研究の中で老年期の発達課題からエリクソンのライフサイクル論とトーンスタンの老いの超越の概念から検討する必要がある。そのためにまず既存の尺度を用いて量的調査を実施し高齢期の心的な大まかな特徴を因子項目から選定した。さらに量的調査によってでは抜け落ちてしまう高齢者の心的特徴を説明概念から抽出し質的調査を実施することとした。質的調査では本研究テーマである老いの超越の質的意味を明らかにするには、既存のやり方では現象を細かく捉える事に限界があるため現象学的アプローチによってでなければ見出しにくい点を論及した。さらに臨床的に応用したフォーカシングやTAE という新たな手法を用いる有効性について言及した。

第3章の調査研究では、C市の生涯大学において、トーンスタンの老いの超越尺度と新たに統合感尺度を作成し老いの超越に至る道筋の関連要因を探索した。結果、「前向きさ」「老いの受容」「役割喪失」「一貫性」「孤独」「自然(宇宙)」の6つの要因が挙げられ「人生に前向きな人は老いの超越が高い」との結果が得られた。6つの要因をもとに詳細な検討を重ね質的調査に向けたインタビューガイドを作成した。

量的調査で得られた結果「前向き」「老いの受容」「役割の喪失」の質的意味を質問項目から詳細に検討した。その結果「諦観」、「受容」「達観」という構成概念を尺度から見出した。

さらに先行研究から質問項目の詳細なる検討を行ない「意欲」「習慣」「絆」「寂寥」「恐怖」「喪失」「回顧」を抽出し高齢者の心的機構を質的研究で推察する際の10個の説明概念とした。

第4章では量的調査研究結果から作成したインタビューガイドをもとに、高齢者50人に半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。逐語化したトランスクリプトをもとに老いや死の捉え方(パターン)に着目し個別に概念パターンを取り出した。その際、調査研究から抽出した説明概念を基に現象分析(TAEステップ7,8を用いた)を行ないいくつかのカテゴリーにまとめることを行なった。50人全てを分析した結果これらのカテゴリーに属さない特徴が3名挙げられた。分析からそれらは超越もしくは達観に近い特徴をもつ事が推察された。その中で最も特徴が見られた#14の実例を選びTAE手法を用いて質的研究法でさらに細かくデータ分析し老いの超越の捉え方のモデルとした。

#14の実例から「澄む・あきらむ」の仮説モデルをつくりそれは家族が伝承と言う形で育んできた「老いや死の捉え方」の実例として位置づけた。

仮説モデルをもとに他の49実例を結果図に位置づけた。

第5章では本研究の総合考察を述べ今後の支援策と課題を検討した。

本研究では、老いの超越の至る道筋として発達課題に着目し第8段階と第9段階の移行期の現象を検討した。第8段階の自我統合対絶望の絶望の側から捉えた結果、諦観と言う概念が諦らむ、明らむ、澄むあきらむと変化し超越に至るプロセスを捉えた。

以上述べた論文構成の枠組みを図1-1に示す

1. 本論文の構成の枠組

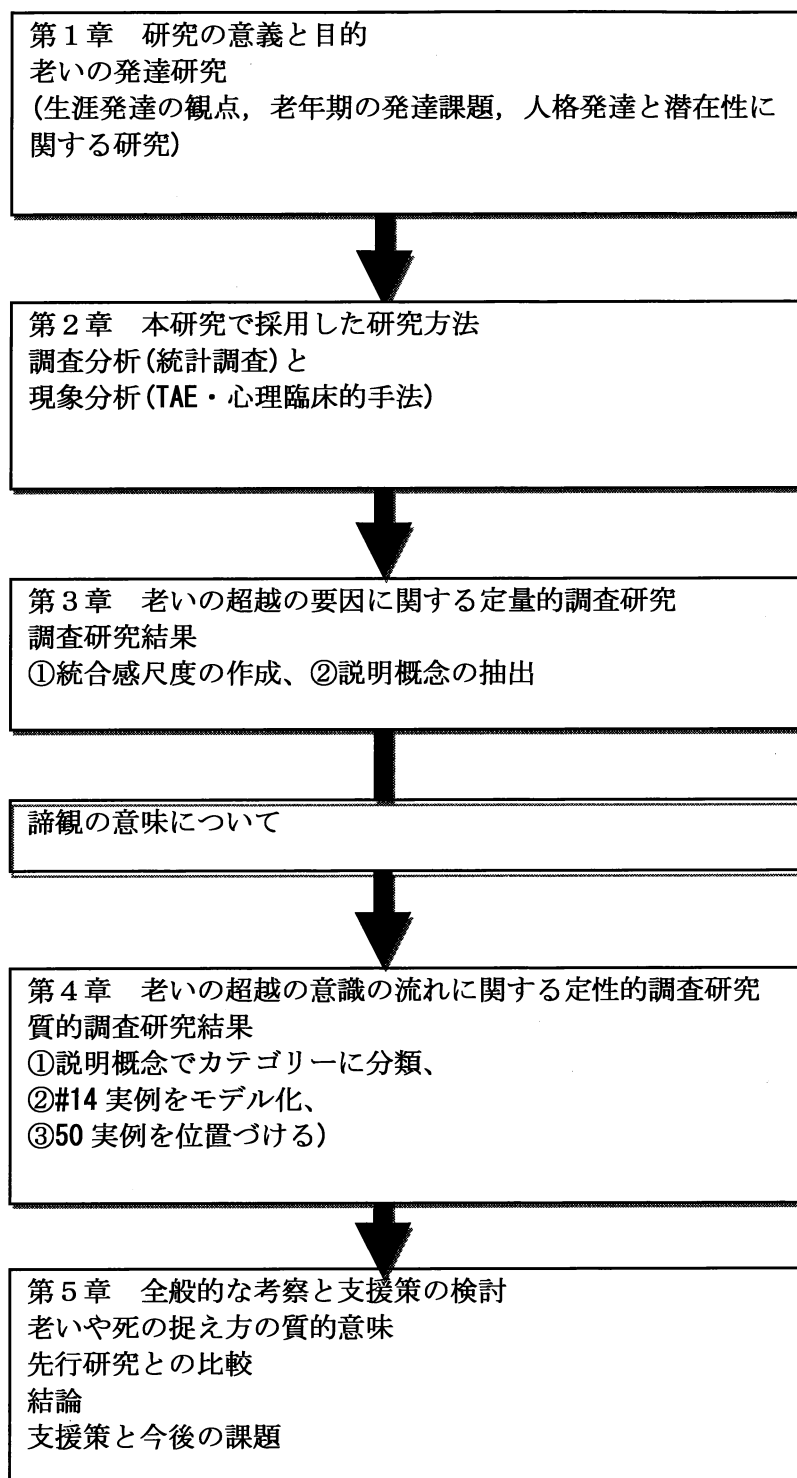


図1-1 論文構成の枠組

第2章 本研究で採用した研究方法

本研究は、一般的にネガティブに捉えられがちな衰退期や喪失期である高齢期をもっとポジティブなものに再考していくために生涯発達の観点に着目し高齢者が老いや死をどのように捉えているかの捉え方に着目した。先行研究からエリクソンのライフサイクル論の第8段階の自我の統合対絶望のネガティブ側である絶望から捉え第9段階にトーンスタンの老いの超越の概念を捉え第8段階から第9段階の移行期の意識の流れを捉えるべく既存の尺度から抜け落ちている点を明らかにするためまず調査研究を実施し、そこで捉えた要因の質的意味を質的研究によってより詳細に捉えていく事を行なった。

第1節 調査分析

1. 調査分析の概要

老いの超越を捉えるためには、まず高齢者の内的要因を選定する必要があると考えられる。調査分析では、先行研究で述べられているエリクソンの発達課題の第8段階の自我の統合・絶望とトーンスタンが唱えたジェロトランスセンデンス（老いの超越以下老いの超越とする）に着目することにした。

エリクソンのライフサイクルは、当時的高齢者を60歳以上と捉えていた点や、自我の統合に視点を当てて捉えたという点で、衰退期としての視点は十分に捉えられていない。そのため第8段階から第9段階への移行の道筋をエリクソンの自我統合 VS 絶望の発達課題とトーンスタンの論考にある老いの超越の概念から検討することにした。

2. 既存の尺度間からの検討

トーンスタンは老いの超越を、老年期にそれまでとは違った価値観の変化によってメタなパースペクティブであると捉えている。⁵⁵⁾この概念は、ポジティブな思考であり、機能が衰退する老年期をいかに豊かに過ごすかの課題についてトーンスタンの概念は有効であると考えられる。そこでトーンスタンが作成したジェロトランスセンデンス尺度と新たに第8段階を捉えるにあたって統合感尺度を作成し第8段階から第9段階への移行の大まかな要因を選定し検討するためにSPSSを用いた統計手法による調査分析から検討した。

既存の尺度から相関係数を捉え因子項目にネガティブ要素とポジティブ要素が捉えられた。

第2節 現象分析

現象学とは他者の経験を理解しようと探究することであり、どのように認知しているかを理解し意識の流れを捉えようとするものである。どのように人間が自分たちの生きている世界を理解しているかを研究するものである。

1. 現象学的アプローチの源流

現象学は、19世紀後半にドイツの哲学者フッサールが提唱した人間の生きた経験の本質を研究することを目的としている。フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl) は「間主観性」という概念を提唱した⁵⁶⁾。私たち人間はその存在について間主観的経験を共有し他者が理解している世界について自分の経験に付与する意味から質感としてその意味を思考することが可能であると考えられる。

このことは共通の世界を共有している共同体を創り上げている認識は複数の主観性による事を意味すると考えられる。

この事は対人援助であれば必ず作用する機能である。対人援助は援助者と当事者とが共に生きる世界—内—存在である。人間が他者との関係性の中で「今ここ」で展開している体験過程は、その瞬間からすでに相互に作用しており、何らかの影響を受けていると考えられる。ゆえにそれは例え過去の記憶をたどったとしても「現在今ここ」で生起していく新たなプロセスでありそれはそれ以前のものとは同じではないと捉えられる。

人間とは本質的に単独の現象ではなく、他者—と共に—生きる—世界—内—存在という理解に基づくものである。(Martin Heidegger, 1962)⁵⁷⁾

2. 解釈学的現象学の源流

現象学は、ドイツの哲学者フッサールが1930年代諸学の危機と現象学で旧来の合理的なデカルト的内と外、2文法の実証主義に対抗し「志向性」と言う概念を提唱した。⁵⁷⁾フッサール提唱した志向性の概念は、「何かに向かう方向」を意味する。関心(→志向性)とは、人間が状況において意識無意識に方向づけられる(direction)有り方のことである。関心とは、人間が世界に巻き込まれ、世界に関与している有り方を言い表す概念である。関心とは、関心事という顕在性として現象するがゆえに、状況の中での気づきを必然的に決定する。それは質的なもので、その人にとってその関心事が持つ意味において記述されるしかないものである。つまり、関心がその人にとって何が重要か、を構成すると考えられる。意識(気づいていること)はその世界の中に在り、常に意図的である。⁵⁸⁾つまり何ものかへの意識がありそれによって現象を捉え体験していると考えられる。現象学とは人間の意識の流れを研究する事を目的としている。その後メルロポンティ(Maurice Merleau-Ponty)などが知覚と現象学を位置づけた。

現象学は現象がなぜ起こるかの問いと同時にどのように現象を体験しているかの問いが心の現象の連続性を「観る」ということにつながると考えられる。解釈学とは実践と認識の双方の関わりによって新たに形成される意味が受け継がれていくものだと考えられる。

このような捉えると人間同士の関わりあい捉えようとする場合、解釈学的現象学によるアプローチは個人の内的世界を可視化することに適した手法であると考えられる。

以下に欧米における現象学的な研究の3つの流れを表2-2にまとめた。

表 2-2 欧米の現象学の 3 つの流れ

| フッサール中心 | ハイデッガー中心 | オランダ学派 |
|--|--|--|
| デューケーヌ学派（米国：ピッツバーグ, デューケーヌ大学中心. 心理学における経験的な現象学的研究で先駆的. | ハイデッガー解釈学または解釈的現象学 カリフォルニア大学での看護研究等. | オランダ現象学（ユトレヒト学派（大学）中心. 各専門分野の実践的な関心事に現象学的方法を用いる一派.） |
| ①フッサールの現象学的認識論を受け継ぐ.（形相的現象学, または記述的現象学：直感的記述） (interpretative phenomenology) | ②ハイデッガーやメルロ＝ポンティの現象学的存在論：解釈に重点を置く. (interpretive phenomenology) | ①記述的現象学と②解釈的現象学＝解釈学的現象学 (hermeneutic phenomenology) |
| 心理学：「学習」 Giorgi1975, 1985), 「感情の理解」 (Van Kaam 1959) 「怒り」 (Stevick1971) 「犠牲になること」 (Fischer&Wertz1979) | <u>ベナー*(Benner) &ルーベル(Wrubel) ドレイファス(Dreyfus)</u> | ランゲフェルト（教育学） ボイテンダイク, リンスホーテン（心理学）, コーエン*（看護） |

（出典：解釈学的現象学による看護研究 p9-p14）

3. TAE (Thinking At the Edge)

TAE はジェンドリン(Gendlin1996)と夫人のメアリーヘンドリクス (Mary Hendricks)が提案した理論構築法で言葉にする前の重要だと感じた身体感覚＝フェルトセンスを言語と照らし合わせる過程で新しい意味の推進を生み出したり最終的に理論構築まで可能な系統だった方法である⁵⁹⁾

TAE の理論的背景は、ジェンドリンの体験過程と意味の創造理論を基にしている。人間の社会は、相互にやりとりする多様な意味を含む行為の上に成り立っている。この行為と意味と言語の関係についてジェンドリンは、プロセスモデルで説明し、人間のさまざまな行為の意味を明らかにすることを可能にする新たな可能性としてTAEを実践方法として位置づけている。(Gendlin.,1991,2009)⁶⁰⁾

TAE はシカゴ大学の哲学講座から生まれた理論構築法である。論理形式(TAE ステップ)と非論理(体験過程)を行き来する過程(ジグザグ思考)で、新しい意味や気づきを身体感覚から感じそれを繰り返す中から個人の観念の構造体(経験値)をとりだしていくことを系統だてている。(Gendlin.,2009)⁶¹⁾

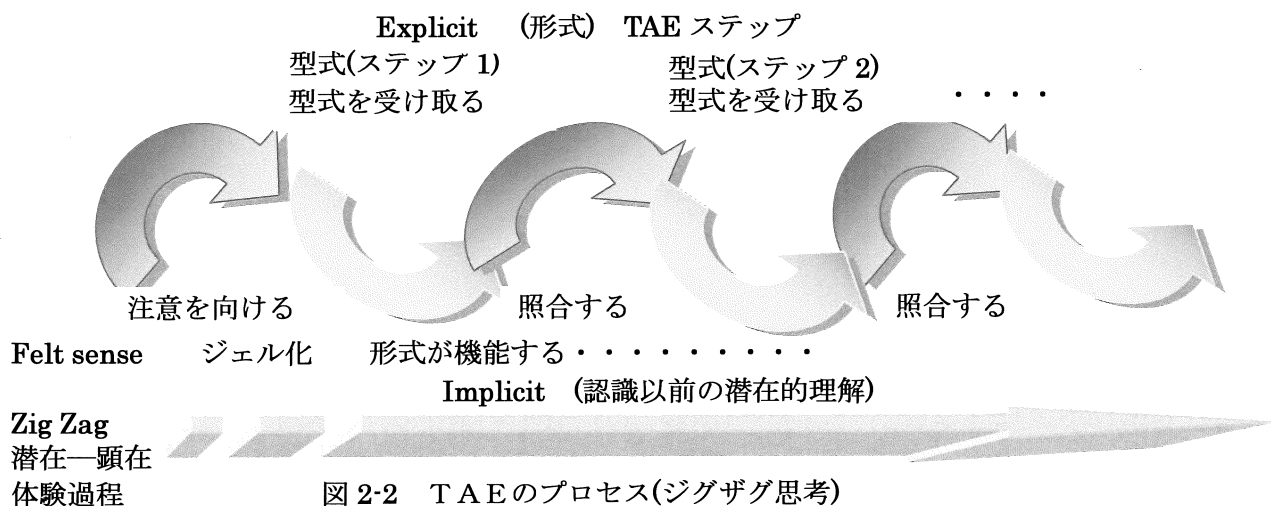
まず身体感覚的なところからフェルトセンスを感じ内的に感じられる対象(直接照合体 Direct Referent:DR)を形成させる。感じているなにかを身体感覚と照合する事をジェル化と呼び、形成したフェルトセンスと形式ステップを照合させる。形式ステップを踏むことで形式が機能し、フェルトセンスが応答し展開していく。

形式と応答させることを繰り返すうちに、あらたな概念パターンとして表現が可能となる。概念パターンとは文脈で捉える。文脈は体験様式であるのでさまざまな側面を持っていると考えられる。従来の既存の概念に至る前のさまざまな体験の側面を身体感覚で感じる中で意識の流れ(思考)にあがってくるがその意味はもともと行為による潜在性(無意識)を帯びていると考えられる。

TAE とは身体感覚(フェルトセンス)と形式(TAE ステップ)の両方を使い、両方を行き来しジグザグに進みながら思考し、個人のフェルトセンスから生み出された概念パターンから理論を構築する系統だった方法で 14 ステップからなっている。

フェルトセンスは、他のいろいろな科学的アプローチ、その時代の科学ではアプローチできない現象の側面を見出すために心理臨床に現象学を応用しフェルトセンスやTAEは生まれた。TAE とは感受概念やフェルトセンスを KEY にして新しい現象や概念パターンを見つけていく新たな可能性を秘めた手法である。

以上の説明を踏まえTAEプロセスの潜在と顕在をジグザグする思考を図2-2に表した。



TAE ステップは 14 個からなり、3 つのパートに別れている。

TAE ステップおよび質的研究に応用した分析手順に関しては補論 2 に添付した。

TAE ステップは固定的なものではなく、部分的に使ったり順序を変えて使う事も可能である。

ブルーマー(Herbert Blumer,1991)⁶²⁾が、「感受概念とは、明確な基準や属性をもたず、ただ一般的な方向を示すだけのものであるが、しかし、そのことによって現実に対して柔軟に接近でき、事象をくまなく明らかにすることが可能になる」と述べている。

また彼は個別性が普遍妥当性であると述べている。この事は個人のフェルトセンスから感じた体験は普遍に通じるという意味と類似性が認めらる。また生活世界が複数の主観性から成り立っている事を意味する。

ディルタイ (Wilhelm Christian Ludwig Dilthey1974)⁶³⁾は、感受概念について人間は他者が体験したこととまったく同じ体験をすることは出来ないが、自身の体験をもとに他者の体験の意味を創造し、その人の体験を追体験することが可能であると述べている。

TAE は身体的に感じられる『感受概念』が『フェルトセンス』として位置づけられていて (felt sense, felt meaning) フェルトセンスを使って分析していく。表 2-3 参照

表 2-3 フェルトセンスについて

| | | |
|----|---|---------------------------|
| 感受 | = | 研究者が、研究対象から感じ、受けとる「何か」 |
| 概念 | = | 単なる身体感覚以上の、研究の出発点にするに足る感覚 |

TAE はカール・ロジャーズのパーソンセンタードの観点によっている「パーソンセンタードの観点」とは、研究対象者（研究協力者、被験者）を可能な限り尊重し、研究対象者がインタビューなどの研究協力のプロセスにおいて「有益な気づきや発見があった」と感じられるような研究を遂行することを目的とするものである。(C.R.Rogers.,1977)⁶⁴⁾

注 2) 解釈学的現象学的現象的学分析

解釈学的現象学的現象的学分析 (Interpretative Phenomenology Analysis, 以下 IPA と略す) とは、J.A.Smith らによって、臨床心理学の分野での実践的研究を解釈学の方法論である現象学として知られる哲学的思想の一派と関連する原理や方法によって特徴づけられるアプローチである。

人間のこころは非常に主観的なものである。ゆえにそれがいかなる意味を持つのかについて調査することは困難さを伴うと考えられる。

量的研究は、あらかじめ設定された設問からのみ結果が得られ、現象を大まかに捉えるのには向いている。一方で個人の体験や意識の流れを創造的に可視化するには向かない。

4. 質的研究法と TAE

本テーマは、質的研究法を用いて接近することが妥当であると思われる。

質的研究法も手法はさまざまである。質的手法の代表的な手法の背景を以下に記した。

1) K J 法

【背景】：日本の地理学者、文化人類学者である川喜田二郎によって、いかにフィールドワークを行い、まとめればいいのかという必要性から作り出されて研究手法である。(川喜田 1967)⁶⁵⁾は、自らの研究を「野外科学」と称し、「書斎科学」「実験科学」と対比させた。

「野外科学」とは、

- ① 観察し経験する場所が実験室ではなく野外
- ② ありのままで複雑な諸要素が絡み合っており、分析的研究に適した対象（フィールドワーク）
- ③ 実験室の分析対象は繰り返し再現可能だが、野外科学での対象は一回性を帯びているという特徴を持っている。

K J 法はありのままの、そこにだけしかない自然、個性的な世界を研究するにふさわしい研究方法である。

【方法】

集めたデータをもとに

- ① ラベルづくり（一行見出しづくり）
- ② グループ編成
- ③ 図解化
- ④ 叙述化

類似例が出ないカードを捨てない

2) G T A (Grounded Theory Approach)

【背景】

1960年代のはじめ、カリフォルニア大学の2人の社会学者バーニー・グレーザーとアンセルム・ストラウスは、患者と病院のスタッフの社会的相互作用に関するフィールドワークプロジェクト遂行の過程で形作られた研究方法をまとめて公表することとなった。これがG T Aである。理論よりもデータの側に重点をおき、データに密着(grounded on data)しつつ解釈を積み上げて理論の形にまとめていく研究のあり方として提起した。⁶⁶⁾

ストラウスがシンボリック相互作用論の主要な継承者であったことから、G T Aはシンボリック相互作用論の流れを汲むと考えられることもある。その後、2人は、G T Aの具体的な手法をめぐる対立し、複数のG T Aが存在する状況となっている。ストラウスはストラウス・コービン版を作った。

【方法】

- ① データの読み込み
- ② コーディング プロパティとディメンションに留意して行う
- ③ 理論的飽和

3) M-GTA 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

【背景】

木下康二は「(ストラウスもグレーザーも) コーディングの方法に関して言えば道具を用意はしてもその手順を体系化しきっていなかった」との問題意識のもと、実際に分析する者が分析を行ないやすいよう手順を改善・明示化し、修正版を考案した。M-GTAと呼ばれ日本で広く行われている。実際に分析する者が分析を行いやすいように手順を改善・明示化したのが、M-GTAである。⁶⁷⁾

【方法】

- ① 分析テーマと分析焦点者に照らし、一つの具体例(ヴァリエーション)から、他の類似具体例をも説明できると考えられる説明概念を生成する
- ② 概念をつくる時は分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例などを記入する
- ③ データ分析を進める中で、新たな概念を生成し、分析ワークシートは個々の概念ごとに作成する
- ④ 同時並行で、他の具体例をデータから探し、ワークシートのヴァリエーション欄に追加記入していく。具体例が豊富にでてこなければ、その概念は有効でないと判断する
- ⑤ 対極例についての比較の観点からデータをみることにより、解釈が恣意的に偏る危険を防ぐ。その結果をワークシートの理論メモ欄に記入していく
- ⑥ 次に、生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討し、関係図にしていく
- ⑦ 複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要を関係に文章化し(ストーリーライン)、さらに結果図を作成する

4) TAE (Thinking At the Edge)

本研究では「老いと死の捉え方」に着目し、今ここで起こっている現象をそのまま取り出すという視点から現象学をベースにしたTAEという手法を用いる事とした。本研究でTAEを用いる理由は以下の点からである。⁶⁸⁾

- ①TAEは体験過程を感情体験と位置付け、細部を落とすことなく個別のデータに着目し分析者のフェルトセンスを使って分析していくことで現象を柔軟に捉えていく方法である。
- ②TAEは、身体的に感じられる一種の「感受概念」であるフェルトセンスを分析手順に位置づけ、系統的活用する。
- ③TAEステップが具体的で再現性を担保している。
- ④TAEは「体験過程と意味の創造」という理論的背景との関係が明確である。
- ⑤個人の体験過程から普遍を照らす可能性がある。
- ⑥パーソンセンタードの観点に立ち研究を遂行する上で被験者にとって有益性が得られる可能性がある

背景理論などにより、さまざまな質的研究法がある。研究目的や研究文脈によって、適切な方法を選択したり応用したりすることが求められている

TAE と他の主な質的研究法との違いを表 2-4 にまとめた。

表 2-4 質的研究の特性比較について

| GTA(Grounded Theory Approach) | K J 法(Kawakita Jiro) | TAE (Thinking At the Edge) |
|--|--|--|
| 社会学 | 文化人類学 | 現象学 |
| バーニー・グレーザー アンセルム・ストラウス | 川喜田二郎 | ユージン・ジェンドリン (得丸智子) |
| データから新しい理論を生み出す方法：データ収集⇒コーディング⇒メモ⇒理論化 経験を切片化する(経験理解には役立つが理論構成するためのものではなく理論の発展には現象学の方が適している) | 対象に直接に接することにより，その行為，認識，感情について知ることができる 図解化に適する | 質的研究の新たな可能性として「潜在性の哲学(プロセスモデル哲学)」：他者による検証可能性を持つ 体験の意味を創造できる 質的研究法の中で理論構築法がメソッドに組み入れられているのは TAE だけである．フェルトセンスを用いフォーカシングを分析場面で多用していく |
| チャート式 | カテゴライズ | 図解(メタファー) |
| 複数をまとめる | 複数をまとめる | 個別に焦点化 |

4 IOFI 原理について

TAE は現象学が基盤となっていて、理論的背景は意味創造理論である。

体験の意味創造性は莫大で誰の人生のどんな地点（時点）からでも、フェルトセンスを感じ、シンボルと相互作用させて概念化をおこない、その人独自の理論（観念の構造体）を創ることが可能である。つまり個別の身体が人間身体の普遍的なあり方を具体化している以上、個人理論は「普遍的なもの（X）」が「今ここ」で具体化した一つの実例であるといえる（得丸 2010）⁶⁹⁾。

ジェンドリン(1993) は『体験過程と意味の創造』で IOFI について述べている。⁷⁰⁾

IOFI は、「It instance of itself」の省略形で、IOFI 原理とは「それはそれ自身の実例である原理」という意味で、どんな個も「そのようなもの」の一つの実例であるという意味である。「そのようなもの」としての「まとまり」の先にあるものが「普遍的なもの（X）」である。（Gendlin, E.T. 1993）⁷¹⁾

個人がそれぞれの実例を示し合うことで普遍的なものを照らし合い、映し出すことができるという考え方である。この関係をジェンドリン(1993)は「個が普遍に参加する」

(Particulars “participate” in universals,) 「全体が部分の形を抱く」(the whole also bears the forms of the parts,) と表現している。⁷²⁾ 大切なのは、個人がしっかりと「個」を創造し、それを他者に開くことでありそれにより、普遍的なものが、次第に形を現してくるといなのが、IOFI の考え方である。

IOFI 原理で大切な事はどのような個人の体験にもそれぞれの意味がありそれを個人が思考し他者に示すことで普遍的なものが徐々に現れ、それが相互の了解に至り最終的に普遍につながる可能性があると考えられる。

5. 交差機能について

「交差 (crossing)」とはそれまでたちあられていなかった側面がそのことによって新たに創り出される側面の機能である。

得丸(2008)は「同一のパターンを繰り返し適用することにより、類似性が共通の組織に織り込まれていき、織り込まれ得るように類似性が立ち上がってくる」と指摘している。⁷³⁾

交差は精巧な関連を持ち続けている有機体的なプロセスに複雑にフィットできるものを生み出すがそれ以前には、そのようなものとしてはそこになかったものなのである。

ジェンドリン(1993)は交差によって新たな側面が立ち上がる事について以下のように表2-5で述べている。

表 2-5 交差について

「我々は既に、他の経験された意味が新しい面の創造に含まれていた、ということに着目してきました。A の新しい面が A と他のものとの間の関係になり得たり、あるいはそれが他のもの B,C,D,E によって A と関連づけられたりするということや他の経験された意味が部分的にこの新しい面の性質を決定するという事を我々は示しました。(中略)例えば、我々は A の中の何が B と似ているのか? と質問することができます。我々は、B に我々が作ろうとしている A の側面を決定させるのです。もちろん、B はそれを十分に決定したりはしていません。何故かといえば、B がそれが成立する場合にまさに B であろうとするからです。我々はその代わりに、A の中に既にあるのですが、B にあてはまるような、A のある新しい面を探るのです。(筒井訳 1993 pp.192-194⁷⁴⁾)

例えば物事の見え方が安定しているのは、本来、視覚が他の体験から分離しているからではなく、あらゆる日常の関連物が、すでに互いに交差しながら通常の物事を生みだしていると捉えられる。つまり相互作用の中で交差は常に起こっておりそれが新しい推進につながりそこに新たな価値の可能性があると考えられる。

このように交差を現象の中で捉えようと、時間性に関しては過去と現在とは、異なった時点における2つの異なったものではないと考えられる。

過去は現在の中にあると捉えることが出来る。過去の体験は、現在の体験を形作る過程に深く関わっていると考えられる。例えば過去の事を回顧する時にも交差は起こっており「今ここで」の現象の捉え方に過去体験が交差して現在の認知に影響を与えていると考えられるからである。

交差は常に現象の中で起こっておりそれによってあらたな側面がたちあがりそこに現象の捉え方の変化が生じる可能性があると考えられる。

フロイドは「無意識」(からだ)が幼児期の行動を保持しており、これを反復しうることを発見した。つまり過去体験はいつでもすぐここにあるものである。

このように捉えようと交差はあらゆる体験に当てはまると捉えられる。

あらゆる瞬間はつねに、幾つもの互いに「交差」し合う中での過去経験を内包しており、その結果、現在に関する適切な知覚が形成されている事を意味していると考えられる。

交差の機能とはそれ以前には立ち上がってこなかった別の側面が創造されるということで、それにより新たな側面を生み出す現象であると捉えられる。

このように捉えるならば体験を交差することでより以上の推進が可能となると捉える事ができる。

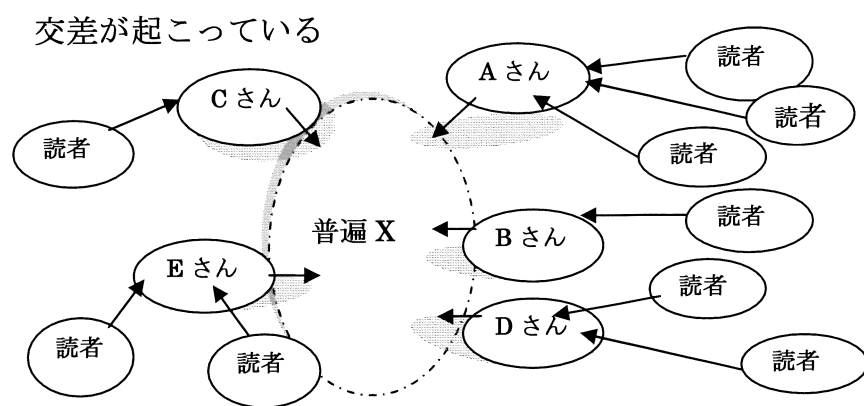


図 2-3 IOFI 原理のイメージ図 (ジェンドリンの意味創造理論に基づき図式化したもの)

インタビューの中での相互作用によって交差が生じこれまでたちあられていなかった側面が立ち上がりそこから新たな側面が生み出される。

交差は対人援助の中で、しばしば無意識的に起こっている現象であると言える。
交差は言語的、非言語的関わりの中で相互作用において起こっており現在(今ここで)の知覚に影響を与えていると考えられる。

得丸(2010)は、体験は多スキーマ的であるので、一つの体験から複数のパターンが取り出せると述べている。そして「正解」は一つではなく複数あり、それは、でたらめであることとは違い何でもよいわけではなく、不正解がないのでもないと述べている。⁷⁵⁾ フェルトセンスは自立的に有意味であるので、自身にとっての正解／不正解（当てはまる／当てはまらない）を見極め応答する力があると述べている。（得丸 2010）⁷⁶⁾ 体験の意味を問う質的研究の場合、分析者がインタビューデータを読んで感じたフェルトセンスをデータと応答させることを繰り返すプロセスの中から新たな意味を見出していく。分析手法に違いはあっても感じられた意味を問題にするものである。感じられた意味とは個人が身体感覚からその感じに焦点を当て「今ここで」どのように感じられるかという感覚・フェルトセンスから出発している。この点に着目すると質的研究が扱う意味は、研究者自身の視点によって多様であり誰がどのように研究するかによって意味の捉え方(身体的見え)によって異なりも出る。個人の体験が分析者の視点と複雑に絡み交差機能が生じるので独自性が出ると考えられる。しかしそこには秩序がありでたらめでは決していない。フェルトセンスから感じた体験は普遍性を持ちその意味にはなにがしらかの類似性があると考えられる。なぜなら研究にはテーマがあり研究協力者(インタビューイ)とは老いや死の捉え方を共通了解のもとで対話によって捉えていく事を行なった(本質還元)^{注1)}。ゆえに意味性を持った質感(クオリア、メタ認知など)が捉えられ全く別のものが捉えられるわけではないと考えられるからである。TAEはフェルトセンスを分析過程に位置づけ、そこからあらたな経験的意味を見出す可能性を秘めた手法であり「老いの超越」のテーマに適した方法であると考えられる。

研究者は協力者によって表出された固有の体験を1つの実存的意味(本質)として観て取ることができることを指す。本質観取された実存的意味が研究者の一人合点に終わらないためには、その意味が他の人々にとっても妥当性をもつであろうという根拠(確信成立の条件)を示す必要がある。このためには、研究者の目に映った協力者の「生」の体験の実存的意味を次に述べる「還元」と呼ばれる作業によって解き明かすことが必要である。

注1)「還元」が可能になる理由

研究協力者と研究者はコミュニケーションの基盤を共有する。そのため、話された言葉は断片的であつても、その言葉が背後に持っている全体の意味は暗黙に了解しあっているから還元は可能になる。

第3章 老いの超越に至る要因選定と検討のための定量的調査研究

要旨

老いの超越を捉えるためには、まず既存の尺度を集めどこに抜けがあるかを確認するための作業が必要とされる。そのために調査研究を実施した。具体的には、先行研究で述べられているエリクソンのライフサイクル理論を基に発達課題の第8段階の自我の統合・絶望とトーンスタンの唱えたジェロトランスセンデンス（以下老いの超越とする）に着目することにした。

エリクソンのライフサイクルは、当時の高齢者を60歳以上と捉えていた点や、自我の統合に視点を当てて捉えたという点で、衰退期としての視点は十分に捉えられていない。

一方トーンスタンの捉えた老いの超越は最終的に宇宙との一体として捉え高齢期のポジティブな可能性を捉えているがスピリチャルな側面が強い。そのため第8段階から第9段階への移行の道筋を捉える必要がある。またエリクソンの自我統合 VS 絶望の発達課題の絶望の側（マイナスの側面）から捉えトーンスタンの論考にある老いの超越へと至る道筋を捉え検討することにした。

トーンスタンは老いの超越を、老年期にそれまでとは違った価値観の変化によってもたらされるメタなパースペクティブであると捉えている。この概念は、ポジティブな思考であり、機能が衰退する老年期をいかに豊かに過ごすかの課題についてトーンスタンの概念は有効であると考えられる。そこでトーンスタンが作成したジェロトランスセンデンス尺度と新たに第8段階を捉えるにあたって統合感尺度を既存の尺度から作成し第8段階から第9段階への移行の大まかな要因を尺度の因子から選定し検討しそこで抜け落ちてしまう点を確認するために統計手法による調査分析を実施し検討した。

第1節 老いの超越の要因に関する調査研究

本章では、高齢者の心的発達に着目し、老いの超越の要因を特定すべく既存の尺度から統合感尺度を作成し因子を抽出した。既存の尺度ではこぼれ落ちてしまう点の大きなところを特定しそこを質的調査によって詳細に検討することとした。

1. 研究目的

本章の目的は、エリクソンのライフサイクル論の第8段階とトーンスタンの捉えた老いの超越・第9段階への移行のプロセスを「老いや死」の捉え方に着目し、老いの超越に至る道筋の要因をさぐり説明概念を抽出することを目的とする。

具体的には ①統合感尺度を構成し既存尺度の因子を選定する。

②選定した因子から説明概念を抽出する。

2. 方法

1) 調査対象者

C県生涯大学校K学園専門課程在学中の65歳以上の学生167名を対象に質問紙調査を依頼、実施した。具体的な手続きは、K学園長に電話で質問紙調査を依頼し、調査票を持参し説明を行なった上、了解を得てアンケート調査を実施した。調査依頼状、質問票、および返信用封筒を持参し全体ミーティング時間を利用させていただき調査内容を説明した上で質疑応答をへて配布した。167部配布し130部を回収（回収率78%）、男性81名、女性49名そのうち無記入部分がおおいもの（9部）を除いた121部、男性75名、女性46名（有効回答率73%）を分析対象とした。

2) 使用した質問紙の内容

質問紙法 老年期の価値観の質的変化との関係を老年期の発達課題の第8段階から第9段階への移行期のプロセスの大きな要因を調べるためにトーンスタン(1997)の老いの超越尺度10問を使用した。⁷⁷⁾トーンスタンの老いの超越生成の関係要因として3つの次元、「宇宙的次元」「一貫性」「孤独」が挙げられている。山口(2008)を参考に指導教授と質問項目を検討し調査票を作成した。（補論2参照）

山口(2008)で検討した項目は老年期の発達課題としてエリクソンのライフサイクル論・第8段階「統合」対「絶望」が挙げられていることからエリクソン心理社会的段階目録全56問のうち後期発達課題28問中高齢者の質問として適切でないと思われるものを省いた20問の質問項目から選択、老年期の統合感には死をどのように捉えるかという視点が大切であると考え臨老式死生観尺度から質問項目を選択、老年期の人生満足感を調べるために幸福感尺度を使用 植田,吉森,有倉(1992)⁷⁸⁾、老年期の孤独が自己内省の際に大切な要素となるという視点から高齢者の孤独と豊かさ 竹中(2001)⁷⁹⁾から孤独に関する質問を抜粋し計50問5件法にて質問紙を作成した。（補論3参照）。使用した質問紙の質問項目は山口(2008)の質問項目を再検討し統合感を捉える上で「統合」「死」「外見」「人間関係」「社会的役割」「経済・生活・環境」「能力(記憶, 体力)」「人生の意味(受容)」の8項目を質問項目とし質問紙には性, 年齢, 職業の有無(前の職)などの個人属性をたずねた。質問紙は5件法(全く当てはまらない=1点, よく当てはまる=5点)とした。

3) 調査日時と場所

2009年6月に生涯大学K学院にて専門課程の学生に質問紙を配布・回収を求めてアンケート調査を実施した。

4) 倫理的配慮

調査倫理に関わる注意事項を記載したものを添付し口頭で説明し了解を得た後にアンケートを実施した。

3. 分析方法

SPSS を使用した統計処理を行なった

質問項目はエリクソン E P S I を参考に検討を重ね表 3－1 にまとめたように 8 つの要因から検討しそこから 53 問を抽出し質問紙を作成した.

表 3-1 統合感尺度の作成のための質問項目 (53 項目)

*エリクソン EPSI 尺度からの項目である

| | |
|----------------|---|
| 人生の意味, 受容 | 自分の人生は一貫した意味があると感じている 私のこれまでの人生は、かけがえのないものだと思う 生きるということは厳しいことである *私は、悔いのない人生を歩んでいる 私にとっての人生は大波・小波の連続だったと感じている 人生は一生涯勉強であると感じている 人生には人のために尽くすことが必要であると思う |
| 能力 (記憶, 体力) | 近年、体力の衰えを感じる 近年、記憶力が衰えてきたと感じることがある 近年、目や耳が悪くなったと感じることがある 私は、物事をありのままに受け入れる事ができる 私は、自分の判断に自信がないと感じている 私は、この世の中でうまくやっっていこうなどとは決して思わない 同じことをよく言うようになったと感じることがある |
| 経済・生活・ 環境 | 自分に合った趣味を持つことは良いことだと感じる 以前と比べると物に対する執着心が少なくなったと感じる 都市部よりも田舎のほうが心地よいと感じる *たとえ本当のことであっても、私は否定してしまうかもしれない 話題の場所よりものんびりした場所のほうが心地よいと感じる 今の生活に満足している 近年、物よりも精神的な事柄に興味がある |
| 社会的役割 | 自分の役割がなくなったと感じる 今の自分の役割に意味があると感じている 困難な役割であっても意味があると感じている 私は、自分が役に立つ人間であると思う 私は目的を達成しようとがんばっている 社会的役割から一步退くことに心地よさを感じる のんびりと過ごすより何かに追われて過ごすことが好きだ 地域の中で役に立てることがあれば活動に参加したい |
| 人間関係 | *私は、自分がどんな人間であるのか良く知っている 自分には腹を割って話せる友人がいる *私は、人生をどのように生きたいかを自分で決められる 以前に比べると人間関係が希薄になったと感じる *もともと人間は、孤独であると思う 私には、充実感がない |
| 外見 (健康) | 顔のしわや体型が変化したと感じる 外見的に年をとったと感じることがある 自分が年をとったと感じることがある アンチエイジング【老化予防】を試してみたいと思う 健康に良いことは実践したいと思う 体に良いものは高くても購入したいと思う |

| | |
|-------|---|
| | 運動をすることは必要だと感じている |
| 死（病気） | <p>最後は土に帰るのだと思う</p> <p>普段は死について考えないようにしている</p> <p>死とは一切の苦悩から解放されることである</p> <p>死についての話題には関わらないようにしている</p> <p>この世の生を全うし続けたい</p> <p>身体機能が低下して介護が必要になっても在宅で暮らしたい</p> <p>延命治療をしてまで生きたいとは思わない</p> |
| 統合性 | <p>*私は、自分が死ぬことを考えると不安である</p> <p>*私は、生きがいをなくしてしまっている</p> <p>*私は、自分の死というものを受け入れることができる</p> <p>*私には、もっと別の生き方があるのではないかと思う</p> <p>*私の人生は、失敗の連続のように思う</p> |

トーンスタンが作成した老いの超越の尺度は因子項目が3つに分かれている。表3-2にトーンスタンが捉えた老いの超越尺度の項目を示した。

表3-2 トーンスタンの老いの超越の尺度 (Dimensions of Gerotranscendence) ⁸⁰⁾

| Cosmic dimension(宇宙的次元) | Factor load |
|--|-------------|
| I feel connected with the entire universe. 全宇宙と一体感を感じる | 0.78 |
| I feel that I am a part of everything alive 生き物全ての一部であると感じる | 0.71 |
| I can feel a strong presence of people who are elsewhere. 実際は離れた所にいる人の強い存在を感じる | 0.60 |
| Sometimes I feel like I live in the past and present simultaneously. 過去と現在が同時に存在すると感じることもある | 0.44 |
| I feel a strong connection with earlier generations. 私は祖先と強い繋がりを感じる | 0.41 |
| Coherence dimension (一貫性) | |
| My life feels chaotic and disrupted.(*) 私の人生は混とんとし混乱していると感じる | -0.74 |
| The life I have lived has coherence and meaning. 私の人生は一貫とした意味がある | 0.70 |
| Solitude dimension (孤独) | |
| I like to be by myself better than being with others. 私は他の人というより一人であることを好む | 0.78 |
| I like meetings with new people.(*) 私は新しい人と会うことが好きである | -0.59 |
| Being at peace and philosophizing by myself is important for my well-being. 静かに物思いに更ける事が私の人生にとってとても重要なことである | 0.58 |
| (*)逆転項目 | |

4. 統合感尺度の分析結果

1) 統合感尺度の構成要因についての検討

まず、高齢者の統合感尺度 53 項目の平均値、標準偏差を算出した。そして天井効果およびフロア効果が見られなかったので 53 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 7.34, 5.90, 2.80, 2.35, 2.20... というものであり、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を図 1 に示す。

第 1 因子は 16 項目で構成されており「私は、人生をどのように生きたいかを自分で決められる」「私のこれまでの人生は、かけがえのないものだと思う」「健康に良いことは実践したいと思う」など人生を能動的に捉えている内容のものが高い負荷量を示していた。そこで「前向き」因子と命名した。

第 2 因子は 8 項目で構成されており、「自分が年をとったと感ずることがある」「外見的に年をとったと感ずることがある」「近年、体力の衰えを感ずる」など、老化を感ずる内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「老いの受容」因子と命名した。

第 3 因子は 11 項目で構成されており、「私は自分が死ぬことを考えると不安である」「自分の役割がなくなつたと感ずる」「私は、生きがいをなくしてしまつてゐる」など、自分の役割が喪失したことの内容に高い負荷量を示していた。そこで「役割の喪失」因子と命名した。

2) 統合感尺度の妥当性の検証

以下表 3-3 に因子分析の結果を示した

表 3-3 統合感尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

| 項目番号 | 項目内容 | 因子 1 | 因子 2 | 因子 3 |
|--------|-------------------------------|--------|--------|--------|
| F 2 7 | 私は、人生をどのように生きたいかを自分で決められる | 0.661 | -0.165 | -0.106 |
| F 9 | 私のこれまでの人生は、かけがえのないものだと思う | 0.646 | -0.133 | 0.068 |
| F 4 3 | 健康に良いことは実践したいと思う | 0.599 | -0.171 | 0.332 |
| F 2 6 | 私は、自分が役に立つ人間であると思う | 0.595 | -0.085 | -0.206 |
| F 4 6 | 人のために尽くすことは人生には必要であると思う | 0.590 | 0.357 | -0.054 |
| F 5 | 私は、自分がどんな人間であるのか良く知っている | 0.570 | -0.243 | 0.248 |
| F 1 2 | 今の自分の役割に意味があると感じている | 0.568 | 0.136 | -0.230 |
| F 3 6 | この世の生を全うし続けたい | 0.558 | 0.058 | -0.090 |
| F 3 8 | 人生は一生懸命であると感じている | 0.542 | 0.080 | 0.023 |
| F 1 | 自分の人生は一貫した意味があると感じている | 0.513 | -0.014 | -0.056 |
| F 1 9 | 困難な役割であっても意味があると感じている | 0.505 | 0.220 | -0.070 |
| F 2 8 | アンチエイジングを試してみたいと思う | 0.495 | -0.268 | 0.349 |
| F 5 1 | 運動をすることは必要だと感じている | 0.472 | 0.098 | 0.146 |
| F 1 3 | 自分には心を割って話せる友人がいる | 0.461 | -0.150 | -0.021 |
| F 2 4 | 私は、物事をありのままに受け入れる事ができる | 0.432 | -0.197 | 0.087 |
| F 4 0 | 今の生活に満足している | 0.400 | -0.017 | -0.113 |
| F 2 0 | 自分が年をとったと感ずることがある | -0.112 | 0.839 | -0.019 |
| F 1 4 | 外見的に年をとったと感ずることがある | -0.040 | 0.693 | 0.011 |
| F 2 | 近年、体力の衰えを感じる | -0.131 | 0.647 | 0.123 |
| F 6 | 顔のしわや体型が変化したと感ずる | -0.046 | 0.608 | 0.032 |
| F 1 0 | 近年、記憶力が衰えてきたと感ずることがある | -0.064 | 0.491 | 0.243 |
| F 5 2 | 延命治療をしてまで生きたいとは思わない | 0.208 | 0.416 | -0.093 |
| F 1 7 | 近年、目や耳が悪くなったと感ずることがある | 0.061 | 0.404 | 0.256 |
| F 3 7 | 私は、自分の死というものを受け入れることができる | 0.306 | 0.401 | -0.225 |
| F 8 | 私は、自分が死ぬことを考えると不安である | 0.215 | -0.104 | 0.546 |
| F 4 | 自分の役割がなくなったと感ずる | -0.183 | 0.004 | 0.508 |
| F 2 2 | 私は、生きがいをなくしてしまっている | -0.243 | -0.009 | 0.471 |
| F 2 5 | たとえ本当のことであっても、私は否定してしまうかもしれない | 0.204 | -0.020 | 0.454 |
| F 5 3 | 私の人生は、失敗の連続のように思う | -0.232 | 0.088 | 0.454 |
| F 4 5 | 私には、もっと別の生き方があるのではないかと思う | 0.118 | 0.243 | 0.426 |
| F 1 6 | 生きるということは厳しいことである | 0.072 | 0.257 | 0.425 |
| F 2 1 | 死とは一切の苦悩から解放されることである | 0.212 | 0.240 | 0.424 |
| F 3 1 | 私は、自分の判断に自信がないと感じている | -0.266 | 0.178 | 0.423 |
| F 3 4 | 以前に比べると人間関係が希薄になったと感ずる | -0.198 | -0.053 | 0.417 |
| F 5 0 | 私には、充実感がない | -0.330 | -0.034 | 0.415 |
| 因子相関 | | 第 1 因子 | 第 2 因子 | 第 3 因子 |
| 第 1 因子 | | - | 0.73 | -0.26 |
| 第 2 因子 | | 0.73 | - | 0.246 |
| 第 3 因子 | | -0.26 | 0.246 | - |

3) 統合感下位尺度間の関連

統合感尺度の3つの下位尺度に相当する下位尺度間の関連項目の平均値を算出し、「前向きさ」下位尺度得点（平均 3.71, SD 0.44）,「老いの受容」下位尺度得点（平均 3.90, SD 0.54）,「役割」下位尺度得点（平均 2.87, SD 0.53）となった。内的整合性を検討するために下位尺度の α 係数を算出したところ「前向きさ」で $\alpha=0.86$,「老いの受容」で $\alpha=0.801$,「役割の喪失」で $\alpha=0.773$ という結果が得られ十分な内的整合性が得られた。

表 3-4 統合感の下位尺度間相関と平均, SD, α 係数

| | 前向きさ | 老いの受容 | 役割の喪失 | 平均 | SD | α |
|-------|----------|---------|----------|------|------|----------|
| 前向きさ | — | 0.043 | -0.282** | 3.71 | 0.44 | 0.860 |
| 老いの受容 | | — | 0.311** | 3.90 | 0.54 | 0.801 |
| 役割の喪失 | -0.282** | 0.311** | — | 2.87 | 0.53 | 0.773 |

** p < . 01

4) 統合感尺度の男女差の検討

男女差の検討を行うために、統合感の各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、「老いの受容」について、男性よりも女性のほうが有意に高い得点を示していた。（t(120) = 「前向きさ」と「役割の喪失」については男女の得点差は有意ではなかった。

表 3-5 男女別の平均と SD および t 検定の結果

| | 男性 | | 女性 | | t 値 |
|-------|------|-------|------|-------|--------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | |
| 前向きさ | 3.68 | 0.398 | 3.77 | 0.496 | -1.07 |
| 老いの受容 | 3.81 | 0.572 | 4.05 | 0.447 | -2.36 |
| 役割の喪失 | 2.83 | 0.554 | 2.83 | 0.485 | 0.024* |

* p < . 05

男女別の統合感下位尺度間の相関係数を示す。男性では「前向きさ」が「老いの受容」と正の相関を示し、「役割の喪失」が負の相関を示したのに対して、女性では「前向きさ」が「役割の喪失」と負の相関を示した。

表 3-6 男女別の計数

| | 前向きさ | 老いの受容 | 役割の喪失 |
|-------|---------|---------|--------|
| 前向きさ | — | 0.122 | -0.33* |
| 老いの受容 | -0.031 | — | 0.033 |
| 役割の喪失 | -0.261* | 0.433** | — |

* p < .05**, * p < .01**,
右上：女性, 左下：男性

5) 統合感尺度と超越尺度との関連について Pearson の相関係数からの検討

分析の結果、「前向き」は、「自然」に弱い相関が見られた。
「老いの受容」は、「役割喪失」にやや強い相関が認められた。
「役割喪失」は「老いの受容」に強い相関、「孤独」に弱い相関が認められた。

表 3-7 相関係数の結果

| | 前向き | 老いの受容 | 役割喪失 | 自然 | 一貫性 | 孤独 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 前向き | 1 | .249** | .155 | .277** | .121 | .193* |
| 老いの受容 | .249** | 1 | .426** | .120 | .060 | .154 |
| 役割喪失 | .155 | .426** | 1 | .179* | .173* | .250** |
| 自然 | .277** | .120 | .179* | 1 | .817** | .850** |
| 一貫性 | .121 | .060 | .173* | .817** | 1 | .855** |
| 孤独 | .193* | .154 | .250** | .850** | .855** | 1 |

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

6) 分散分析結果

統合感の各因子について得点により高中低の 3 群に分け、各因子の群を独立変数、老いの超越の因子得点を従属変数とする一要因分散分析を行った。

超越の「自然」には統合のいずれの因子においても有意な主効果は認められなかった。

「一貫性」については統合の「前向きさ」に 1%水準で主効果が認められ、「前向きさ」の低群が他の 2 群より「一貫性」の得点が低かった。

「孤独」では、統合の「役割の喪失」において 5%水準の主効果が認められ、低群の得点が高群より低かった。

表 3-8 統合因子・3 群ごとの超越「自然」得点

| | 低 | 中 | 高 | F |
|-------|------|------|------|------------|
| 前向きさ | 3.06 | 3.06 | 3.17 | 0.95, n.s. |
| 老いの受容 | 3.07 | 3.10 | 3.15 | 0.39, n.s. |
| 役割の喪失 | 3.00 | 3.08 | 3.23 | 3.04, n.s. |

表 3-9 統合因子・3 群ごとの超越「一貫性」得点

| | 低 | 中 | 高 | F |
|-------|---------|--------|--------|--------------|
| 前向きさ | 3.28 ab | 3.63 a | 3.88 b | 14.51, p<.01 |
| 老いの受容 | 3.52 | 3.59 | 3.76 | 1.81, n.s. |
| 役割の喪失 | 3.68 | 3.55 | 3.62 | 0.44, n.s. |

同一アルファベット間に有意差あり

表 3-10 統合因子・3 群ごとの超越「孤独」得点

| | 低 | 中 | 高 | F |
|-------|--------|------|--------|-------------|
| 前向きさ | 2.98 | 2.99 | 3.14 | 0.84, n.s. |
| 老いの受容 | 2.93 | 3.08 | 3.16 | 1.40, n.s. |
| 役割の喪失 | 2.82 a | 3.06 | 3.25 a | 4.80, p<.05 |

同一アルファベット間に有意差あり

第2節 質的調査に向けた説明概念の検討

1. 目的

本節の目的は「老いの超越」を捉える上で既存の尺度から大まかな要因を相関因子から捉え質的調査に向けた説明概念を抽出することを目的とする。

具体的にはトーンスタンが作成した老いの超越尺度と山口(2009)がエリクソンのEPSI尺度をもとに新たに作成した統合感尺度との間に相関が見られたことから老いの超越に至る道筋を因子項目から検討し説明概念を抽出する事を行なった。

2. 方法

65歳以上の生涯大学学生を対象に調査研究を実施し因子相関によって統合感尺度と老いの超越尺度間の相関を捉えた。見出された因子は「役割の喪失」「老いの受容」「前向き」と命名した。因子分析の結果これらの構成概念の妥当性が認められる。ゆえにこれらは尺度として使用が認められた。

統合感尺度と老いの超越尺度との関連について分析した結果、「前向き」と、「自然」に弱い相関が見られた。この事から老いの超越に至る道筋には自然との関わりつまり環境との相互作用を通じて内的な安定性が育まれる事が推察された。

「老いの受容」は、「役割喪失」にやや強い相関が認められた。

役割がない中でそれを受け容れていくプロセスが推察され役割喪失の中に諦めの要素が示唆された。この事から役割喪失の要因の構成概念に新たな検討が必要とされ再度検討する事にした。「役割喪失」は「老いの受容」に強い相関、「孤独」に弱い相関が認められた。役割のないことを受け容れていくプロセスに諦めの要素が示唆された。一方役割がない中で一人を楽しむ事の意味の関連を検討した。結果役割のない要因に諦めのプラスの側面が示唆された。以上の検討から質的調査に向けた説明概念の検討を尺度の因子項目を質的に文脈として捉え直して再度検討するしていく方法を実施した

3. 質的調査に向けた説明概念の抽出

山口(2009)が見出した統合感尺度の3つの要因「役割の喪失」「老いの受容」「前向き」とトーンスタンの老いの超越尺度の3つの要因「宇宙的次元」「一貫性」「孤独」を質的意味として因子項目の内容を検討し文脈から捉えたもの(概念パターン)を表3-11にまとめた

表 3-11 質的意味に捉え直した尺度

| 統合感尺度の因子名 | 文脈から捉えた意味 |
|-----------|--------------|
| 役割りの喪失 | 私には役割がない |
| 老いの受容 | やがては老いて死ぬものだ |
| 前向き | 自分の人生は自分で作る |
| 老いの超越の因子名 | 文脈から捉えた意味 |
| 宇宙的次元 | 時空を超えてつながる |
| 一貫性 | 人生にまとまりを感じる |
| 孤独 | 1人を楽しむ |

上記表3-9の尺度を質的意味として捉え、概念パターン同士の意味の関係を検討した。具体的には調査研究で相関が見られたため「自分の人生は自分で作る」と、「やがては老いて死ぬものだ」「時空を超えてつながる」の関係を検討した。「やがては老いて死ぬも

のだ」は、「自分の人生は自分で作る」の関係に相関、「私には役割が無い」にやや強い相関が認められた。

「私には役割がない」は「やがては老いて死ぬものだ」に強い相関、「一人を楽しむ」に弱い相関が認められた。以上の事から老いの超越尺度と統合感尺度との関係の意味を概念パターンとして捉え直し検討し新たな意味を創出したものを表 3-12 にまとめた

表 3-12 老いの超越と統合感尺度間の関係を検討し新たな意味の創出を検討もの

| 超越尺度 | 統合感尺度 | 新たな意味の創出 |
|--------------|-------------|---------------------------------------|
| やがては老いて死ぬものだ | 自分の人生は自分で作る | 自分の人生に意味を見出す人は老いを受け入れることができる |
| 時空を超えてつながる | 自分の人生は自分で作る | 自分の人生に意味を見出す人は時空を超えて全てのものとつながることができる |
| やがては老いて死ぬものだ | 私には役割がない | 老いは受容してから役割のないことを意味づけている。つまり受け容れて認識する |
| 一人を楽しむ | 私には役割がない | 役割がない中でも楽しむことを見つけようとしている(ポジティブな側面がある) |

「人生にまとまりを感じる」については統合感尺度の「自分の人生は自分で作る」に 1%水準で主効果が認められ、「自分の人生は自分で作る」の低群が他の 2 群より「人生にまとまりを感じる」の得点が低かった。

「一人を楽しむ」では、統合の「私には役割がない」において 5%水準の主効果が認められ、低群の得点が高群より低かった。以下に質的意味として概念パターンから捉え検討したものを表 3-13 に示した。

表 3-13 超越尺度と統合感尺度の質的意味からの検討 (3 因子の高群・中群・低群)

| 超越尺度 | 統合感尺度 | 新たな意味の創出 |
|-----------------------|----------------------|--|
| 人生にまとまりを感じる【仮因子】得点が高群 | 人生は自分で作る【仮因子】得点が高い | 人生に前向きな人は安定感があり満足感が高いと考えられる |
| 人生にまとまりを感じる【仮因子】得点が低群 | 人生は自分で作る【仮因子】得点が低い | 人生に後ろ向きな人は存在価値があいまいで不安定だと感じていると考えられる |
| 1 人を楽しむ【仮因子】得点が高い群 | 自分には役割がない【仮因子】得点が高い群 | 自分に役割がない中で楽しみを見出し内的に適用していると考えられる【安定要素】 |
| 1 人を楽しむ【仮因子】得点が低い群 | 自分には役割がない【仮因子】得点が低い群 | 自分に無理をしすぎりと内的に適用しづらいと考えられる【不安定要素】無理をしない中に肯定的な諦めの要素が考察された |

表 3-14 超越尺度と 3 因子の高群・中群・低群の結果からの検討

| 超越尺度 | 統合感尺度 | 新たな意味の創出 |
|----------|--------------------|-----------------------------|
| 超越の得点が高い | 人生は自分で作る【仮因子】得点が高群 | 人生に意味を見出している人は安定要因が高いと考察できる |

4. 説明概念の抽出結果

調査分析の結果から統合感尺度の因子項目から見出した要因を再検討した。具体的には老いの超越尺度と統合感尺度の因子項目を概念パターン(文脈)に置き換えて検討した。体験様式から捉えるとより多側面であると考えられる。これらの検討を行なった結果、統合感尺度の構成要因には失調要因(ネガティブな側面)と肯定要因(ポジティブな側面)が捉えられ定性的調査への説明概念を再検討した結果から選定した。

表 3-15, 3-16, 3-17 は因子分析の結果項目をまとめたものである。なお表の左側が命名した因子名であるがその下に文脈から捉えた概念パターンを示してある。

例：因子名【役割喪失】、文脈から捉えた概念パターン 私は役に立たない

表 3-15 因子分析による結果 (35 項目) *エリクソンの統合感 (EPSI 尺度) 11 項目

| | | |
|---------------------------------------|--|--|
| 【役割の喪失】 私は役に立たない (11 項目) | *私は、自分が死ぬことを考えると不安である *私にはもっと別の生き方があるのではないと思う *私は、生きがいをなくしてしまっている *私の人生は、失敗の連続のように思う *たとえ本当のことであっても、私は否定してしまうかもしれない。 自分の役割がなくなったと感じる 生きるということは厳しいことである 死とは一切の苦悩から解放されることである 私は、自分の判断に自信がないと感じている 以前に比べると人間関係が希薄になったと感じる 私には、充実感がない | *統合性 *統合性 *統合性 *統合性 *経済, 生活, 環境 社会的役割 人生の意味 死 (病気) 能力 (記憶, 体力) 人間関係 人間関係 |
|---------------------------------------|--|--|

以上の検討から表 3-15 の項目には「喪失」, 「恐怖」, 「寂寥」を要因とする失調要素が絡んでいると検討された。

説明概念の辞書的意味とフェルトセンス独自の意味を表 3-16 に示した。

(この作業は TAE 質的分析法のパート 1 のステップ 1 から 5 のプロセスに準じている。TAE では既存の辞書的意味と身体感覚から感じたフェルトセンス独自の意味とを検討するプロセスがステップ形式に組み込まれている。調査研究結果から説明概念を抽出する際のプロセスも同様の検討を行なって抽出していった)

表 3-16 概念の意味

| ターム | 辞書的意味 | フェルトセンスの意味 |
|-----|------------------------------|--------------------------|
| 喪失 | 失う事 | 悲しみ, 辛い, 震える |
| 恐怖 | 恐れる事. 怖いと思う事. またその気持ち | 怖さ, 固まる, 凍りつく 冷たい, 辛い |
| 寂寥 | 心が満ち足りず物寂しいこと. ひっそりとしたものの寂しい | 辛い, 悲しい, 苦しい |

諦観, あきらめの辞書的意味を表 3-17, 表 3-18 に示した

表 3-17 諦観の辞書的意味 (日本語大辞典, 広辞苑, 国語辞典など)

- 1 本質をはっきりと見きわめること。諦視。「世の推移を一する」
- 2 あきらめ, 悟って超然とすること

表 3-18 あきらめるの辞書的意味

| | |
|--------------------|--|
| 諦らめる (ネガティブに捉えた意味) | 希望や願いの実現は無理であると認めてそれ以上考える事をやめる 思い切る, 断念する 希望を捨てる 明らめる |
| 明らめる (ポジティブに捉えた意味) | ①明らかにする ②さとり ③ところをはらす |

表 3-19 は統合感尺度の老いの受容として量的調査から抽出した質問項目 8 項目である

表 3-19 因子分析による結果 (35 項目) *エリクソンの統合感 (EPSI 尺度) 8 項目

| | | |
|---------------------------------------|---------------------------|----------------|
| 【老いの受容】 やがては老いて死 ぬものだ (8 項目) | 自分が年をとったと覚えることがある | 外見 |
| | 外見的に年をとったと覚えることがある | 外見 |
| | 顔のしわや体型が変化したと覚える | 外見 |
| | 近年、体力の衰えを覚える | 能力 (記憶, 体力) |
| | 近年、記憶力が衰えてきたと覚えることがある | 能力 (記憶, 体力) |
| | 近年、目や耳が悪くなったと覚えることがある | 能力 (記憶, 体力) |
| | 延命治療をしてまで生きたいとは思わない | 死 (病気) |
| | *私は、自分の死というものを受け入れることができる | *統合性 |

表 3-20 は量的調査で抽出した前向きの項目である

表 3-20 因子分析による結果（35 項目）*エリクソンの統合感（EPSI 尺度）16 項目

| | | |
|---------------------------------------|--|--|
| <p>【前向き】 人生は自分で作る (16 項目)</p> | <p>*私は、人生をどのように生きたいかを自分で決められる *私は自分がどんな人間であるのか良く知っている 自分には腹を割って話せる友人がいる この世の生を全うし続けたい 私は、自分が役に立つ人間であると思う 困難な役割であっても意味があると感じている 今の自分の役割に意味があると感じている 私のこれまでの人生はかけがえのないものだと思う 人生は一生懸命であると感じている *自分の人生は一貫した意味があると感じている 人のために尽くすことは人生には必要である 健康に良いことは実践したいと思う アンチエイジング【老化予防】を試してみたいと思う 運動をすることは必要だと感じている 私は、物事をありのままに受け入れることができる 今の生活に満足している</p> | <p>*人間関係 *人間関係 人間関係 死（病気） 社会的役割 社会的役割 社会的役割 人生の意味 人生の意味 人生の意味 人生の意味 外見 外見 外見 能力（記憶、体力） 経済、生活、環境</p> |
|---------------------------------------|--|--|

上記の項目を詳細に検討した。結果「前向き」は要素として意欲、習慣、絆という肯定要因を含んだものとして推察された。

表 3-21 は前向きの項目とされる肯定要因「意欲」「習慣」「絆」の辞書的意味とフェルトセンスから捉えた意味である

表 3-21 概念の説明

| ターム | 辞書的意味 | フェルトセンスの意味 |
|-----|---|---|
| 意欲 | 進んで何かをしようと思う事。またその心の動き。哲学で、種々の動機の中から選択した目標に、積極的に働く意思活動 | まだまだやれる 興味がある |
| 習慣 | 長い間繰り返し行ううちに、そうするのがきまりになったこと その国やその地方の人々のあいだで、普通に行なわれる物事のやり方。 心理学で、学習によって後天的に獲得され、反復によって固定化された個人の行動様式 | 日常的に当たり前に行っている事柄 仕事、活動、サークル等 散歩、デイケアなども |
| 絆 | 人と人との絶つことのできないつながり、結びつき | 関係性、出会い |

第3節 考察

Erikson(1950)の捉えたライフサイクル論の老年期の発達課題として第8段階の自我統合と絶望の絶望の側から捉え、第9段階に Tonstan の論考にある「老いの超越」の概念から第8段階から第9段階の移行のプロセスを尺度間の関係から検討し大まかな要因を因子項目から捉え検討した。結果、既存の尺度から作成した統合感尺度の構成因子に「諦観、受容、達観」を見出した。質問項目を文脈から捉え直し老いの超越の構成因子との相関を検討した結果、諦観にプラスの側面とマイナスの側面が捉えられた。一つの構成因子にプラスとマイナス側面が検討された。この意味について捉えていく事は調査研究では限界がある。ゆえに質的研究で詳細に現象を捉えていく必要があり第4章の質的調査研究では現象学的アプローチを用いた調査を行なう事とした。

1. 諦観の捉え方に関する検討

Wright(1960)は、あきらめは不運に従う(bowing to misfortune)を意味し、肯定的な感情が含まれていないと指摘している。⁸¹⁾

一方で大橋(2008)はあきらめには「明らかにする」「心を晴れやかにする」「断念する」などの意味がある事を示しあきらめにはポジティブな側面とネガティブな側面があると述べている⁸²⁾。

鈴木(2008)⁸³⁾は心理学における「諦観」の積極的意味付けを検討し「諦める」ことでその後の認知発達に関する有効性について喪失体験の多い慢性疾患患者との関わりを通してポジティブな側面を捉えている。発達の観点から「無理をしない生き方」「他者への配慮」など広い意味で「諦観」を捉えている。

以上を検討した結果「諦め」にポジティブな意味とネガティブな意味が捉えられると考えられた。

本調査では「諦観」の中にネガティブな側面の「諦め」とポジティブな側面としての「諦め」が検討された。ゆえにネガティブとポジティブの両方の捉え方が「諦観」に捉えられた。以上の検討から表3・15(p41参照)の「役割の喪失」の項目を新たに「諦観」と命名しなおし質的調査に向けた説明概念とする事とした。

2. 受容の捉え方に関する検討

機能の低下を受容するという意味では障害受容論を参考とした。

上田(1983)⁸⁴⁾は障害受容とは、あきらめや居直りではなく障害に対する価値観の転換であると捉えている。彼の捉えた障害受容の段階理論は、ショック、否認、混乱(怒り・うらみと悲嘆・抑うつ)、解決の努力、受容の5段階理論である。

南雲(2002)⁸⁵⁾は、障害受容が個人の変化のみだけでなく他者・社会のあり様に視点を捉えて「社会受容論」を提唱した。社会受容論は、障害を持った時に生じる「心の苦しみ」を二つに分けて捉えている。一つは「自分自身の苦しみ」でもう一方を「他者から負わされる苦しみ」である。さらに第一の受容を「自己受容」、第2に「社会受容」と捉えている。ブルーマー(Herbert Blumer)⁸⁶⁾はシンボリック相互作用論の中で意味が社会的アイデンティティに与える影響を指摘し他者との関わりという相互作用から意味が導き出されると捉えている。

以上の事から「老いの受容」の質問項目を、身体機能の衰退や喪失、加齢現象、死に向き合う際の状態をそのまま受け容れるという意味を含んでいると捉え「受容」と命名しなおした。

3. 達観の捉え方

本調査では「前向き」の項目を自分の生き方や生活の含みを捉え、ありのままの現状を理解することを含んで捉え「達観」と命名し直した。

以上の結果と考察から調査研究で見出された点を図に示した。
 老いの超越に至る道筋にエリクソンの捉えた発達課題の第8段階「統合 VS 絶望」の絶望側から捉え第9段階の老いの超越の移行のプロセスに諦観、受容、達観が見出され諦観にプラスの側面とマイナスの側面が示唆された。3つの因子要因の構造と諦観の意味について検討していく事とした。

老いや死の捉え方 1

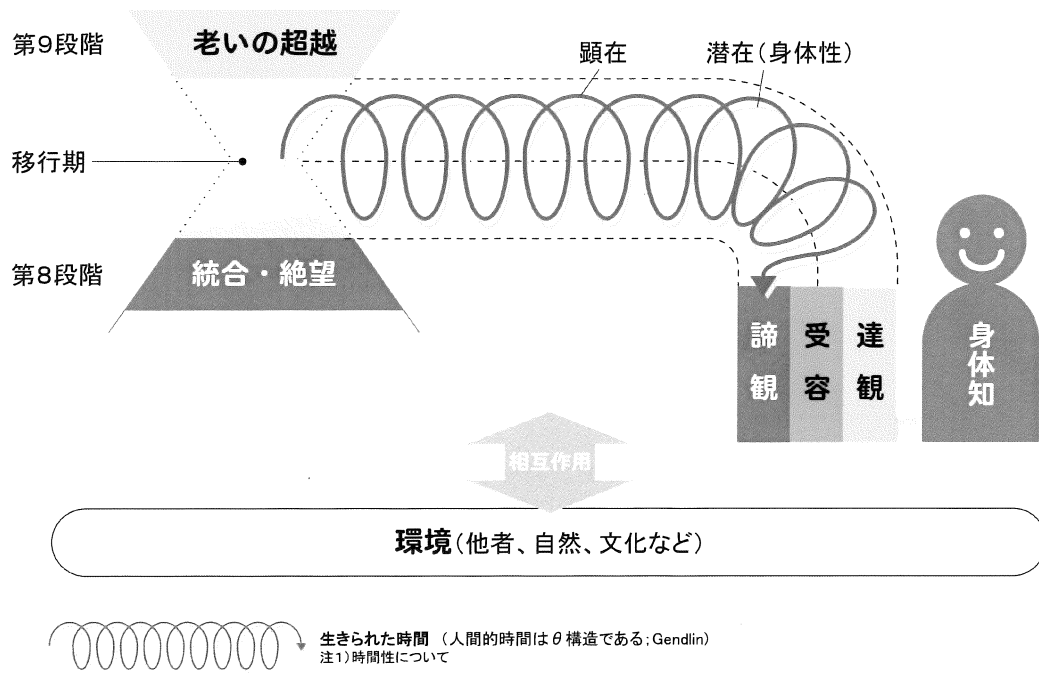


図 3 - 1 第 8 段階から第 9 段階の移行期の捉え方

【機能が衰退する中での要因】 諦観 → 受容 → 達観

山口 (2008) の調査で老いの超越の移行期に、身体機能がそれほど低下していない前期高齢者は活動型、機能が低下する後期高齢者には葛藤型と離脱型を見出した。今回量的調査研究の結果から老いの超越の移行期のプロセスに「諦観、受容、達観」という構成概念が相関因子から示唆された。

4. 高齢者の心理機構を説明する 10 の説明概念

本調査で必要とされる高齢者の心理機構を説明する 10 の説明概念を調査研究から検討した。老いの超越尺度と統合感尺度間の相関から検討し意味を捉えるために文脈から検討し 10 の説明概念を抽出した。表 3-22、表 3-23、表 3-24 は因子項目から文脈で捉え検討した要因をまとめたものを示した。

「諦観、受容、達観、意欲、習慣、絆、恐怖、寂寥、喪失、回顧」

表 3-22 はトーンスタンの捉えた西洋的な老いの超越の要因である

表 3-22 老いの超越(トーンスタン)の要因のまとめ

| | |
|-------|---|
| 社会と個人 | ① 表面的な人間関係の軽視. 友人の数といった人間関係は軽視され孤独への要求が高まる. ② 社会的地位や富の軽視 ③ 善悪の価値観の変化 (何が善で何が悪であるのかを決めるのが困難であることを悟る) |
| 自己 | 自己へ執着の低下 人生の再統合 |
| 宇宙的 | 時間や空間の考え方の変化 「神秘性」に対する感受性の高まりが強くなる |

表 3-23 は、山口 (2009) 調査研究で得られた統合感尺度の質問項目の内容を検討した老いや死の捉え方の内的な要因である。

表 3-23 老いと死の捉え方(山口 2009)の要因のまとめ

| | | |
|------------------------------|---|------------------------------|
| 【諦観】 (失調要素) | ① 自分の役割がないことを認める ② 死が近づいている事の不安を認める ③ 死についてや人生の意味を考える ④ 現在の生き方を見直す | 【寂寥】 【恐怖】 【喪失】 【回顧】 |
| 【受容】 (失調と肯定要素がバランスを保っている) | ① 体力の衰えを受け入れる ② 死を受け入れる ③ 延命治療をしてまで生きたいとは思わない ④ 私は自分の死と言うものを受け入れることができる | |
| 【達観】 (肯定要素) | ① 自分の生き方に価値を見出す ② 他者のため、人の為に何かしたい ③ 日々のあり方をありのままに受け入れる ④ 死とは一切の苦悩から時離れることである | 【意欲】 【絆】 【習慣】 |

調査研究から「諦観」「受容」「達観」の概念を規定し表 3-24 にまとめた

表 3-24 老いの超越の内的要因の概念規定

| | |
|----|--|
| 諦観 | ネガティブな側面とポジティブな側面の二つの意味が「あきらめ」にはありそれを「諦観」と捉えた |
| 受容 | 老いや死などを「受け容れ」ていくと意味で内的にバランスが取れている状態を受容として捉えた |
| 達観 | 自分の生き方や生活の含みを捉え、このままでいいという状態を了解した後に達する肯定的な面を「達観」と捉えた |

以上のように概念を規定し質的調査研究で高齢者の老いや死の捉え方を検討する初期段階のカテゴリー化の説明概念とした

第4節 老いの超越の捉え方

1. 従来の老いの超越の捉え方

これまで老いの超越の研究は Erikson が捉えたライフサイクル論が一般的である。エリクソンは人生を8段階に分け、各段階において到達すべき発達課題を設定した。彼は老年期の発達課題を自我の統合VS絶望としさらに第9段階に超越を追加したがそこは非常にネガティブなものとして捉えている。⁸⁷⁾ (Erikson&Erikson,1997)しかし彼は人生の初期段階で形成される「信頼性の形成」からの相互依存に「希望」を託しそこに叡智が必要だと捉えた。エリクソン夫妻は超越に癒しや希望を託しているがネガティブ要因からの捉え方について言及されるまでには至っていない。

一方トーンスタンは、老いの超越を「ジェロトランスセンデンス(老いの超越)」という概念で捉えポジティブな側面として捉えた。⁸⁸⁾(Tornstam, L. 1996). トーンスタンの捉えた老いの超越は加齢に伴う個人の連続的な変化を老いの超越と捉え、Life crisis(人生における危機的状況)によって阻害され促進もされると捉えている。⁸⁹⁾(Tornstam, L. 2005 PP44-45). またジェロトランスセンデンスの発達には「孤独」が必要と捉えているがその意味について検討されていない。トーンスタンの捉えた超越とエリクソン夫妻が捉えた超越の精神的基盤は西洋の個人主義的観点からの老いの超越の捉え方である。ゆえにトーンスタンは超越の高次元を宇宙的次元として捉えている。またエリクソン夫妻は相互依存に希望を託しているが機能が衰退する高齢期を非常にネガティブなものとして捉えている⁹⁰⁾。

図3-2にエリクソンとトーンスタンの老いの超越をまとめた

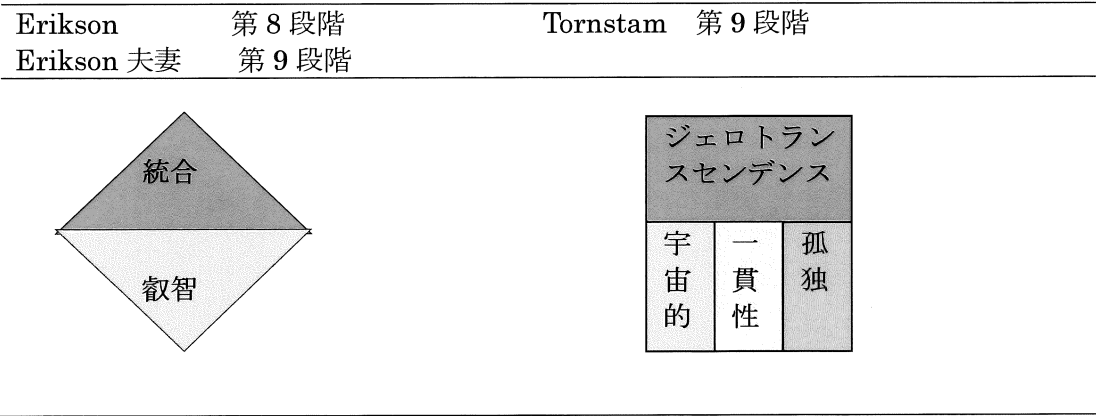


図3-2 老いの超越の捉え方（西洋的視点）

2. 老いや死の捉え方（東洋的な視点）

山口（2009）が捉えた老いの超越は第8段階と第9段階の移行過程の「老いや死の捉え方」に着目し調査研究をおこなった。結果「諦観」「受容」「達観」が統合感尺度の因子項目から説明概念として見出された。山口（2008）の結果から老いの超越には日本の文化文脈に添った調査が必要とされ「老いや死の捉え方」に着目する必要性が検討された。さらに老いの超越を捉えるあたって環境（人、もの、自然）との相互作用によって変化する可能性がある事が調査結果から導き出された。

また諦観にはネガティブな側面とポジティブな側面が考察された。構成尺度の因子項目にネガティブとポジティブな側面が捉えられたがその意味を捉える事は質的研究でなければ難しい。

また「受容」に関しては「諦観」との関連性が示唆されその意味についても詳細に調査する必要があると考えられる。「諦観」や「達観」が老いの超越に関係している事が示唆されるがそれがどのような意識の流れや意味をもつかについては個別の捉え方に着目し調査する必要があると考えられ定性的研究で老いや死の捉え方に関する意識の流れを現象分析で捉えていく事とした。

図3-3に山口(2009)をまとめた。

| <p>エリクソンの EPSI 尺度と他の要因から3つの要因を捉えた。「老いや死の捉え方」による視点で絶望の側から老いの超越を捉え環境(人、もの、自然)との相互作用によると捉えた。 諦観にプラスとマイナスの側面が捉えられた</p> | <table><tr><th colspan="3">老いや死の捉え方</th></tr><tr><td>諦観</td><td>受容</td><td>達観</td></tr></table> | 老いや死の捉え方 | | | 諦観 | 受容 | 達観 |
|--|---|----------|--|--|----|----|----|
| 老いや死の捉え方 | | | | | | | |
| 諦観 | 受容 | 達観 | | | | | |

図3-3 山口（2009）老いや死の捉え方(東洋的視点)

第4章 老いや死の捉え方の定性的調査研究

第1節 本調査

1. はじめに

本研究は、エリクソンのライフサイクル論・第8段階とトーンスタンの捉えた老いの超越・第9段階の移行期の「老いや死の捉え方」に着目し、第3章の調査研究で既存の尺度からこぼれ落ちる点を細かく捉えていくため、臨床の実践法として位置づけられているフォーカシングやTAEを用いて現象を捉えていく事とした。

統合感尺度は3因子構造「前向きさ」「老いの受容」「役割の喪失」でロートンのPGCモラルスケールの3因子構造とほぼ共通に至る類似性が認められた。ロートンのモラルスケールと生活満足感には相関が見られる事からエリクソンの唱えたライフサイクル論・第8段階は現代日本の高齢者のポジティブな側面を捉えていることが見出された。

さらに「前向きさ」「老いの受容」「役割の喪失」と「自然」「一貫性」「孤独」の6つの要因をもとに一つずつ質問項目を作成し老いと死についてを捉えるため検討を重ねインタビューガイドを作成しつなぎのための項目と倫理的配慮を検討し合計10問のインタビューガイドを作成した。【表4-2. p55 参照】

トーンスタン(2003)は、超越と生活満足度との関係に相関がある事を見出している。⁹¹⁾

山口(2009)は「人生に前向きな人は老いの超越が高い」との結果が見出した。

この結果は生活満足度と老いの超越尺度との相関関係を示したトーンスタン(2003)の結果をある意味支持するものである。山口(2009)の調査結果から導き出した3つの要因を詳細に検討した結果、老いの超越の内的要因として「諦観」「受容」「達観」が複雑に絡んでいる事が示唆された。しかし個人がどのように体験を捉えるかという捉え方に着目して現象を細かく見ていく事の必要性が示唆された。また調査過程で「宇宙と一体感を感じることはありませんか」との問いに対して「気持ち悪い」等の意見があったことから日本独自の文化的文脈にそった問いが必要であることが示唆されたため個別の実例に着目した質的調査からの分析を行なうことにした。

2. 目的

本研究では、生涯発達の見点からエリクソンの捉えたライフサイクル論にみられるピラミッドの第8段階とトーンスタンの捉えた老いの超越に見られる第9段階の移行期の「老いや死の捉え方」に着目し調査研究から既存の尺度では取りこぼしてしまう細かい点を推察し内的構造を可視化し支援策を検討することが目的である。

- ①統合感尺度の因子項目から抽出した説明概念でカテゴリーに分類する
- ②超越の見られた#14の実例をより詳細に分析する。その手法として心理臨床に応用したTAEと言う手法を用いモデル化する
- ③#14の実例に基づく内的構造をモデル化し他の49実例を位置づける

老いや死の捉え方 1

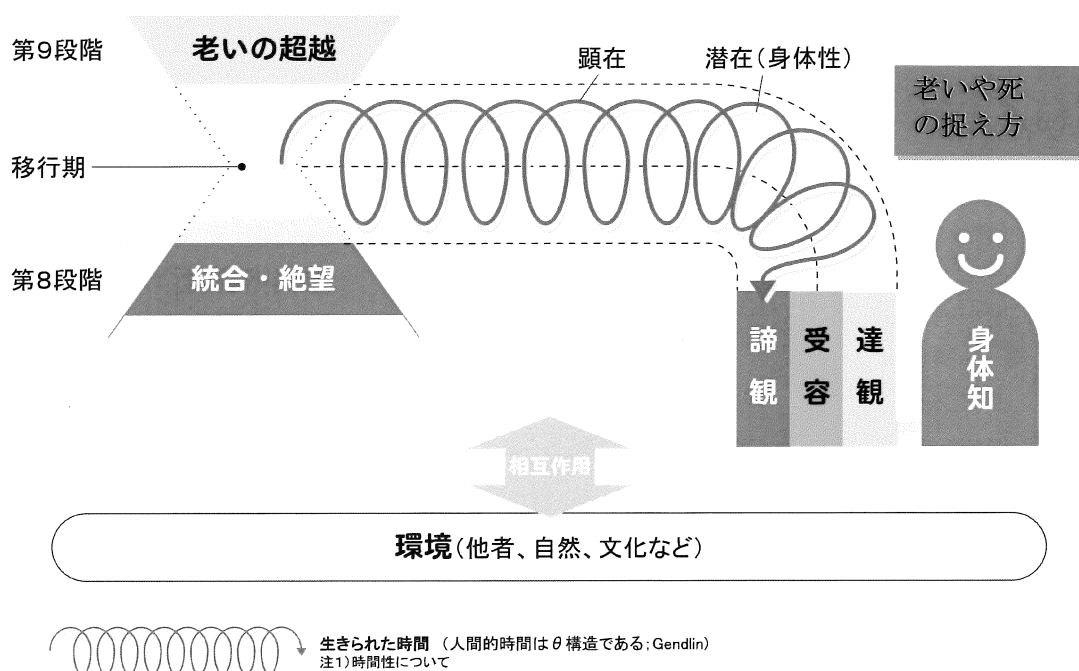


図4-1 第8段階から第9段階の移行期の老いや死の捉え方

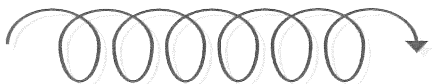
図4-1は調査研究から高齢期の内的適応の発達のメカニズムを解明にするにあたっての大まかな特徴として「諦観」「受容」「達観」という3つの要因を見出した。

図4-1に示した環境とは他者やもの、自然、文化的特徴などが含まれる。そことの関係性による相互作用が自我統合の次に来るべき自己の全体性や統合性に深く関係しており発達における外的要因として環境との相互作用が考えられる。

また時間性については今ここ（here and now）での現象に、意識、無意識に繋がっており対話により過去と未来が現在と交差し、方向を見出したり、錯綜したりする場所としてとらえられる。

以上の視点をもとに質的調査で老いや死の捉え方の意識の流れを詳細に検討することにした。

注1) 人間の「生きられた時間」とは、人が過去の経験から自分を理解したり（被投性の理解）、自分を未来に投影したり（企投性）する、その有り方であると捉えられる。現人間は意識と無意識の相互作用を生きている。それをプロセスという。そのプロセスでは、無意識が意識に上り（Focusing）、今度は意識が無意識に影響を与える。この意識と無意識のぐるぐる回りの発展（ θ 構造）（Entwicklung:process）は、暗在性（意識と無意識の境界面における交差機能）によって生じる。身体は環境に開かれているから、環境の影響は、より直接無意識の方に生じる。また無意識は意識に影響を与える。このようにして無意識→意識→無意識→意識といったぐるぐる回りの発展が生じて、止むことがない。これが人間の時間性である。⁹²⁾



意識(顕在)と無意識(身体性)をぐるぐる回る時間性（Gendlin1997 P99）

3. 方法

1) 調査対象

本研究では関東地区に在住の 65 歳以上の高齢者 50 人を対象としてにインタビュー調査を実施した。調査対象者の内訳は 65 歳以上 70 歳未満 6 人, 70 代 19 人, 80 代 15 人, 90 代 9 人, 100 代 1 人 詳細については表 4-1 にまとめた通りである

表 4-1 高齢者 50 人の属性

| No | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 |
|----|----|----|---------|--------------|------|-----|-----------|
| 1 | 85 | 女性 | 脾臓が弱い | 1 人暮らし | 支援 2 | 在宅 | 専業主婦 |
| 2 | 86 | 女性 | 脊髄強縮症 | 1 人暮らし | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 |
| 3 | 72 | 男性 | 特になし | 夫婦 2 人と息子 | 未 | 在宅 | タクシードライバー |
| 4 | 82 | 男性 | 胆管結石 | 夫婦 2 人と娘 | 未 | 在宅 | 教師(途中) |
| 5 | 73 | 男性 | 骨粗鬆症 | 4 人(夫婦子ども) | 未 | 在宅 | 公務員 |
| 6 | 82 | 女性 | 子宮筋腫 | 夫婦 2 人と息子 | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 7 | 66 | 男性 | 特になし | 息子と 2 人 | 未 | 在宅 | 教師 |
| 8 | 80 | 男性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 自営業 |
| 9 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 栄養士 |
| 10 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 団体職員 |
| 11 | 70 | 女性 | 関節リュウマチ | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 12 | 69 | 女性 | リュウマチ | 4 人(息子, 孫) | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 13 | 94 | 女性 | 大腸がん | 1 人暮らし | 介護 2 | 在宅 | 内職 |
| 14 | 73 | 女性 | 子宮がん | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 15 | 73 | 女性 | 特になし | 1 人暮らし | 支援 1 | 在宅 | 翻訳業 |
| 16 | 66 | 女性 | すべり症 | 夫婦 2 人, 娘 | 未 | 在宅 | 自営業 |
| 17 | 67 | 女性 | リュウマチ | 夫婦 2 人 | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 18 | 88 | 女性 | 小児まひ | 1 人暮らし | 支援 2 | 在宅 | 自営業 |
| 19 | 93 | 女性 | 大腿骨骨折 | 1 人暮らし | 支援 2 | 在宅 | 専業主婦 |
| 20 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 税務署 |
| 21 | 71 | 女性 | 特になし | 孫 | 未 | 在宅 | 和裁 |
| 22 | 85 | 女性 | 坐骨神経痛 | 孫 | 介護 1 | 在宅 | パート |
| 23 | 76 | 女性 | 強皮症 | 4 人(夫, 娘, 孫) | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 24 | 89 | 女性 | 足腰の弱り | 4 人部屋 | 介護 2 | 特養 | 和裁 |
| 25 | 80 | 女性 | 脳梗塞 | 4 人部屋 | 介護 4 | 特養 | 会社事務 |
| 26 | 68 | 女性 | 特になし | 夫婦, 義母, 息子 2 | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 27 | 68 | 男性 | 特になし | 夫婦, 義母, 息子 2 | 未 | 在宅 | 警備員 |
| 28 | 93 | 女性 | 通院中 | 夫婦, 義母, 息子 2 | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 |
| 29 | 85 | 女性 | 甲状腺 | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 |
| 30 | 95 | 女性 | 特になし | 老人ホーム | 介護 2 | 施設 | 専業主婦 |
| 31 | 72 | 男性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 自営業 |
| 32 | 75 | 男性 | 膠原病 | 夫婦, 息子 | 介護 3 | 在宅 | 会社員 |

| No | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 |
|----|-----|----|-----------------|--------|------|-----|---------|
| 33 | 88 | 女性 | 慢性腎炎 | 1人暮らし | 介護 2 | 在宅 | 専業主婦 |
| 34 | 85 | 男性 | 右下肢閉塞性 動脈硬化症 | 1人暮らし | 介護 2 | 在宅 | 自営業 |
| 35 | 93 | 女性 | 通院中 | 個室 | 支援 2 | 施設 | 保育士 |
| 36 | 88 | 女性 | 通院中（うつ） | 個室 | 介護 1 | 施設 | 市役所 |
| 37 | 73 | 女性 | リュウマチ | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 |
| 38 | 91 | 女性 | 坐骨神経痛 | 息子夫婦，孫 | 介護 1 | 在宅 | 教師 |
| 39 | 80 | 女性 | 肺がん | 1人暮らし | 未 | 在宅 | 会社員 |
| 40 | 79 | 男性 | 脳血管障害 | 夫婦 | 介護 2 | 在宅 | 会社員 |
| 41 | 76 | 男性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 会社員 |
| 42 | 76 | 男性 | 脳血管障害 | 夫婦，息子 | 介護 2 | 在宅 | 会社員(5人) |
| 43 | 91 | 男性 | 腰痛 | 1人暮らし | 介護 1 | 在宅 | 無職 |
| 44 | 73 | 男性 | 腰痛 | 夫婦 | 未 | 在宅 | 会社員 |
| 45 | 75 | 女性 | 肺炎 腰痛 | 夫婦 | 未 | 寮 | 管理人 |
| 46 | 84 | 男性 | 前立腺 | 夫婦，息子 | 未 | 在宅 | 会社役員 |
| 47 | 91 | 女性 | 熱中症 | 1人暮らし | 介護 4 | 在宅 | アーティスト |
| 48 | 75 | 女性 | 腰痛 | 1人暮らし | 未 | 在宅 | 無職(福祉) |
| 49 | 100 | 女性 | 特になし | 息子夫婦，孫 | 介護 2 | 在宅 | 専業主婦 |
| 50 | 92 | 男性 | 悪性のおでき | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 無職 |

2) 調査期日

期間 2009 年 12 月末日～2011 年 1 月末日まで

3) 倫理的配慮

研究目的を口頭と資料にて説明し，了解を得た後にインタビューを行なった。
本研究に関しては，2011 年 4 月における日本社会事業大学大学院倫理委員会の承認を受けている。

4) 調査結果の要因の検討からインタビューガイドを作成

先の調査研究で得られた老いの超越尺度と新たに作成した統合感尺度の質問項目を詳細に検討した。尺度間に相関が見られたことから検討しインタビューガイドを作成した。

具体的な手順はトーンスタンの作成した既存の老いの超越尺度と山口(2009)で作成した統合感尺度間に因子相関が見られたことからそれらの因子項目を各1問ずつとつなぎの項目を合わせて合計10問のインタビューガイドを作成した。図4-2はインタビューガイド作成の検討図を示したものである。エリクソンの捉えた第8段階からトーンスタンの捉えた老いの超越・第9段階の移行のプロセスをインタビューガイドをもとにTAE思考法をもとに潜在(身体性)と顕在(思考)を行ききしつつ対話によって老いや死の捉え方をインタビューで捉えるためにインタビューガイドを作成した。

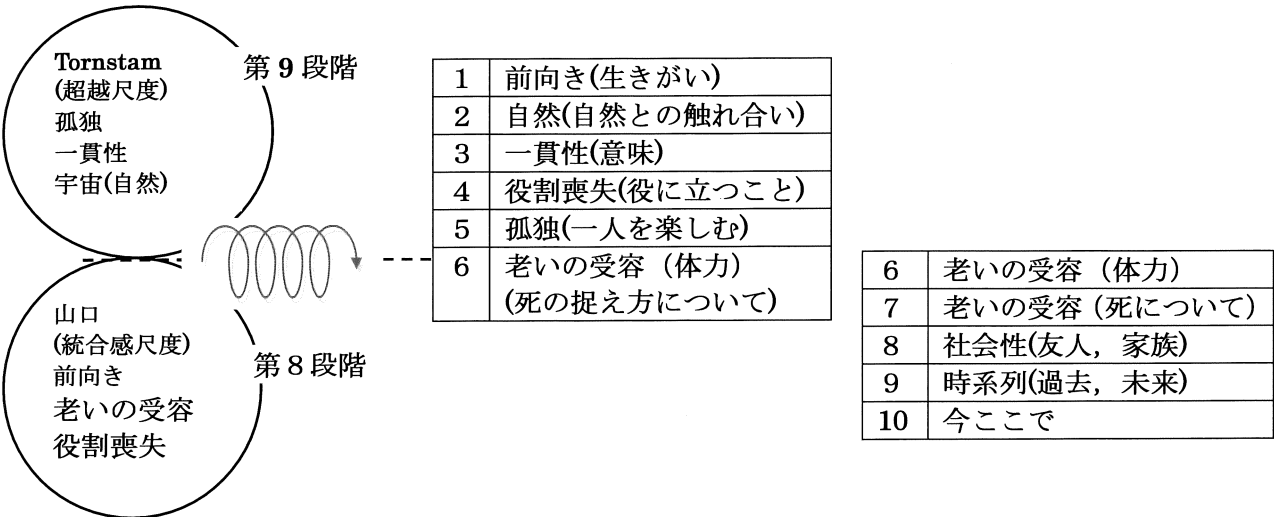


図4-2 インタビューガイド作成の検討図

上記のインタビューガイドの要因を再検討して最終的に作成した10問のインタビューガイドを表4-2にした

表4-2 インタビューガイド (老いや死の捉えかた)

| | |
|----|--|
| 1 | 現在, 生活の中で楽しみにしている事は何ですか? (楽しんで取り組んでおられる事は何ですか) 生きがい (前向きな体験について, 買い物, ボランティア, スポーツ, 自然 その他) |
| 2 | その事は以前からずっとやっていた事ですか 以前はやっていただけ今はやっていない事がありますか→ある→なぜ辞めてしまわれたのですか → ない 以前はやっていなかったけど今はやっている事がありますか → どうしてはじめられたのですか |
| 3 | 自然とのふれあいに心地よさを感じますか(自然, つながり等) 一体感を感じることはあるか |
| 4 | 人生には何か一貫した意味があるように感じられますか |
| 5 | 家族や友人と過ごす時間はありますか? |
| 6 | 家族の中や地域の中でのご自身の役割についてどのように感じていますか |
| 7 | 体力の衰えを感じますか? どのように感じていますか? |
| 8 | 一人, 物思いに更ける時間をどのように感じていますか? |
| 9 | (死に関して) 最後は土に帰るのだと思われませんか? その事について不安はありますか? |
| 10 | 今はどのような状態ですか? どのような環境だったら良いと思われませんか? |

5) インタビューの手続き

インタビューガイドは、あくまで指標であり質問は柔軟に対応し順不同にし半構造化面接を行なった。

インタビューでは、出来る限りインタビューイのフェルトセンスに添う形で展開し、今ここで展開されている現象をそのまま取り出すことを目的とした。

例えば「う〜ん・・・」というような身体感覚から感じている現象がインタビューイに起こっている時には、そこにしばらくとどまってその感じがどんな感じなのかについて聞くように心掛けた。(見守り)

インタビューの中で「老いや死の捉え方」について展開があればそこに着目するようにした。具体的には量的調査の結果に見られた「前向き」と「一貫性」との間に相関が出たことからその意味について、また「孤独」と「役割の喪失」とに相関がみられたのでその意味についてインタビューの中で話が展開されればより深く掘り下げて聞くように心がけた。また自然との関わりが何らかの意味があると捉えたので自然との関わりの質問に対しても話しの展開が深まればより深く掘り下げて心がけて聞くようにした。

インタビュー時間は1時間〜2時間で高齢者の方がつかれた場合は数回にわたって実施した。場所については、最初は筆者の自宅でインタビューを行なっていたが介護認定のある方中途障害の方にもインタビューを実施すべく途中から訪問してインタビューを実施した。

筆者の知り合いにケアマネージャーがいたのでその紹介や学校から紹介を受け訪問した。インタビュー実施にあたっては、主旨を説明し了解し協力いただけた方に実施した。

インタビューはI Cレコーダーに録音した。

それを逐語データに起こした。50人のインタビューデータは逐語に落とすとA4で1000ページ弱となった。インタビューとデータの逐語化は筆者がおこなった。

6) 分析の手続き

分析手続きについては、体験をTAEによる現象分析によって内的構造を可視化する分析を行った。50人のインタビューデータのトランスクリプト(逐語録)を何度も読み形成されたフェルトセンスと形式を照合し、体験の捉え方を抽出した。

主にジェンドリン夫妻が考案したTAEステップ7と8を用いた。

量的調査研究で導き出された10個の説明概念を用いて前半はTAEステップ7の「パターンを取り出す」とステップ8の「交差機能」という形式を用い先行研究から抽出した説明概念で分類していった。10個の説明概念は「意欲, 習慣, 絆, 寂寥, 喪失, 恐怖, 回顧, 諦観, 受容, 達観」である。この説明概念を用いてパターンで分類していき類似の特徴が見られたところでカテゴリー化した。カテゴリーは3つに分類された。また3つのカテゴリーに属さない特徴が3名見られた。それらの特徴は達観もしくは超越として捉えられた。#14は本研究のテーマである老いの超越にみられるような要因(諦観, 受容, 達観)がみられたためTAEでより詳細に特徴を分析した。

また、分析結果を確認するため、逐語録をインタビューイと確認し、面接者およびスーパーバイザー2人、計3人で議論し、妥当性を確認した。

第2節 先行研究からの分類

1. 説明概念からの分類

老いの超越の要因に関する調査研究から説明概念を抽出しそれに基づいてカテゴリー化を行なった

2. 方法

インタビューデータを逐語化したデータ（以下トランスクリプト）を覚えるくらいに読みその中で体験の捉え方（パターン）に着目しマーカーペンで線を引きその部分をパターンとして文脈で捉え、各高齢者の体験の捉え方をトランスクリプトからいくつか選定した。

パターンを出す際に分析ワークシート表4-3を使用した。

表4-3 分析ワークシート

| | |
|------------------|---|
| 捉え方 (パターン1) | 意欲は案外なくならない |
| 実例 P 1 L 1 5 | あの、毎日松坂屋に行ってたよね。買い物なくても行くよね |
| 類似例 P 3 L 1 2 | そうかもしれないね。やっぱり、人が歩いていないときでも毎日歩いたという事は、あの・・・やっぱり健康のためと思って歩いていたと思うよ。夏でも |
| メモ | 何歳になっても体が丈夫なら意欲はなくなる |

上記パターンを量的調査から導き出した 10 個の説明概念「諦観,恐怖,達観,意欲,受容,寂寥,喪失,習慣,恐怖,回顧」を用い分類していった。

インタビューデータを逐語化したトランスクリプトを表4-3に示した分析ワークシートに基づき 10 個の説明概念を用いて分析したものが表4-4の被験者の実例である

以下トランスクリプトから取り出した体験の捉え方を、調査研究で抽出した説明概念をもとに分類したものを表4-4に被験者実例として示した。

表4-4 #1 被験者の実例

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | 分類 |
|-----|---------------------------------|----|-------|-------|------|-----|------|----|
| 1 | 85 | 女性 | 脾臓が弱い | 1人暮らし | 支援2 | 在宅 | 専業主婦 | |
| A | 【意欲は案外なくならない】 | | | | | | | 意欲 |
| B | 【死はまだ考えない】 まだまだやれる | | | | | | | 意欲 |
| C | 【健康であることが生きがいだ】 | | | | | | | 意欲 |
| D | 【年齢期にはそんなに衰えていない】 | | | | | | | 意欲 |
| E | 【親から大事に育てられたという記憶がある】 | | | | | | | 回顧 |
| F | 【自分の責任でやっていかなくちやあと言う気持ちで満州に行った】 | | | | | | | 回顧 |

(凡例) A: 意欲は案外なくならないという概念パターンから意欲的であるという意味で説明概念の意欲を選択し分類を行なった。

E: 回顧は過去の体験や記憶が現在の認識に影響を与えていると考えられるが過去体験に基づく概念パターンを捉えているものを「回顧」と言う説明概念を選択し分類を行なった

3. 説明概念からのカテゴリー化のプロセス

50 人のデータを分類し類似性が見られたの時点で、表 4-5、表 4-6、表 4-7 に示すようにカテゴリーにまとめていった。

説明概念の「意欲」「絆」「習慣」が多い群には肯定的要素が多く見られたので「前向き」というカテゴリー名をつけた。

前向きとカテゴリー化した

表 4-5 #10 被験者の実例

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | 分類 |
|-----|--------------------------------|----|------|----|------|-----|------|-------|
| 10 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 団体職員 | 前向き |
| A | 【人の役に立つことが嬉しい】 | | | | | | | 意欲 |
| B | 【人と接することが楽しい】 | | | | | | | 意欲 |
| C | 【自然と触れ合うことが楽しい】 | | | | | | | 意欲 |
| D | 【時間や心に余裕ができた事で新しく気付くことがある】 | | | | | | | 共感・受容 |
| E | 【季節の移り変わりを見るのが好きだ】 生き続けるものへの共感 | | | | | | | 意欲 |
| F | 【健康は宝だ】 | | | | | | | 意欲 |
| G | 【体は要求する】 | | | | | | | 意欲 |
| H | 【人との接し方はちょっとした言葉のかけ合いからはじまる】 | | | | | | | 習慣 |
| I | 【最後は痛い思いはしたくない】 | | | | | | | 意欲 |
| J | 【健康であれば人の役に立てる】 | | | | | | | 習慣 |

説明概念の「寂寥」「恐怖」「喪失」が多い群には失調要素が多く見られたので「不全状態」というカテゴリー名をつけた。

凡例) 日常生活の体験の中で通常行われている概念パターンから習慣という説明概念を選択し分類を行なった。変化や気づきなどの行為の概念パターンは受容(共感)と言う説明概念を選択し分類を行なった

不全状態とカテゴリー化した

表 4-6 #24 被験者の実例

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | 分類 |
|-----|--|----|-------|------|--------|-----|------|-------|
| 24 | 89 | 女性 | 足腰の弱り | 4人部屋 | 介護2 | 特養 | 和裁 | 不全状態 |
| A | 【足が弱ってきた】 | | | | | | | 喪失 |
| B | 【歌を歌う事が好きだ】 私はね 悲しい歌が好き・・・ | | | | | | | 寂寥 |
| C | 【主人のことが好きだ】 頻繁に来てもらいたいけどそれは言えない | | | | | | | 寂寥 |
| D | 【病気になりたくてなったわけではない】 | | | | | | | 喪失 |
| E | 【土に戻るか天の星になるかわからないけどそのようになりたい】 ②に戻る諦観 | | | | | | | 寂寥・諦観 |
| F | 【身体が丈夫でないので仕方がない】 | | | | ②に戻る諦観 | | | 寂寥・諦観 |
| G | 【家に帰りたいけど迷惑になるからがまんする】 | | | | ②に戻る諦観 | | | 寂寥・諦観 |

凡例) 寂しさ、悲しさ、それに伴う不安とうの体験の概念パターンを「喪失・寂寥・恐怖」という説明概念で分類を行なった

説明概念の「受容」が多い群は「現状維持」とカテゴリー名をつけた。なお現状維持群は失調要素と肯定要素がバランスをとっているという特徴が見られた。

現状維持とカテゴリー化した

表 4-7 #19 被験者の実例

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | 分類 |
|-----|------------------------------|----|-------|-------|------|-----|------|------|
| 19 | 93 | 女性 | 大腿骨骨折 | 1人暮らし | 支援2 | 在宅 | 専業主婦 | 現状維持 |
| A | 【腰が悪くなったのでデイサービスをやめた】 ②に戻る諦観 | | | | | | | 諦観 |
| B | 【自分のことはやらないといけない】 | | | | | | | 習慣 |
| C | 【もう一度若いころに戻ってみたい】 | | | | | | | 意欲 |
| D | 【最後は土に帰ると思う】 | | | | | | | 受容 |
| E | 【息子が突然亡くなった】 | | | | | | | 喪失 |
| F | 【足が悪いのでヘルパーさんに頼んでいる】 | | | | | | | 諦観 |

凡例) Fの足が悪いのでヘルパーさんを頼むという概念パターンは気を遣うことがネガティブな側面に作用する場合も考えられるが人に頼むということは一旦受け容れて安定的な状態すなわちポジティブな側面が「諦観」という説明概念から推察され分類を行なった。

以上の分類手順でカテゴリー化を行なった結果、「前向き」の群には「意欲」「習慣」「絆」の説明概念で捉えられ「肯定要因」が多いことがわかった。
また「不全状態」の群には「恐怖」「寂寥」「喪失」の説明概念で捉えられ「失調要因」が多いことがわかった。
さらに「現状維持」の群は「肯定要因」と「失調要因」がバランスをとっていることが示された。数名に「前向き」「不全状態」「現状維持」に属さない特徴が見られこれらは達観もしくは超越が選出された。

インタビューデータを調査研究から抽出した説明概念で分類し結果「前向き」「不全状態」「現状維持」「超越」の4つのカテゴリーに分類した。

4. 説明概念からの結果

調査研究から抽出した説明概念を分類した結果を表4－8にまとめた

表4－8 説明概念で分類した50人の属性

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | 抽出された分類 |
|-----|----|----|-------------|-----------|------|-----|-----------|---------|
| 14 | 75 | 女性 | 乳がん | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 超越(伝承) |
| 3 | 72 | 男性 | 特になし | 夫婦と息子 | 未 | 在宅 | タクシードライバー | 達観 |
| 4 | 82 | 男性 | 胆管結石 | 息子と2人 | 介護1 | 在宅 | 教師 | 達観 |
| 7 | 66 | 男性 | 特になし | 息子と2人 | 介護1 | 在宅 | 教師 | 現状維持 |
| 11 | 70 | 女性 | 関節リュウマチ | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 現状維持 |
| 15 | 73 | 女性 | 特になし | 1人暮らし | 支援1 | 在宅 | 翻訳業 | 現状維持 |
| 18 | 88 | 女性 | 小児麻痺 | 1人暮らし | 支援2 | 在宅 | 自営業 | 現状維持 |
| 19 | 93 | 女性 | 大腿骨骨折 | 1人暮らし | 支援2 | 在宅 | 専業主婦 | 現状維持 |
| 22 | 85 | 女性 | 坐骨神経痛 | 孫と2人 | 介護1 | 在宅 | パート | 現状維持 |
| 30 | 95 | 女性 | 特になし | 老人ホーム | 介護2 | 在宅 | 専業主婦 | 現状維持 |
| 33 | 88 | 女性 | 慢性腎炎 | 1人暮らし | 介護2 | 在宅 | 専業主婦 | 現状維持 |
| 40 | 79 | 男性 | 脳血管障害 | 夫婦 | 介護2 | 在宅 | 会社員 | 現状維持 |
| 45 | 75 | 女性 | 腰痛, 肺炎 | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 現状維持 |
| 47 | 91 | 女性 | 熱中症 | 1人暮らし | 介護4 | 在宅 | アーティスト | 現状維持 |
| 16 | 67 | 女性 | すべり症 | 夫婦, 娘 | 未 | 在宅 | 自営業 | 不全状態 |
| 21 | 71 | 女性 | 特になし | 孫と2人 | 介護1 | 在宅 | パート | 不全状態 |
| 24 | 89 | 女性 | 足腰の弱り | 4人部屋 | 介護2 | 特養 | 和裁 | 不全状態 |
| 28 | 93 | 女性 | 特になし | 息子夫婦, 孫2 | 介護1 | 在宅 | 専業主婦 | 不全状態 |
| 29 | 85 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 不全状態 |
| 32 | 75 | 男性 | 膠原病 | 夫婦, 息子 | 介護3 | 在宅 | 会社員 | 不全状態 |
| 34 | 85 | 男性 | 右下肢閉塞性動脈硬化症 | 1人暮らし | 介護2 | 在宅 | 自営業 | 不全状態 |
| 35 | 93 | 女性 | 通院中 | 1人暮らし | 支援1 | 個室 | 保育士 | 不全状態 |
| 36 | 88 | 女性 | うつ | 1人暮らし | 介護1 | 個室 | 市の事務 | 不全状態 |
| 37 | 73 | 女性 | リュウマチ | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 在宅 | 不全状態 |
| 39 | 80 | 女性 | 肺がん | 1人暮らし | 未 | 在宅 | 会社員 | 不全状態 |
| 41 | 76 | 男性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 会社員 | 不全状態 |
| 44 | 76 | 男性 | 脳血管障害 | 夫婦 | 介護2 | 在宅 | 会社員 | 不全状態 |
| 46 | 84 | 男性 | 前立腺 | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 不全状態 |
| 48 | 75 | 女性 | 腰痛 | 1人暮らし | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 不全状態 |
| 1 | 85 | 女性 | 脾臓が弱い | 1人暮らし | 支援2 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 2 | 86 | 女性 | 脊髄強縮症 | 1人暮らし | 介護1 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 5 | 73 | 男性 | 骨粗鬆症 | 夫婦と子供 | 未 | 在宅 | 公務員 | 前向き |
| 6 | 82 | 女性 | 子宮筋腫 | 夫婦と息子 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 8 | 80 | 男性 | 脊髄強縮症 | 夫婦2人 | 未 | 在宅 | 自営業 | 前向き |
| 9 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 前向き |
| 10 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 自営業 | 前向き |
| 12 | 69 | 女性 | 特になし | 4人(息子, 孫) | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 13 | 94 | 女性 | 大腸がん | 1人暮らし | 介護2 | 在宅 | 内職 | 前向き |
| 17 | 66 | 女性 | リュウマチ | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|----|-------|-----------|------|----|------|-----|
| 2 0 | 7 2 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 税務署 | 前向き |
| 2 3 | 7 6 | 女性 | 強皮症 | 夫,娘,孫 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 2 5 | 7 2 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 栄養士 | 前向き |
| 2 6 | 6 8 | 女性 | 特になし | 夫,義母,息子 2 | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 2 7 | 6 8 | 男性 | 特になし | 夫,母,息子 2 | 未 | 在宅 | 警備員 | 前向き |
| 3 1 | 7 2 | 男性 | 特になし | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 自営業 | 前向き |
| 3 8 | 9 1 | 女性 | 坐骨神経症 | 息子夫婦,孫 | 介護 1 | 在宅 | 栄養士 | 前向き |
| 4 2 | 7 3 | 男性 | 腰痛 | 夫婦 2 人 | 未 | 自宅 | 会社員 | 前向き |
| 4 3 | 9 1 | 男性 | 腰痛 | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | テキヤ | 前向き |
| 4 9 | 100 | 女性 | 特になし | 息子夫婦,孫 | 介護 2 | 在宅 | 専業主婦 | 前向き |
| 5 0 | 9 2 | 男性 | 悪性おでき | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 会社員 | 前向き |

5. 諦観のポジティブとネガティブの捉え方の検討

50 人の高齢者のインタビュー調査の語りを老いや死の捉え方に着目し概念パターンを調査研究から抽出した説明概念で分類しカテゴリーにまとめていった。

結果、不全状態から現状維持に向かうには A,B,C の 3 つのルートが考察された。
A は「③ネガティブな諦め」のプロセスでは価値に捉われてしまい②不全状態をぐるぐる回る道筋が検討された
B は②不全状態を経由し④現状維持に直接向かう道筋が検討された
C は②不全状態から③ポジティブな諦めを経由し現状維持④へ向かう道筋が検討された

以上の検討結果ら説明概念による分類を図 4－3 に不全状態からの 3 つのルートとして検討図として示した。

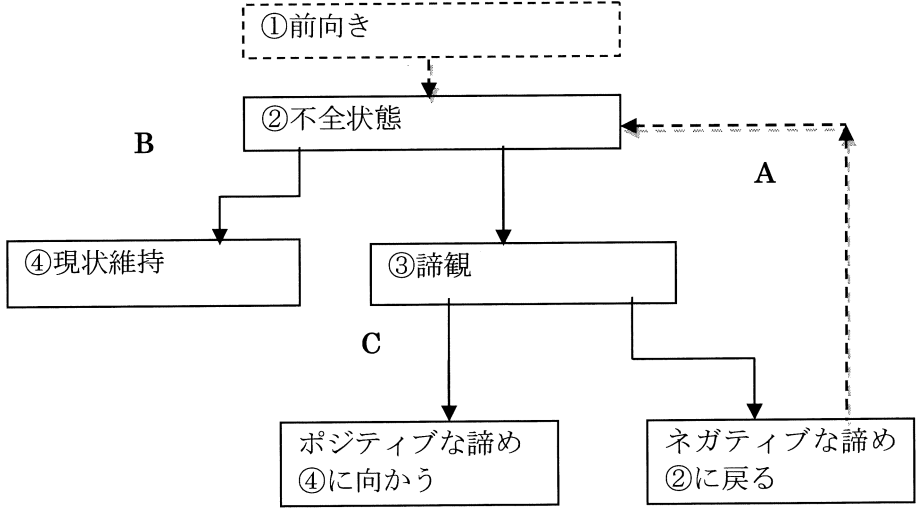


図 4－3 不全状態からの打開図

6. 前向きから現状維持までの概念パターンの検討

インタビューを実施した高齢者 50 人が老いや死をどのように捉えるかの捉え方（パターン）に着目し検討した。

表 4－9，表 4－10，表 4－11，表 4－12，表 4－13 は 50 人の高齢者の不全状態から現状維持に向かう群のパターンを抜粋しまとめたものである。

表 4－9 は上記 「不全状態からの打開図 4－3」 に示した①前向きのパターンをまとめたものである。

表 4－9 ①前向きの捉え方のパターン

歌を歌う事が好きだ、悲しい歌が好き…
体力の衰えを感じるようになってきた
意欲は案外なくなるらない
まだまだやれる
やりたいがはじまらない
年齢的にそんなに衰えていない
死について考えない

表4-10に②不全状態のパターンをまとめ検討した.

表4-10 不全状態の捉え方のパターン

目が悪くなってきた
身体機能が低下する
90で人工肛門をつけた
足を悪くした
家族が癌にかかった
こんなふうになるとは思わなかった(身体機能の不全)
体の調子が良くない
身体機能が低下している
足が弱ってきた
主人のことが好きだけどがまんする
病気になりたくてなったわけではない
世間の基準で言う楽しみっていうのはもうない
膠原病にかかって苦しかった
昔から頑丈な体じゃあなかった
入院していたので足腰が弱い
抱っこされたことはなかった
お母さんにしつとしていた
このままでは寝たきりになると感じる
心理的な問題から階段を登れなかった
戦争で死ねばよかった
日本は嫌いだ・汚いと思う
歩けないのがつらい
日本は嫌いだ
病気になって終わった
弱い者をいじめるのは人間のクズだ
いじめに耐えてきた
何をやっても気力が出ない
いつまでこの苦しみが続くのかと思うと嫌だ
食べ物の味がわからない
このままでは寝たきりになると考える辛い
心理的な問題から階段を登れなかった
戦争で死ねばよかった
辛い時に何もしてもらえなかった
子供の頃はすごくさみしかった
目的がないので希望がない
関係性の構築が出来なくて辛い
女房が死んで生きていてもしょうがない
痛いのが辛い
弱い者をいじめるのは人間のクズだ
生きている事が辛い
何をやっても気力が出ない
いつまでこの苦しみが続くのかと思うと嫌だ
母に体罰をした事を悔やむ
わかってももらえず辛い
おばさんに随分わがまま言ったなあと悔やまれる
洋服がほしくても持っていると言われる
母親にいじめられすごく辛かった
嫁とはしゃべらない
一番つらかったことは甘えられなかったことだ
夫に対して悔やまれる
私はすごく愛情に飢えていたのかもしれない

表4-1-1は③ネガティブな諦めのパターンをまとめた
諦観にはネガティブな側面とポジティブな側面が捉えられた。

表4-1-1 ③諦観（ネガティブな諦め）のパターン

前に進むためには諦める
息子が突然亡くなった
寂しいが我慢するしかない
身体が丈夫でないので仕方がない
家に帰りたいけど迷惑になるからがまんする
どうして戦争で死ななかったのだろう
両親を早く亡くし他者との関係性の中で生きてきた
こんなふうには人の世話になるとは思わなかった
最後まで修行だ

表4-1-2にポジティブな諦めのパターンをまとめた。

表4-1-2 ③諦観（ポジティブな諦め）の捉え方のパターン

病気をして考え方が変わった
人生にはいろいろある
一生懸命生きると悔いがない
土に戻るのもいいものだ
有意義な人生を送りたい
体に無理をかけない
目が見えない分しあわせだと感じる
寂しい気持ちが随分良くなってきた
足が悪いので仕方なくヘルパーさんを呼ぶが疲れる
夫はだんだん回復していった
弱い人を助けなくちゃいけない
人の世話になるのが当たり前だった
土に戻るか天の星になるかわからないけどそのようになりたい
不思議な体験をして考えが変わった
人との関係性が大切だ

ポジティブな諦めのパターンは④の現状維持に向かう事が示唆された。

表 4－1 3 に現状維持の捉え方をまとめ検討した

表 4－1 3 ④現状維持の捉え方のパターン

| |
|--------------------|
| 一人で考えることが好き |
| 家族が大切だ |
| 死に対してこだわらない |
| 人間の命は永遠ではないんだ |
| 大家族の方が案外と良かった |
| 楽しみはよく参加する合唱の集いである |
| 無理して長生きしたいとかはない |
| 地域の人と付き合いたい |
| 有意義な人生を送りたい |
| 日常生活の中で無理をせず楽しみがある |
| 普通の良さを感じている |
| 苦勞した分、今は幸せだ |
| 日本の良さを知っている |
| 最後は土に返ると思う |
| 自然に癒される |
| ボランティアは今までの恩返しだ |
| 夫とはとても上手くいった |
| 触れ合いの中でだんだん回復していった |

図 4－3 は上記の検討からの結果をまとめたものである。

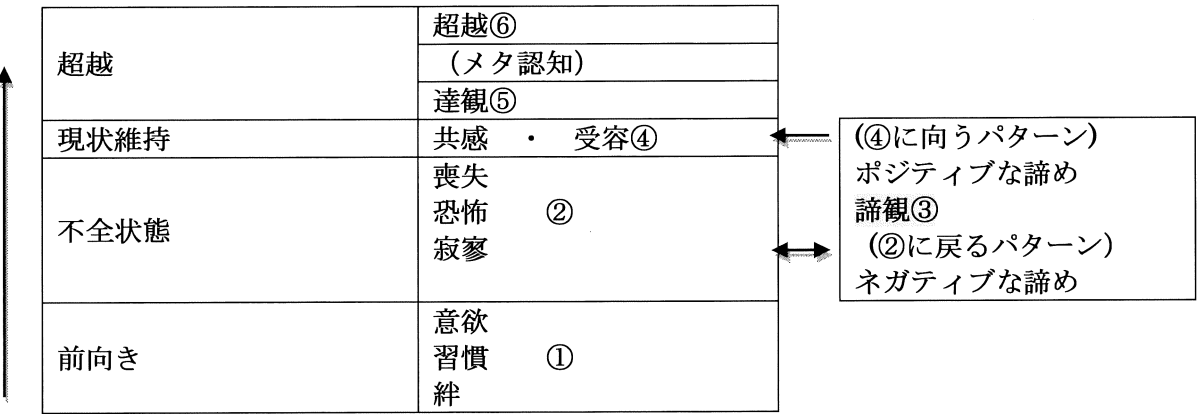


図 4－3 説明概念からの結果

諦めにネガティブな側面とポジティブな側面が考察された.ネガティブな側面の諦めの場合は不全感が持続し、ポジティブな側面の諦めの場合は受け容れ内的に安定した状態として現状維持に向かうことが考察された。

第3節 #14 実例による老いや死の捉え方

1. TAE を応用した質的分析

高齢者 50 人のインタビューデータを分析した結果 3 名が「前向き」「不全状態」「現状維持」に当てはまらない特徴が見られそれらは「超越もしくは達観」と捉えられた。

中でも #14 の実例に超越としての特徴が見られたため構造をより深く見ていく必要があると判断した。

得丸(2010)が提唱するステップ式質的研究は TAE を質的研究に応用したものである。

個別の内的構造を可視化するのに適した手法であるため #14 を詳細に見ていき内的構造を可視化するには適していると判断しこの手法を分析に用いた。

表 4-14 は #14 の老いや死の捉え方のパターンを表にまとめ示した。

表 4-14 実例 #14

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | 分類 |
|-----|-------------------------|----|-----|----|----------|-----|------|--------|
| 14 | 75 | 女性 | 乳がん | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 超越(伝承) |
| A | 【コミュニケーションが楽しい】 | | | | | | | 意欲 |
| B | 【最後はありがとうと言って終わりたい】 | | | | | | | 超越 |
| C | 【あの時代は～だった】 | | | | | | | 回顧 |
| D | 【選択した事に対して後悔する】 | | | | | | | 受容 |
| E | 【長く生活すると情けができる】 | | | | | | | 達観 |
| F | 【知的に分析する】 | | | | | | | 受容 |
| G | 【伝承する事が大切だ】 | | | | | | | 超越 |
| H | 【家族には生活の歴史がある】 | | | | | | | 回顧 |
| I | 【看病するために生まれてきた】 | | | | | | | 超越 |
| J | 【最後までありのままにいる】 | | | | | | | 超越 |
| K | 【清い死を伝承する】 | | | | | | | 超越 |
| L | 【これからさきなるようになる】あるがまま地点 | | | | | | | 達観 |
| M | 【失う事を受け入れる】辛いことを受け入れられる | | | | 受け容れて諦める | | | 受容 |
| N | 【自然に癒される】 | | | | 生命体への共感 | | | 超越 |

2. 実例 # 1 4 の概要

1 4 実例概要を以下のように示した (*かっこ内にトランスクリプトのページを表示した)

インタビューイは、「典型的な農地改革でゼロになった」(p.9.21)「衰退した家庭」(p.9.12)である母の実家に、戦後の食糧難や母親の病気などの事情で、父母とともに「疎開した」(p.12.2)。そこには、結核で夫と長男夫婦に先立たれた祖母が、孫を育てながら暮らしていた。引っ越した当初は地元の子供達にいじめられたが、中学生になって勉強面で頭角をあらわし「息を吹き返し」(p.11.15)。大学に進学するつもりで勉強に励んでいた。しかし、東京大空襲で父の職場が焼失したことなどもあり、「やっぱり生活が苦しくなると子どもだってわかるわけ」(12,24)で、「(高校) 2年の時に(進学を)スパッと諦めた」(p.12.26)。「今、考えると、私あれから貧乏割合平気になったのかもしれない」と回想している(p.12.29)。

インタビューイが結婚してしばらく経ったころ、母方の祖母が、脾臓の病気のために、手術をしたものの助かる見込みがないという状況に至った。祖母は、「自分で点滴はずしてくれって言って」(p.27.30)亡くなった。インタビューイは、祖母のそのような生き方を「清いのよ」「それこそ・・・それこそ・・・学問ではない」(p.28.8.)と、敬意の念をもって語っている。

インタビューイの母は腎臓の病で、インタビューイは、13年間、食事のカロリー計算を続けて支えた。しかし、やがて腎臓透析が必要となり、悪化していった。インタビューイは「こっちも必死だったけどね。あのね。人ひとりの命って言うのは重いか軽いかじゃあないよね。必死にさせるね」と支え続けたが、「最後の1週間前くらいかなあ・・・もう私の手に負えない。私も随分支えてきたつもりだけどもう私の手に負えないなあ・・・手から離れて行くなあって予感がした」。かかりつけの病院で「もう心臓弱ってるから生きてるのが不思議だ」と入院させてもらえない状況になった翌々日、「もうあの病院には行かない。行ったらしょうがない」という母が腹痛を訴え、別の病院の救急に担ぎ込んだが、そこで、母は痰が絡んであっけなく亡くなってしまう。「だっ広い廊下にカーテン一つで隅っこにおいやられている」ような場所での、医師たちが別の救急患者に対応している間の出来事だった。臨終の場面を、「最期に私を拝んで・・・私を拝んだってしょうがないのにね,, , こんどは、これ,, , 『ありがとう』って,, , 言って」「母もね。最期は清かったねえ」(28.19)と回想している。インタビューイ自身も乳がんの手術を経験し、現在もリンパ浮腫に悩んでいるが、「私は信念を持ってね、母と同じつもりでいようと思ってるの。母はね。自分で点滴の管をはずしてくれって言って死んでいった母親(の娘)」(p27.30.)で、「あれは清かったっていうわけ。それで(母は)ずっと(祖母は清かったと)思ってたから私もそうやって思っていればそうなるかなあって・・・」(p27.34.)と、祖母、母と続いてきた死に臨む「清い」態度を受け継ごうとの「信念」をもっている。

母には12歳年下の妹がいたが「母が亡くなる半年前に叔母がいつちゃったの。で母が駄目になってね」「だからね、だからやっぱり皆それぞれ自分のあれ(寿命)があるわけよね・・・母は妹が自分より先に逝ったから堪えたんだろうね」(p.23.14.)と語る。また、叔母(母の妹)は、「結果としては病気に逃げ込み弱〜い」(p.23.3.)のために、「結局自分に目を向けてほしいから病気を語るわけよね。そしたら家族がうっとしくなるわけ。そしたらますます疎外感があってね。すごく遠慮するようになったちゃったからね」(P.23.7.)と、叔母の家族が、叔母の「弱さ」を受け止めきれなかったと分析している。

インタビューイの父は、「根は弱い」が「家族に強い」人で、「あの時代は明治の男」(P.18.7.)で、女性を「さげすむ」(p.18.9.)ところがあり、母は、「私(インタビューイ)」という、

はけ口がいたから（別れなかった）。今だったら別れていただろう。」と何度も言っていた。子どもに対しても「おまえは俺の子供だろうが、俺はお前の親だ。親に対して何だ」というのが根底にあり、「おまえの夫は何をしている。あんな男」と言っていた（p.18.29.）。「母に逝かれてからは、今度、対象が全部私」で、時には夫が「ターゲットになった」。「理性であったものがお酒で取り払われると毎晩出て」（27,16）、「言葉の暴力」（23.26）になった。やがて痴呆が加わって「抑制力が無くなり」、「どうしてあんな言葉、出るんだろう」というような「鋭い言葉」で、「階段の下から（インタビューイらのいる2階に向かって）1時間怒鳴っている」こともあった（27.11）。インタビューイは「家に帰りたくなかったよ、帰宅恐怖症」（P.23.33.）という状況になりながらも、それに耐え、同居を続けた。そんな父を、「どっか弱い人っていうのはさらに弱い人をいじめる」（18.24）「うちの父の弱いところがそれだったんだけどね、アルコール中毒だったと思う」（23.25）と分析している。

最後の3年間、老人ホームに入れ、同室者は「視線が動くだけ」で「意識がない」と感じられる人ばかりの環境となったことで父の痴呆が急激に進んだことに対して「私のミスかなあって感じもしたんだけどね」（P.26.5.）と言いつつも、肺炎を繰り返し「3回目にはもう効く薬がなくてね。さすが98（歳）、あの命の灯をね、灯し尽くしていくっていうのはね」（p.35.35.）「往生だね、大往生。だから緩慢なる死だったと思う」（P.36.19.）と回顧している。

何十年も前に見た「痴呆と知っていればもっと優しく出来たのに」という新聞投書が「ずっと頭の中にあり」、「つらく当たったり当たられたり、昔はそうやって皆、耐えたんだなあ」と思っている（P.27.1.）。一方で、インタビューイは、「母親はファザーコンプレックス」（p.8.19.）で自分の父を誇りにしており「二言目にはうちの母の口から自分の父親のあれが出るもんだから」（p.8.26.）、「その誇りの父に焼きもちをやいて最後までひがんでいたのが家の父かもしれない」とも分析し、「小さい家の一家の集まりでも」「歴史は、ほんと面白いと思うわ、わたし」と言う。

インタビューイの夫は、戦後、中国大陸からの引き揚げに際して辛酸をなめた人で、「小さい時のそういう苦労してきたからなのか」（p.19.5.）「情け」のある（P.7.11.）で、「弱い人」を「見てられない」「やさしい人」（p.7.8.）である。「ずっと（インタビューイの両親と）一緒に住んで、で、うちの両親のその最後までちゃんと見てくれた」（p.6.4.）。父親の「言葉の暴力」に対しても「見かねると前出てきてやるんだけど『やりなさんな』って」いう態度で、母親に対しては遠くの病院への送迎をするなどインタビューイの両親を献身的に支えた。インタビューイは、「主人はね、良くやってくれたのよ」（p.7.7.）と感謝している。「生活歴史、生活を一緒に共にしたのが情だと思う。あのね血、血はない」と、夫は「情け」のある人だ（p.17.34.）と語る。

インタビューイの娘は、有名中高一貫校から一流大学に進み、一流企業に勤めている。結婚したが離婚し、現在は、一人で暮らしている。「今の世の中皆離婚には寛大でしょう」（娘の）女友達だって本当に結婚しない友達ばかり」というインタビューイは、「私の生きがいは。だって今、孫がいるわけじゃあなし。だからね。ほんとうにささやかなあれだとしたらまあ・・・主人と二人でどこまで生きれるかわかんないけど生きて・・・」（p.5.14.）と言う。「うちの母が『死んじゃったら知らないもん』ってよく言ってたの。ほんでうん私もそれわかる。死んじゃったら私も知らないから」（p.31.24.）、「（娘が）どうせ跡見てくれる人いないんだから合祀みたいなところに入りたいていうからお母さんもお父さんもそのあなたと一緒に合祀のところ連れて行ってきて構わないって言うてある」（p.31.34.）と、母から受け継いだ「清い」信念を娘と共有しようとしている。

死について、両親を送ってから、「(死んだら) 無になる」(p.33.8.)「どっかで境界線を越さなきゃあならない」(P.33.9.) と思っているが、「不安は別にない。たぶんね、それはね。年が解決してくれるみたい」とし (P.33.9.)「恐怖はない」(P.33.9.)。「自分でどんどん納得していくっていう」(P.33.3.) 感じだと語っている。

Aさんは、近所のスイミングスクールで偶然出会い 10 年以上、「ずっとつるんで泳いでいた」「家族の次にあの人の一番長くいた」人である。「別に特別仲がいいわけじゃあないんだけども」、「2 人の歌」として、「ケッセラ～セラ～」ってなるようになるって歌うたいながら 2 人でやってた」という、気持ちが通じ合う間柄である。インタビューイより 20 歳以上年下であるが、最近、完治が難しい肉腫癌を患い、手術をした。インタビューイは、「まあ 2 人に 1 人は癌になるんだからしょうがないけどもね」としながら、インターネットで病気について調べたり、Aさんの姉から諦めの表情を感じとったりし、病状を案じている。「この間一日だけお見舞いに行った時に、(Aさんは) パッと『ケッセラセラですよ。#14』と言った。インタビューイは、「あんな大病して」「この人強いなあって思ってたけどもね。強い。あれ弱い人だどこっちがまいっちゃうから」と、Aさんを「強い人」と表現する。インタビューイは、自らの死について尋ねられたときも、「Aさんのケッセラセラと同じだと思う」と答えている。

最近の世の中について、「土に這いつくばって生きてても、子どものその家のきちんとした「伝承」っていうのがあったらそんなにはみ出るような子どもっていなかった」「今の親は家にいたって子どもに教える部分が少ない」と嘆いている。また、「私たちの時代ぐらいじゃあないかなあ。あの～自分の祖母や祖父の生活歴史を記憶しているというのは」とも言う。

インタビューの最後になって、インタビューイは友人のことを語り始める。その友人は、500 年続いた油屋に嫁ぎ、姑と夫を看取り、傾いた家業を、「ずっとしこしこしこしこやってた」。しかし、いよいよ「商売が成り立たなくなつて」、「倒産という形をとって」「1 年かけて」「その家をたたみ」、息子夫婦の家の六畳間に引っ越した。インタビューイは、その友人のことを「500 年の歴史を閉じたわけ」で、「家をたたんだ彼女も偉いとおもうけどね。もうどうにもならないってね。余談だけどね」と語っている。

3. TAE分析過程

オリジナルの TAE は以下の 14 ステップからなっている

表 4-15 オリジナル TAE の見出し

| | |
|---|---|
| Step1-5: フェルトセンスから語る | |
| Step1 | フェルトセンスに形を得させましょう |
| Step2 | あなたのフェルトセンスの中の論理以上のものを見つけましょう |
| Step3 | キーワードを通常の意義で使っているのではない事に気づきましょう |
| Step4 | あなたが 3 つのキーワードそれぞれに意味させたい事を言う文、または新鮮な句を書きましょう |
| Step5 | 新鮮で言語学的には通常ではないような文を書くことによって、あなたが各キーワードに意味させたかった事を拡張しましょう |
| Step6-8: 側面(実例)からパターンを見つけましょう | |
| Step6 | 側面を集めましょう |
| Step7 | 集めた側面に詳細な構造をみせてもらいましょう |
| Step8 | 側面を交差させましょう |
| Step9 | 自由に書きましょう |
| Step10-14: 理論構築 TAE のひとつの目的がいまや達成されようとしています・潜在的な知性をおつ伝達可能なものにします。もしあなたが望めば、形式的、論理的理論を構築することへ進むことができます | |
| Step10 | タームを選択し、相互に関係づけましょう |
| Step11 | ターム間の本来的関係を探求しましょう |
| Step12 | 恒久的なタームを選んで相互に組み込みましょう |
| Step13 | あなたの理論を自分のフィールドの外に適用してみましょう |
| Step14 | あなたの理論を自分のフィールドのなかで拡張し、適用しましょう |

TAE は 3 つのパートからなり全体で 14 のステップからなっている（詳細な分析プロセスは補論 2, P127 を参照）

TAE の理論作りは、パート 1 では全体と中核の把握、パート 2 では側面とその関係性の把握、パート 3 では構造化へと進んでいく。

パート 1: ここでの作業はデータの全体をくまなく読みそこからフェルトセンスを形成し分析の中核として活用できるようジェル化させることである。

具体的には TAE ステップ 1 から 5 の手順にそってマイセンテンスへと文章化していった。最終的に得られたマイセンテンスは「清いを受け継ぐ感じ」であった

パート2：再度データの全体を見直し、TAEステップ6から7に従って、#14実例の中に暗在している概念パターンを文章化していった
<#14から抽出されたパターンの抜粋例>

- P1 最後はありがとうと言って終わりたい
- P2 失う事を受け入れる
- P3 長く生活すると情けができる
- P4 清い死を伝承する
- P5 これからさきなるようになる
- P6 看病するために生まれてきた

さらにTAEステップ8から9に従って以上の6つのパターンを交差させ（P1×P2、P1×P3、P1×P4、P1×P5、P1×P6・・・P6×P5）と合計30パターンが交差により新たに生成された。以下が交差によって生成されたパターンの抜粋例である。

清い死を送りたい
これから先なるようになる
スパッとあきらめる
長く生活すると情けができる
コミュニケーションがたのしい
失うことを受け容れる
伝承が大切

パート3：ここまでの作業からステップ10以降の作業を行うためにパターンの中に100近くの語句の中から選定されたA：諦観、B：意味づけ、C：共振、響応（情け、感動）。各ターム間の相互関係をA=B, B=C, C=A, B=A, C=B, A=C、(ステップ10)さらにAは本来B, Bは本来C, と相互関係を見る作業から「澄む」という新たなタームが生成された際のプロセスを示す
<ターム間の相互関係を見る作業（抜粋）>

Aは本来C 諦観は本来響応である（の性質を持っている）
メモ：諦めるというところに感動がある。ネガティブだけどポジティブ、ニュートラル、ナチュラル、自然な状態、きばらない、無理しない・・・雑念が消えて軽くなる感じ。澄んでくる・・・→ 新用語：「澄む」
このような作業を通して暫定的なタームから新たなタームが生成されO：「得心がいく」P「情け」Q「澄む」さらにはこれらのターム間の相互連結（OをPとQから定義する、PをOとQから定義する・・・）を行う中で不足しているタームが補われR：「わかってもらえたこと」S：「辛さ」、理論を構築するための基本的な概念が選定された。そしてリサーチクエッションである「老いや死の捉え方」について意味の構造が次のように理論化された。

4. 実例#14の観念の構造体

「澄む・あきらむ」理論の構造体

「自分で」「辛さ」に「意味づける」ことは、それに共感してくれる他者の「情」にふれ、「わかってもらえたこと」に「得心がいく」ことで可能になり、そうすることで「澄む・あきらむ」ことに開かれていく。

#14のデータから感じたフェルトセンスで表現された観念の構造体は上記の概念パターンによって表現した。

観念構造体をメタファーで捉え表現したものを図4-4に表した。

メタファーで表わす方法はTAEの特徴である。概念パターンで捉えるプロセスを実施すると自然と概念パターンのイメージが浮かび上がってくる。これは概念パターンで表現した際その意味について言語化されていないが知っている感じをイメージなどで捉える次元が言葉で捉える以前にあるためであると考えられる。

老いや死の捉え方の変化（#14の実例）

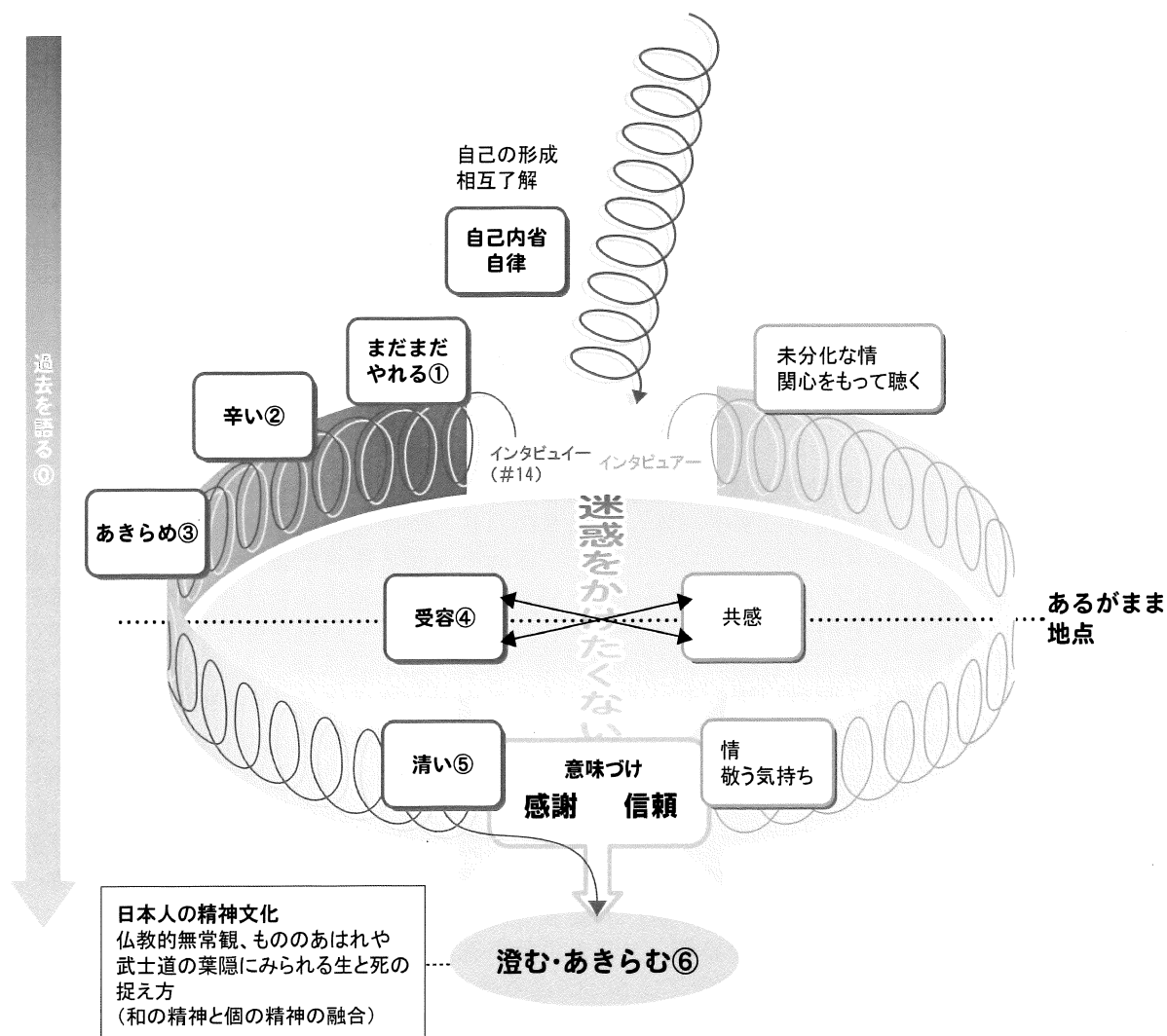


図4-4 老いや死の捉え方の変化(#14の実例)

5. #14 実例分析結果からの考察

老いと死の捉え方、澄む・あきらむ（図4-4 老いと死の捉え方 #14の実例 P. 73 参照）の観念の構造体が意味するところを「日本古来の精神文化の特質」と関連づけて説明する。

日本人の精神文化の中には、自然と融合しつつ生活をおくる中で精神文化が育まれてきたことがうかがわれる。それは日本の風土における自然観照の中に表れている。（木村 1972）⁹³⁾ 自然の変化を感じることは、日本の伝統的な自然観照のスタイルである。

日本は、地理的に温帯に位置しており、四季の変化がはっきりしている。

このような気候は、自然の変化に敏感な文化を育んだ。

このことは、日本を代表する詩の形式である「俳句」において、定められた「季語」を詠みこむことがルールとされたことからわかる。

日本人の自然との関わり方の底流には、このような日本古来の文化的精神が流れているといえるだろう。

伝統的な自然観照のスタイルでは、自然の変化は、「今、美しいものもやがては衰え消えていく」という「はかない命への共感」であり運命観を含意する。

その例は「ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ（紀友則）⁹⁴⁾

「世の中に たえて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし（在原業平）⁹⁵⁾

『万葉集』の代表的な歌、「春の野にかすみたなびき裏悲し この夕焼けに鶯啼くも（大友家持）」には没落してゆくもの、滅びゆくものの悲しみ、運命への享受がこめられている。⁹⁶⁾

さらに『平家物語』冒頭部分の、「沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」は、それを如実に語っている。これらは仏教的無常観に通じているといえるだろう。

その後、武士道精神が生まれ、死を決意しつつも自らの運命は自らが決めるという宿命的に死ぬのではなく自分の意志によって生死を決定するという精神文化へと変化していったと考えられる。このようにして江戸時代には「武士道」による「葉隠」の精神が展開された。「葉隠精神」とは「武士とは死ぬことと見つけたり」に由来される死生観である。

しかし「葉隠」の精神の真髄は「死ぬ気になればなんでもできる」という死の側から生を捉えた際の生に対する存在の意味を含んでいると捉えられる。（大森 1979）⁹⁷⁾

この精神は自分の意志によって生死を決定するという価値観であり潔さを意味し、仏教的無常観にみられる運命観や宿命観と「生と死の意思決定」とが微妙に絡んで日本人の「清く潔い」精神へと発展していったと考えられる。

このように捉えるならば「澄む」にみられる意識状態とは、仏教的な無常観を享受し他者や他のものに対して慈悲を抱きつつ、自らの意志で「老いや死」に向き合う覚悟を含んだ「個」としての精神状態であると捉えられる。

この個としての覚悟を含んだ意識状態が「澄む・あきらむ（明らむ）」であると捉えられる。この態度に見られる価値観は、自ら内面的に「老いや死」に向きあいどのように捉えるかという「信念」によると考えられる。他者や他のもの（#14の場合は家族）に対する関係性からの信頼や感謝の気持ちと生や死に対する自らの意志による潔い態度との融合で、いろいろあったがこだわりから解放され自らの意志で明らかになるという和の精神が融合した個が「澄む・あきらむ」であると捉えられる。

「澄む」とは、他者や他のもの側から捉えた状態である。

辛い事を引き受ける潔い姿・状態は、未だ当事者にとっては無意識の段階であると推察される。しかしその状態に関わる者が「澄む」と捉え「尊敬の気持ち」を抱く。

すると当事者にはそれが伝わるので意志や確信として「明らかになる」ことが推察できる。

主体にとって明らかな状態は、「澄む・あきらむ」としての意識状態であると捉えられる。

それが#14が、「自分でカテーテルを外してくれ、もういいから」と言って亡くなって逝った祖母の清い死を回顧して「あれは清かったというわけ」と捉えている。

「清い」は家族から捉えた#14の祖母の死に対する潔い姿、生き様であると捉えられる。

ゆえに「清い」は日本人の個としての精神であると捉えられる。
和の精神とは関係性の中で他者の存在を通して自己が生かされて存在すると捉えられる。
つまり「清い」を家族が捉えて敬意の念を抱くので、#14の祖母は「自らがカテーテルを外してくれ、もういいから(充分頑張って生きたから・・)」と自分の生を肯定的に捉え明らかにできたのではないかと推察される。

日本人の和の精神とは、関係性の中で育まれた精神である。ゆえに和の精神とは、一人では成り立たず他者の存在を介して自己が浮かび上がってくる中での精神的状態であると捉えられる。老いの超越機能は「全体性」や「統合性」と関係しておりそれは自我の統合の次の発達課題とされる「自己(潜在性)」であると考えられる。

関わる者が当人の潔いこだわりの取れた姿を「澄む」と捉え尊敬を表するからその捉え方を返して当事者に意識化され「明らむ」のでその状態が「澄む・あきらむ」に至るのだと考えられる。従来は#14にみられるように家族が共に生活する中で日本人の「個としての精神」を伝承してきた事が示唆される。

#14は母親の終焉を「私も最後の1週間前くらいかなあ。・・・もう私の手に負えない。私も随分支えてきたつもりだけどもう私の手に負えないなあ・・・手から離れて行くなあって予感がしたの・・・最後は私を拝んで『ありがとう』って言ってね 母も清かったね。私もそう思っていたらそうなるかなあ」と「清い精神」を回顧し自らも伝承している。しかし現代社会は核家族化が進行し、社会の構造が変化している。

2011年の調査では、独居世帯が全体の3割を初めて超え、独居世帯の数が核家族世帯を上回った。今後、この状況は増大する傾向にある。

従来の大家族制のもとでは、家族が生活を共にする中で上から入ってくるものがあつた。一緒に生活をする中で、上からの経験知が家族に伝えられそれが精神文化として伝承されていたことが#14の実例から示唆された。

しかし環境が変化し価値観が多様化する現代においては、清い精神自体が薄らいできている事が示唆される。

老いや死の問題は、身体機能が衰退し、喪失体験を含むため「辛く悲しい」ネガティブな側面が多い。多くの場合「辛い」体験と向き合う事を避けようとしがちである。

しかし高齢期は機能が衰退し、かつ親しい人との別れなどを体験する事が多くなる喪失期である。この事についてトーンスタンは、「老いの超越」に向うにはライフクライシス(人生の危機的状況)が阻害要因にも促進要因にもなりうると述べている。(Tornstam,2005)⁹⁸⁾ そこに必要とされるのは、辛さや悲しい体験を、他者や他のものと共感・受容する中で相互に了解しひいては互いの捉え方に変化が生じる可能性があるということだと考えられる。そこには日本人の清い精神の意図する「相互了解」に通じると考えられる。ゆえにおのずと関わりあいの中で「信念の伝承」に至る可能性があると考えられる。

日常生活の何気ない対話の中で交差が生じるのでそこから新たな意味が浮かび上がってくる。そのような何気ない対話の中での交差体験を繰り返す中で「辛さや悲しさ」を受け容れて引き受ける事ができると考えられる。

関わる者は、潔い姿に感銘をうけ尊敬の念を抱くのでそれが当事者に伝わる中で当事者の内的動機づけとしての自己治癒力につながり、新たな価値へと向かう事が考察できる。

分析で表現した観念の構造体「わかってもらえたことに得心がいく」は、他者の存在を介して初めて知る(わかる、認識する)ことができる状態という意味として捉えられる。他者や自己、自然との対話の中から徐々に情動的な体験が沁みこんでくる。その中から互いの意図が響き合ってくる。他者の体験と交差が生じ、最終的に「わかってもらえた」と得心すること(相互理解)で辛さや悲しさを引き受けていくことが可能となると考えられる。得心とは受け容れることでありそれは「諦観」を意味する。その時点で質が変わりあるがままの状態に至り癒しとなる事が示唆される。

調査研究で捉えた老いの超越の要因の「諦観」の意味とは辛いを感じ一旦あきらめることであると考えられる。しかしあきらめきれずに辛いをぐるぐる巡る場合と受け容れて前に進むあきらめが示唆された。

「受容」とは「諦観」の中にあり受け容れて引き受けた諦めの認識が「諦観」であると捉えられる。

以上の事をエリクソンは超越に向うには、人生の初期段階に形成された信頼形成からの相互依存による希望であると述べている。

#14の実例では、家族が生活を共にする中で、上からの清い精神が娘、孫、そのまた子供に連続的に伝承されている事が示唆された。

老いの超越とは、身体機能が衰退し喪失体験を繰り返しながらもそこと向きあっていく段階で捉え方が変化し、こだわりから解放される可能性によって新たな価値が認識される状態であると考えられる。大切な事は辛く悲しい気持ちを一旦ありのままを感じる事に意味があると考えられる。辛さや悲しさの中にある微妙な「機微」を感じる中で了解し他者の辛さや悲しさも伝わってきて共感できる。この体験を繰り返しながら心身に沁みこんで響き合う中で受け容れていくことで(受容が可能となり)納得し引き受けて認識し前に進めると考えられる。

老いや死と向き合う中でこれまでの過去体験からの価値観やいろいろな事が想起される中で、こだわりに捉われていた状態からふっとあがった時に「あるがままの状態」へと変化することが考えられる。そしてこだわりから解放されるので引き受けて新しい捉え方へと進めると考えられる。これが「受容」であり受け容れられるから観念として肯定的な諦め、つまりは「諦観」に至ると考察できる。

ゆえにそこからふっと何か新しいものが見えてくる。そこに個としての意志や確信が明らかになる。自己内対話が自己を意識として捉えるので明らかになり、それが「あきらむ(明らむ)」のだと捉えられる。

一方他者にとってはそれが澄んだ状態(澄む)として捉えられるのだと考えられる。

他者は明らかに引き受ける潔い姿に「尊敬の念」を感じる。相手の意図を互いが感じ意図が響き合うので相互の捉え方に変化が起こる現象が「澄む・あきらむ」の中に捉えられる。

#14の清い死の実例では「辛い」が「清い」へ変化し関わる者の「未分化な情(無意識の情)」が「情」に変化する現象が示された。

高齢社会には「相互了解」からの捉え方の変化が大切で否定的側面を感じる中で肯定的な価値を見出す可能性が考察できる。

老いの超越とはネガティブな側面と向き合いそこを乗り越えていく事であると考えられる。そしてそこは誰もが通るべき方向性でありそこを克服するには他者との関係性の中での対話が阻害要因にも促進要因にもなることが考察できる。

第4節 澄む・あきらむモデルからのCODE化

1. 澄むあきらむの構造に関して

老いの超越の特徴がみられた#14 の実例をもとに個人の観念の構造体からモデルを生成した。仮説モデルは自分で辛さに意味づけるのは他者の情に触れわかってもらえたことに得心がいく事で可能となり、そうすることで「澄む・あきらむ」ことに開かれていくという観念の構造体を捉えた。

この概念パターンの表現は老いの超越の第8段階から第9段階への移行期のプロセスの中でマイナスとプラスの側面として捉えられた「諦観」の質的意味を表している。

①「自分で辛さに意味づける」とは諦観の「諦らむ」という情動体験のプロセスを表している。高齢期は喪失体験や機能の衰退を体験する機会が多くなる時期である。ゆえに辛さや悲しさを多く体験する時期である。そのプロセスを感じる中で他者や他物と自己との「同と異」を感じながら意味づけを行ない気づいていく(志向性)中で変化するプロセスを表している。

②「他者の情に触れわかってもらえたことに得心がいく」とは諦観の「明らむ」という意志や確信のプロセスを表し受け容れるプロセスを表している。

さらに「あるがまま地点」でこのままでいいという質感に変化していくプロセスを表している。この質感は現象学では「クオリア」と言う概念で捉えられ心理臨床では「メタ認知」という概念で捉えられ現象学的には志向性による質感のようなものとして捉えられる。

最終的に人間が死と直面し向き合い・受け容れるプロセスは「澄む・あきらむ」という葛藤のない素のままの意識状態へと開かれる可能性が#14 の実例の中から示唆された。

TAE で捉えた老いの超越・澄む・あきらむをゴールとして捉えた場合①から⑥の7つのカテゴリーを捉えた。7つのカテゴリーを図4-5に示した。

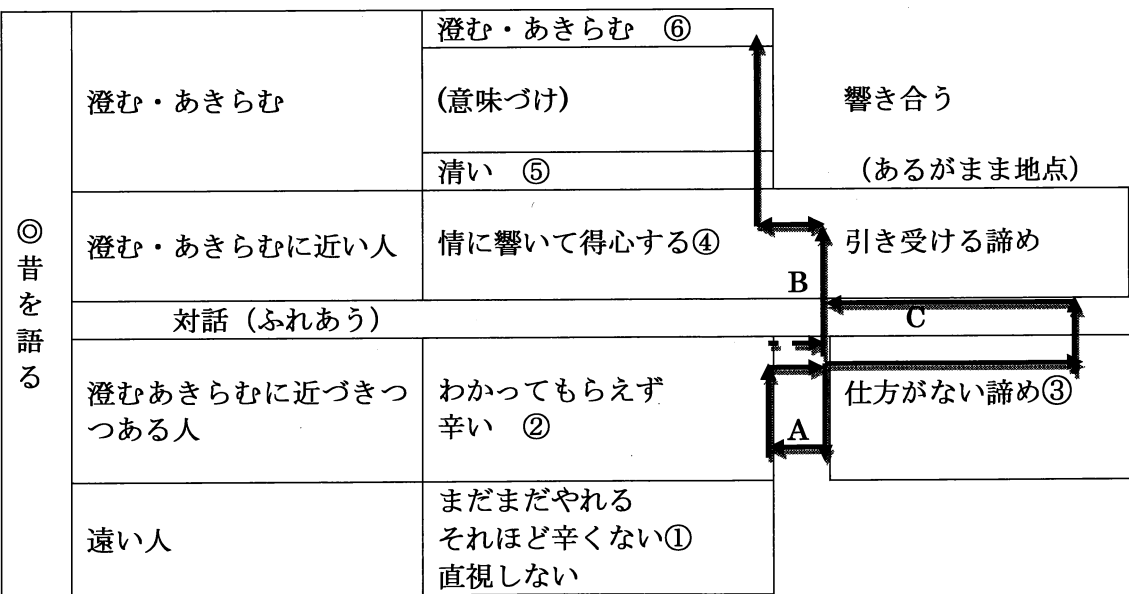


図4-5 澄む・あきらむの捉え方

生成した仮説モデルをもとに他の49実例を7つのCODEに分類していった。具体的には#14の実例のモデルの7つのCODE①から⑥のパターンを49実例の概念パターンから検討しCODE化していった。

例えば4-16は実例#1の老いや死の捉え方の概念パターンAからFまでの6つをインタビューデータから分析し示した。概念パターンAは【意欲は案外なくならない】を#14の老いや死の捉え方のモデルをもとにCODE化すると①まだまだやれる、それほど辛くない、直視しないという概念パターンとしてCODE化できる。このCODE化を他の実例にも同様に行なっていく老いや死の捉え方のTAE分析でモデル化したものにCODE化を行なっていく。

表4-16, 表4-17, 表4-18, 表4-19, 表4-20は概念パターンの実例と生成したモデルからCODE化しまとめたものである。CODE化の①が多い群は澄む・あきらむに至るにはまだ遠いので遠い人というカテゴリー名を付けた。なお澄む・あきらむモデルからCODE化し概念パターンで捉えた場合CODE間《②-③》を捉えることが可能となり意識の流れの変化のプロセスを捉えているため動的である。これがTAE分析の特徴である。今回#14老いや死の捉え方のモデルに他の49実例をCODE化したので遠い人、近づきつつある人、近い人、澄む・あきらむという4つのカテゴリーのどこかに位置づけるよう分類して示してある。TAEで観念の構造体を文で表現すると動きを捉える事が可能となりそれがTAEの特徴である。

2. 分析のプロセス

以下の表 4-16, 表 4-17, 表 4-18, 表 4-19, 表 4-20 は老いや死の体験の捉え方を#14 の実例分析をもとにモデル化し他の 49 実例をコード化した際の概念パターンを示したものである。

表 4-16 高齢者の体験の捉え方 実例 # 1

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|---------------------------------|----|-------|-------|------|-----|------|-------|
| 1 | 85 | 女性 | 膵臓が弱い | 1人暮らし | 支援 2 | 在宅 | 専業主婦 | 遠い人 |
| A | 【意欲は案外なくなるらない】 | | | | | | | 1-A-① |
| B | 【死はまだ考えない】 | | | | | | | 1-B-① |
| C | 【健康であることが生きがいだ】 | | | | | | | 1-C-① |
| D | 【年齢期にはそんなに衰えていない】 | | | | | | | 1-D-① |
| E | 【親から大事に育てられたという記憶がある】 | | | | | | | 1-E-0 |
| F | 【自分の責任でやっていけなくちゃあと言う気持ちで満州に行った】 | | | | | | | 1-F-① |

表 4-17 高齢者の体験の捉え方 実例 # 2

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|----------------------|----|-------|-------|------|-----|------|----------|
| 2 | 86 | 女性 | 脊髄強縮症 | 1人暮らし | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| A | 【やりたいが始まらない】 | | | | | | | 2-A-① |
| B | 【死については考えない】 | | | | | | | 2-B-① |
| C | 【大家族の方が案外と良かった】 | | | | | | | 2-C-④ |
| D | 【楽しみはよく参加する合唱の集いである】 | | | | | | | 2-D-④ |
| E | 【寂しいが我慢するしかない】 | | | | | | | 2-E-②・③ |

表4-18 高齢者の体験の捉え方 実例#3

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|--|----|------|-------|------|-----|-----------|-------------|
| 3 | 72 | 男性 | 特になし | 夫婦と息子 | 未 | 在宅 | タクシードライバー | 澄む・あきらむ(達観) |
| A | 【好きなことをやっているからいつ死んでもよい】 | | | | | | | 3-A-④-⑤ |
| B | 【偏見がない】 | | | | | | | 3-B-④ |
| C | 【植物や虫に生き物をいとおしむ】 | | | | | | | 3-C-④ |
| D | 【何事に対しても欲がない】 | | | | | | | 3-D-④ |
| E | 【趣味を楽しむためには分け隔てなく誰とでも人とつきあう】 | | | | | | | 3-E-⑥ |
| F | 【差別しないで助ける】 誰に対しても困った人に対してできる範囲で手を差し伸べる | | | | | | | 3-G-⑥ |
| G | 【思い残すことはない】やる事ややって来たので思い残すことはない | | | | | | | 3-G-⑥ |

偏見がなく生きものをいとおしみ、分け隔てなく誰とでも付き合うことには「あるがまま」の状態が推察される。

表4-19 高齢者の老いや死の捉え方 実例#4

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|-----------------------------------|----|------|-------|------|-----|------|-------------|
| 4 | 82 | 男性 | 胆管結石 | 息子と2人 | 介護1 | 在宅 | 教師 | 澄む・あきらむ(達観) |
| A | 【苔の観察をずっとやっている】地道な事を続ける事に意味がある | | | | | | | 4-A-⑤ |
| B | 【自然とのふれあいが大切。命の次、幼児体験】 | | | | | | | 4-B-⑦ |
| C | 【病気となった時に人情を味わって考え方が変わった】他者との相互作用 | | | | | | | 4-C-⑤ |
| D | 【生活の飢餓状態、飢餓に痛めつけられたのでコツコツやる】 | | | | | | | 4-D-④-⑤ |
| E | 【最後は感謝して亡くなりたい】信頼や感謝の気持ち(他者性を感じる) | | | | | | | 4-E-④-⑤ |
| F | 【むごい場面(戦争)に遭遇しているので死に対して不安がない】 | | | | | | | 4-F-⑤ |
| G | 【遊びが自然の中だった】自然との相互作用で共感⇄受容体験がある | | | | | | | 4-G-④ |
| H | 【戦争が終わった時に本にむさぼりついた】 | | | | | | | 4-H-⑤ |
| I | 【内面を磨くことが大事だ】自分の信念と向き合う(清いと意味づけ) | | | | | | | 4-I-⑤-⑥ |
| J | 【自分のやり方に自信がついた】意味づけ(確信) | | | | | | | 4-J-⑤ |

D: 飢餓状態を体験し飢餓に痛めつけられた。体験から意図することは日々の生活の地道な役割をコツコツやる事に意義を見出している。ひいては他者への思いやりの気持ちに通じていることが推察される

表4-20 高齢者の老いや死の捉え方 実例#5

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|----------------|----|------|-------|------|-----|------|---------|
| 5 | 73 | 男性 | 骨粗鬆症 | 夫婦と子供 | 未 | 在宅 | 公務員 | 遠い人 |
| A | 【やりたいが始まらない】 | | | | | | | 5-A-0-① |
| B | 【死については考えない】 | | | | | | | 5-B-① |
| C | 【食べるために畑作業をした】 | | | | | | | 5-C-① |
| D | 【趣味を極めたい】 | | | | | | | 5-D-① |
| E | 【痛いことが出てきた】 | | | | | | | 5-E-① |
| F | 【習うよりは慣れる】 | | | | | | | 5-F-0 |

体験の捉え方から検討し「澄む・あきらむモデル」に照合してCode化していった。それによって「遠い人」「近づきつつある人」「近い人」に分類した。

同様な作業を他の実例にも行い概念パターンによって50実例を位置づけたものを結果として示した

3. 49 実例を澄む・あきらむモデルで CODE 化した結果

表 4－2 1 は TAE でモデル化した CODE に他の 49 実例を分類しまとめたものである。

表 4－2 1 50 人高齢者の実例

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|----|----|---------|------------|------|-----|-----------|-------------|
| 14 | 75 | 女性 | 子宮がん | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 澄む・あきらむ(伝承) |
| 3 | 72 | 男性 | 特になし | 夫婦と息子 | 未 | 在宅 | タクシードライバー | 清い |
| 4 | 82 | 男性 | 胆管結石 | 息子と 2 人 | 介護 1 | 在宅 | 教師 | 清い |
| 7 | 66 | 男性 | 特になし | 息子と 2 人 | 介護 1 | 在宅 | 教師 | 近い人 |
| 15 | 73 | 女性 | 特になし | 1 人暮らし | 支援 1 | 在宅 | 翻訳業 | 近い人 |
| 30 | 95 | 女性 | 特になし | 老人ホーム | 介護 2 | 在宅 | 専業主婦 | 近い人 |
| 33 | 88 | 女性 | 慢性腎炎 | 1 人暮らし | 介護 2 | 在宅 | 専業主婦 | 近い人 |
| 40 | 79 | 男性 | 脳血管障害 | 夫婦 | 介護 2 | 在宅 | 会社員 | 近い人 |
| 45 | 75 | 女性 | 腰痛, 肺炎 | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 栄養士 | 近い人 |
| 47 | 91 | 女性 | 熱中症 | 1 人暮らし | 介護 4 | 在宅 | アーティスト | 近い人 |
| 2 | 86 | 女性 | 脊髄強縮症 | 1 人暮らし | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 11 | 70 | 女性 | 関節リュウマチ | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 12 | 69 | 女性 | リュウマチ | 4 人(息子, 孫) | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 13 | 94 | 女性 | 大腸がん | 1 人暮らし | 介護 2 | 在宅 | 内職 | 近づきつつある人 |
| 16 | 67 | 女性 | すべり症 | 夫婦, 娘 | 未 | 在宅 | 自営業 | 近づきつつある人 |
| 18 | 88 | 女性 | 小児麻痺 | 1 人暮らし | 支援 2 | 在宅 | 自営業 | 近づきつつある人 |
| 19 | 93 | 女性 | 大腿骨骨折 | 1 人暮らし | 支援 2 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 21 | 71 | 女性 | 特になし | 孫と 2 人 | 介護 1 | 在宅 | パート | 近づきつつある人 |
| 22 | 85 | 女性 | 坐骨神経痛 | 孫と 2 人 | 介護 1 | 在宅 | パート | 近づきつつある人 |
| 24 | 89 | 女性 | 足腰の弱り | 4 人部屋 | 介護 2 | 特養 | 和裁 | 近づきつつある人 |
| 28 | 93 | 女性 | 特になし | 息子夫婦, 孫 2 | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 29 | 85 | 女性 | 甲状腺 | 夫婦 | 介護 1 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 32 | 75 | 男性 | 膠原病 | 夫婦, 息子 | 介護 3 | 在宅 | 会社員 | 近づきつつある人 |

| No. | 年齢 | 性別 | 既病歴 | 家族 | 介護認定 | 居住地 | 前の職業 | CODE |
|-----|-----|----|-------------|----------|------|-----|------|----------|
| 34 | 85 | 男性 | 右下肢閉塞性動脈硬化症 | 1人暮らし | 介護2 | 在宅 | 自営業 | 近づきつつある人 |
| 35 | 93 | 女性 | 通院中 | 一人暮らし | 支援1 | 個室 | 保育士 | 近づきつつある人 |
| 36 | 88 | 女性 | うつ | 1人暮らし | 介護1 | 個室 | 市の事務 | 近づきつつある人 |
| 37 | 73 | 女性 | リュウマチ | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 在宅 | 近づきつつある人 |
| 39 | 80 | 女性 | 肺がん | 1人暮らし | 未 | 在宅 | 会社員 | 近づきつつある人 |
| 41 | 76 | 男性 | 腰痛 | 夫婦 | 未 | 在宅 | 会社員 | 近づきつつある人 |
| 42 | 76 | 男性 | 脳血管障害 | 夫婦 | 介護2 | 在宅 | 会社員 | 近づきつつある人 |
| 46 | 84 | 男性 | 前立腺 | 夫婦, 息子 | 介護1 | 未 | 会社員 | 近づきつつある人 |
| 48 | 75 | 女性 | 腰痛 | 1人暮らし | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 近づきつつある人 |
| 5 | 73 | 男性 | 骨粗鬆症 | 夫婦と子供 | 未 | 在宅 | 公務員 | 遠い人 |
| 6 | 82 | 女性 | 子宮筋腫 | 夫婦と息子 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 遠い人 |
| 8 | 80 | 男性 | 脊髄強縮症 | 夫婦2人 | 未 | 在宅 | 自営業 | 遠い人 |
| 9 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 遠い人 |
| 10 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 自営業 | 遠い人 |
| 17 | 66 | 女性 | リュウマチ | 夫婦 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 遠い人 |
| 20 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 未 | 在宅 | 税務署 | 遠い人 |
| 23 | 76 | 女性 | 強皮症 | 夫,娘,孫 | 未 | 在宅 | 専業主婦 | 遠い人 |
| 25 | 72 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 遠い人 |
| 26 | 68 | 女性 | 特になし | 夫,義母,息子2 | 介護1 | 在宅 | 専業主婦 | 遠い人 |
| 27 | 68 | 男性 | 特になし | 夫, 母,息子2 | 未 | 在宅 | 警備員 | 遠い人 |
| 38 | 91 | 女性 | 坐骨神経症 | 息子夫婦, 孫 | 介護1 | 在宅 | 栄養士 | 遠い人 |
| 43 | 91 | 男性 | 腰痛 | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | テキヤ | 遠い人 |
| 44 | 73 | 男性 | 腰痛 | 夫婦2人 | 未 | 自宅 | 会社員 | 遠い人 |
| 49 | 100 | 女性 | 特になし | 夫婦 | 介護2 | 在宅 | 専業主婦 | 遠い人 |
| 50 | 92 | 男性 | 悪性おでき | 夫婦 | 介護1 | 在宅 | 会社員 | 遠い人 |

4. 老いや死の捉え方 2012 年モデルの概念新パターン

澄む・あきらむをゴールとして老いの超越までの道筋の捉え方を検討したものを概念新パターンとし検討したものを以下にまとめた

①「まだまだやれる」という捉え方の概念新パターンと②「わかってもらえないのが辛い」と③「仕方がないと諦めきれない」というという老いや死の捉え方は情動体験の捉え方の概念新パターンとして捉えた。

表 4-22 情動体験に向かう捉え方（概念新パターン①②③）

①まだまだやれるの捉え方の概念新パターン

歌を歌う事が好きだ、悲しい歌が好き
体力の衰えを感じるようになってきた
意欲は案外なくなる
まだまだやれる
やりたいがはじまらない
年齢的にそんなに衰えていない
死について考えない

②わかってもらえないのが辛い捉え方の概念新パターン

眼が悪くなってきた
身体機能が低下する
90 で人工肛門をつけた
足を悪くした
家族が癌にかかった
こんなふうになるとは思わなかった（身体機能の不全）
体の調子が良くない
身体機能が低下している
足が弱ってきた
主人のことが好きだけどがまんする
病気になりたくてなったわけではない
世間の基準で言う楽しみっていうのはもうない
膠原病にかかった
昔から頑丈な体じゃあなかった
入院していたので足が弱い
抱っこされたことはなかった
お母さんにしっとしていた
何もしてもらえなかった
このままでは寝たきりになると考える
心理的な問題から階段を登れなかった
日本は嫌いだ・汚いと思う
歩けないのがつらい
日本は嫌いだ
病気になって終わった
弱い者をいじめるのは人間のクズだ
生きている事が辛い
何をやっても氣力が出ない
いつまでこの苦しみが続くのかと思うと嫌だ
食べ物の味がわからない
このままでは寝たきりになると考える辛い
心理的な問題から階段を登れなかった
戦争で死ねばよかった
辛い時何もしてもらえなかった

母に体罰をした
子供の頃はすごくさみしかった
目的がないので希望がない
関係性の構築が出来なくて辛い
女房が死んで生きていてもしょうがない
目的がなく希望がない
弱い者をいじめるのは人間のクズだ
生きている事が辛い
何をやっても気力が出ない
いつまでこの苦しみが続くのかと思うと嫌だ
母に体罰をした事を悔やむ
わかってもらえず辛い
おばさんに随分わがまま言ったなあと悔やまれる
洋服がほしくても持っていると言われる
母親にいじめられすごく辛かった
嫁とはしゃべらない
一番つらかったことは甘えられなかったことだ
夫に対して悔やまれる
私はすごく愛情に飢えていたのかもしれない
いじめに耐えてきた

③仕方がないと諦めきれない捉え方の新パターン

前に進むためには諦める
息子が突然亡くなった
寂しいが我慢するしかない
身体が丈夫でないので仕方がない
家に帰りたいけど迷惑になるからがまんする
どうして戦争で死ななかったのだろう
両親を早く亡くし他者との関係性の中で生きてきた
最後まで修行だ
こんなふうに人の世話になるとは思わなかった

辛さと向き合い受け容れ(受容)諦観し質的に中身が変化し意志や確信に向かう捉え方の概念新パターンを表5-2にまとめ検討したものである。

表4-23 意志や確信へ向かう捉え方の概念新パターン(⑤、⑥)

⑤引き受ける捉え方の新パターン

(個の確立)

一人旅が好き
家族が大切だ
死に対してこだわらない。あまり長生きしたいとかはない
人間の命は永遠ではないんだ
大家族の方が案外と良かった
楽しみはよく参加する合唱の集いである
一人で考えることが好き
地域の人と付き合いたい
有意義な人生を送りたい
日常生活の中で無理をせず楽しみがある
普通の良さを感じている
苦労した分今は幸せだ
日本の良さを知っている
最後は土に返ると思う
自然に癒される
ボランティアは今までの恩返しだ
夫とはとても上手くいった
触れ合いの中でだんだん回復していった

⑥あるがままの捉え方の概念新パターン

(態度的価値)

とらわれていない
偏見がない
これからさきなるようになる
伝承が大切
病気になった時に人情を味わって考え方が変わった
内面を磨くことが大事だ
生活の飢餓状態、飢餓に痛めつけられたのでコソコソやる
むごい場面(戦争)に遭遇しているので死に対して不安がない
好きなことをやっているからいつ死んでもよい
病気をしてから体力がなくなったので自分に負荷をかけない
植物を生き物として愛情をもって育てる
自然とのふれあいが命の次に大切に癒しにある。
ものを言わない相手に気配りをする
失う事を受け入れる

⑥他者を介して存在の意味へと向かう概念新パターン

意味づけ(質感)

⑥澄む・あきらむの捉え方の新パターン

(他者を介して存在の意味へと向かう)

#14 実例 最後は自分でカテーテルを外してくれと言って亡くなって逝った祖母の清さ(清い死のあり方)を家族は「あれは清かった」(あの死のあり方、捉え方は清かった)と家族が捉えて語り伝えている。

そこには他者の存在をかえして自己の存在の意味へ向かう清く潔い精神に通じていると捉えられる。その死のあり方、捉え方を受け継いだインタビューの母親も肝臓を患い闘病しながら最後は「ありがとう」と家族に感謝の意を表して亡くなって逝った。

#14 自身もその清き潔い生き方(信念)を受け継ぎ「私もそう思っていればそうなるかなあ」と生き様を受け継いでいる

5. 説明概念からの分類とTAEモデル化でCODE化した結果比較

調査研究から抽出した説明概念でカテゴリー化した場合とTAE分析で#14実例からモデル化してCODE化して49実例を位置づけた場合の結果を比較した。

結果、説明概念で捉えた場合「前向き」のカテゴリーに属していた4名がTAEモデルで位置づけた場合には「不全状態（近づきつつある人）」へと変化して捉えられた。この結果を検討するとTAEは概念パターンで体験を捉えるためより動的であり個人の内的な構造の動きを捉えるのに向いた手法であると考えられる。

またこの結果は、老いの超越に至る道筋を第8段階の絶望側から捉えた場合、「辛い情動体験を一旦認め感じる中で変化するプロセスすなわち諦らむ」を経由して第9段階の老いの超越に向うという道筋が示唆された。このことは誰に対しても普遍に当てはまる事であると推察される。

表4-24 説明概念からの分類とTAEでモデル化し他の49実例をCODE化した比較

| No. | 年齢 | 性別 | 介護認定 | 前の職業 | 分類 (説明概念で分類した結果) | CODE (#14の実例からモデル化し他の49実例をCODE化した結果) |
|-----|----|----|------|-----------|---------------------|---|
| 14 | 75 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 超越(伝承) | 澄む・あきらむ (伝承) |
| 3 | 72 | 男性 | 未 | タクシードライバー | 達観 | 清い |
| 4 | 82 | 男性 | 介護1 | 教師 | 達観 | 清い |
| 7 | 66 | 男性 | 介護1 | 教師 | 現状維持 | 近い人 |
| 15 | 73 | 女性 | 支援1 | 翻訳業 | 現状維持 | 近い人 |
| 30 | 95 | 女性 | 介護2 | 専業主婦 | 現状維持 | 近い人 |
| 33 | 88 | 女性 | 介護2 | 専業主婦 | 現状維持 | 近い人 |
| 40 | 79 | 男性 | 介護2 | 会社員 | 現状維持 | 近い人 |
| 45 | 75 | 女性 | 介護1 | 栄養士 | 現状維持 | 近い人 |
| 47 | 91 | 女性 | 介護4 | アーティスト | 現状維持 | 近い人 |
| 2 | 86 | 女性 | 介護1 | 専業主婦 | 前向き | 近づきつつある人 |
| 11 | 70 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 前向き | 近づきつつある人 |
| 12 | 69 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 前向き | 近づきつつある人 |
| 13 | 94 | 女性 | 介護2 | 内職 | 前向き | 近づきつつある人 |
| 31 | 72 | 男性 | 特になし | 夫婦 | 前向き | 近づきつつある人 |
| 16 | 67 | 女性 | 未 | 自営業 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 18 | 88 | 女性 | 支援2 | 自営業 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 19 | 93 | 女性 | 支援2 | 専業主婦 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 21 | 71 | 女性 | 介護1 | パート | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 22 | 85 | 女性 | 介護1 | パート | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 24 | 89 | 女性 | 介護2 | 和裁 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 28 | 93 | 女性 | 介護1 | 専業主婦 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 29 | 85 | 女性 | 介護1 | 専業主婦 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 32 | 75 | 男性 | 介護3 | 会社員 | 不全状態 | 近づきつつある人 |

| | | | | | | |
|----|-----|----|------|------|------|----------|
| 34 | 85 | 男性 | 介護 2 | 自営業 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 35 | 93 | 女性 | 支援 1 | 保育士 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 36 | 88 | 女性 | 介護 1 | 市の事務 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 37 | 73 | 女性 | 介護 1 | 在宅 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 39 | 80 | 女性 | 未 | 会社員 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 41 | 76 | 男性 | 未 | 会社員 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 42 | 76 | 男性 | 介護 2 | 会社員 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 46 | 84 | 男性 | 介護 1 | 会社員 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 48 | 75 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 不全状態 | 近づきつつある人 |
| 1 | 85 | 女性 | 支援 2 | 専業主婦 | 前向き | 遠い人 |
| 5 | 73 | 男性 | 未 | 公務員 | 前向き | 遠い人 |
| 6 | 82 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 前向き | 遠い人 |
| 8 | 80 | 男性 | 未 | 自営業 | 前向き | 遠い人 |
| 9 | 72 | 女性 | 介護 1 | 栄養士 | 前向き | 遠い人 |
| 10 | 72 | 女性 | 介護 1 | 自営業 | 前向き | 遠い人 |
| 17 | 66 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 前向き | 遠い人 |
| 20 | 72 | 女性 | 未 | 税務署 | 前向き | 遠い人 |
| 23 | 76 | 女性 | 未 | 専業主婦 | 前向き | 遠い人 |
| 25 | 72 | 女性 | 介護 1 | 栄養士 | 前向き | 遠い人 |
| 26 | 68 | 女性 | 介護 1 | 専業主婦 | 前向き | 遠い人 |
| 27 | 68 | 男性 | 未 | 警備員 | 前向き | 遠い人 |
| 38 | 91 | 女性 | 介護 1 | 栄養士 | 前向き | 遠い人 |
| 43 | 91 | 男性 | 介護 1 | テキヤ | 前向き | 遠い人 |
| 44 | 73 | 男性 | 未 | 会社員 | 前向き | 遠い人 |
| 49 | 100 | 女性 | 介護 2 | 専業主婦 | 前向き | 遠い人 |
| 50 | 92 | 男性 | 介護 1 | 会社員 | 前向き | 遠い人 |

第5章 総合考察

第1節 モデルの検討

1. 本研究の仮説モデルの位置づけ

高齢者が「老いや死」をどのように捉え、どのように生きるかという意味づけを行なうプロセスが人間の well-being に影響し、そこには日本独特な特徴があるのではないかという点に関して意識の流れを探究した。本調査研究で捉えられたのは、次の諸点である。

第1に、調査研究から3つの要因「諦観」「受容」「達観」を見出した。「諦観」にポジティブな側面とネガティブな側面がある事がわかった。老いの超越に至る意識の道筋として自我統合 VS 絶望の絶望側から超越に至る道筋を捉え第8段階から第9段階の移行に「あきらめ」が「諦観」に変化する意識の流れを捉えた。さらに調査研究で捉えた老いの超越に至る因子項目である「諦観、受容、達観」の構造は「諦観」に辛いを感じる中で受け入れ変化する情動体験のプロセスから意志や確信と言う思考のプロセスに至る「明らむ」へ変化しあるがまま地点でこのままでいいという達観に至る道筋を繰り返しながら螺旋状をゆっくりと上がっていく道筋が老いの捉え方として示唆された。

一方 どうすることも出来ない諦めがありそれが死と対比する意識状態として「澄む・あきらむ」が示唆された。

以上の検討をもとに老いや死の捉え方の意識の流れを可視化し以下にまとめた

【諦観（諦らむ）の意味について】

老いの超越の内的構造に「諦観」が位置づけられた。諦観には辛い情動体験へ戻るネガティブな諦め（諦めきれないパターン）と辛いを受け入れ引き受ける（受け入れ引き受けるパターン）の二つの意味があることが考察された。辛い情動体験を受け容れることが「受容」であり「受容」が観念にあがってくると「諦観」が捉えられることが明らかとなった。そこで質（中身）が変わり「このままでいい」と意志や確信に向かうことが考察された。

【諦観（明らむ）の意味について】

「老いの超越」の「澄む・あきらむ」に至るには、人や自然、ものなどとの対話的な関わりの中での共感・受容体験を繰り返すなかで体験が込みこんでいくプロセスによって辛い辛い体験が肯定的なあるがまま（達観）へと変化することが考察された。

【超越（澄む・あきらむ）の意味について】

また関わる者が「清い」や「澄む」という当事者の状態を捉え「あるがままの状態」に敬意を抱くことでどのような個も「明らむ」や「潔い」の意志や確信へ向かうプロセスが示唆された。この事は、高齢期の内的な心的発達の適応を捉える上で重要で「辛い体験」から「このままでいい」と意志や信念という認識へ中身が変化し認知への働きかけがされ適応が促進されることが考察できる。一方関わる者の態度によっては、心的適応が阻害される可能性が示唆された。つまり日本人の「個」とは他者や他のものの存在を介して自己の存在へどのような個も向かうことが推察された。

また人間が死と対比する意識状態にどうする事もできない「諦め」がありその究極に「澄む・あきらむ」が示唆された。

さらに先行研究からトーンスタンの捉えた超越との次元について検討した。

身体機能が衰退し身近な人との喪失体験が多くなる老年期の課題としては「超越」を検討した。超越に至る道筋にはネガティブ要因をどのように捉えていくかが課題とされ、これまで十分な検討がなされてこなかった。今回ネガティブな側面から概念パターンを検討した結果を整理し、全体像を図5-1、図5-2、図5-3、図5-4 (P89,91,92 参照)に示した。

超高齢期は、身体機能の衰退や身近な人との喪失体験が多くなる時期である。エリクソンの捉えた発達課題「統合対絶望」の「絶望」の側から内的な構造を捉え第9段階の道筋を検討した。結果、高齢者の内的構造にネガティブな側面を感じ仕方がないと諦める(諦めむ)中からそれを受け容れ引き受けていく情動体験を通してこだわりから解放されあるがまま地点で意志や確信(明らむ)へと質的意味が変化し最終的に死と対比する際に「澄む・あきらむ」に至る老いの超越の螺旋構造のプロセスが示唆された。

図5-1に老いの超越の螺旋構造を示した。

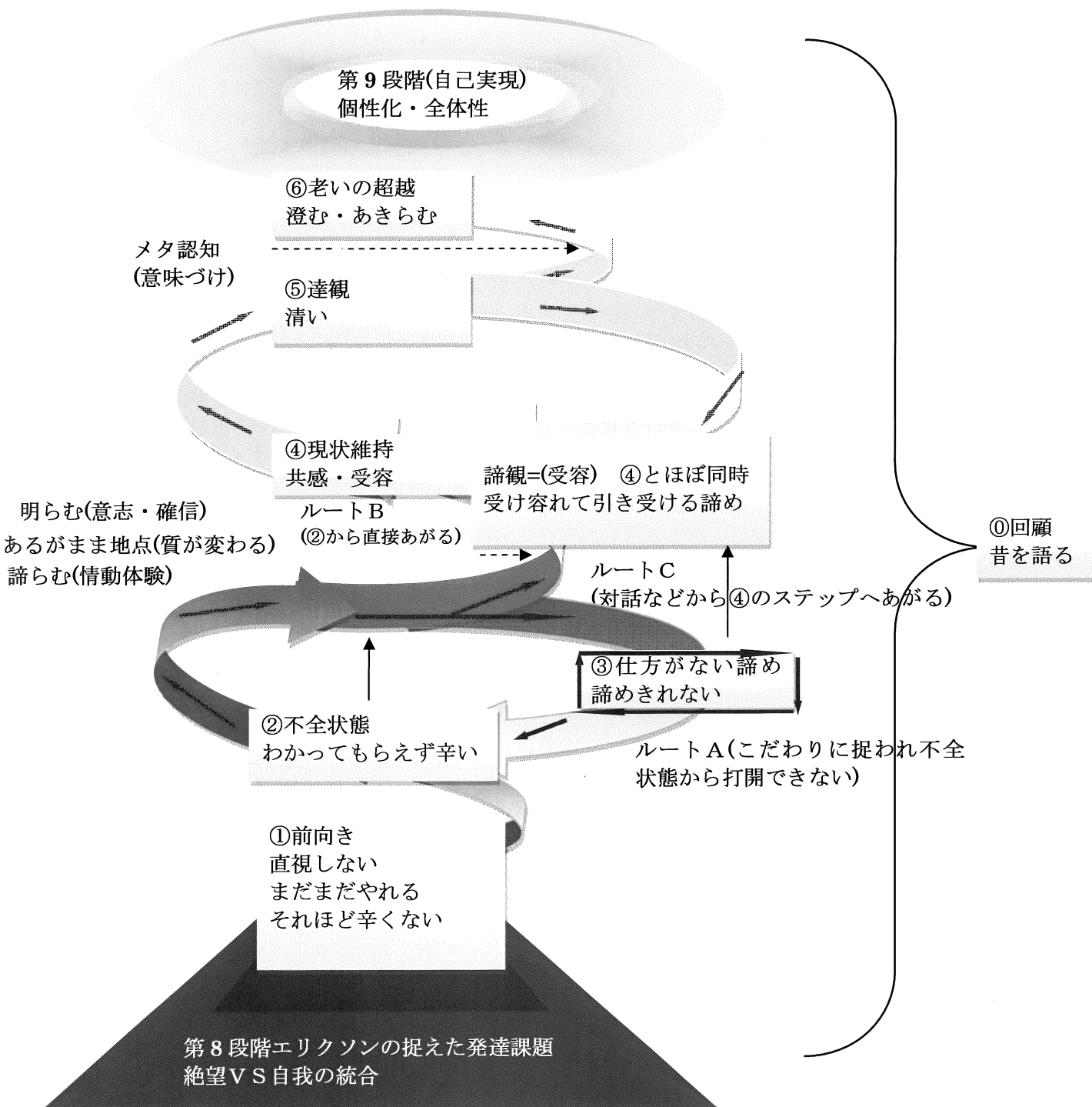


図5-1 老いの超越の螺旋構造

2. 老いの超越 2012モデル

質的調査で高齢者の内的な心的発達の適応のメカニズムを検討した。

以下結果図5-2, 図5-3に老いの超越の内的構造の2012年モデルを1) 一般用語(説明概念)を用いて捉えた老いの超越と2) 質的意味としての概念パターン(文脈)から捉え澄む・あきらむをゴールとした老いの超越モデルをまとめた。

老いの超越に至る道筋は、究極は死をどのように捉えるかによると考えられる。

平均寿命が伸びたという事はそれだけ身体機能の衰えや身近の人との喪失体験が増えたことを意味する。ゆえにそれをどのように捉えていくかが老いの超越の鍵とも言えるだろう。図5-2に示した老いの超越に至る道筋には以下に述べる4つのカテゴリーが捉えられた。「前向き」のカテゴリーとは意欲、習慣、絆などが説明概念として捉えられた。その意味は老いや死をそれほど意識していないもしくは気に留めない状態を捉えている。しかし老いとは機能の衰退を意味し身近な人との喪失体験を繰り返す時期である。情動体験として辛い、悲しい体験を繰り返す時期である。ゆえに不安を伴う。そのカテゴリーとして「不全状態」として捉えられた。説明概念として寂寥、恐怖、喪失が挙げられ身体機能の低下や身近な人との喪失体験などの現象に直面する。

そこと向き合いどのように受け容れていくかのプロセスに3つのルートが推察された。

Aは不全状態からの打開に向かわず諦めを引き受けられずそこから逃避してしまうパターンとして捉えられた。この場合不全状態をぐるぐる回り諦めきれずに否定的側面が強くなることが示唆された。

Bは不全状態をそれほど引きづらず受け容れるパターンとして捉えられた。しかしこのプロセスでは潜在的には不全状態を感じている事が含意される。

Cは辛い悲しい状態を一旦認め感じる中でそこと向き合い受け容れていくパターンとして捉えられた。この場合他者や他物 自己内対話などを通して諦めが諦観へと変化するプロセスが捉えられる。

このように機能が衰退し喪失体験を繰り返す時期に自己をどのように捉え受け容れて行くかのプロセスが老いの超越に至る道筋として示唆された。

現状維持のカテゴリーは意志や確信という思考的过程であり内的要因は安定している事が推察され説明概念として受容が捉えられた。ここで質が変化しあるがまま地点でこのままでいいという状態が推察される。この事を繰り返しながらあきらめが諦観へと変化した内的成長へと向かう事が示唆された。一方でどうすることも出来ない諦めがあり最終的に死と直面するさいに「澄む・あきらむ」が示唆された。

澄むは他者や他物の存在によって捉えられ他者や他物の状態から「澄む・あきらむ」の意識状態が推察される。この事は東洋的視点であり個を主と捉えるか客と捉えるかによると考えられる。最終的にトーンスタンの捉えた宇宙と一体という時空を超えてつながる老いの超越への道筋が示唆されそこに自己意識の流れが推察される。

以上の点からとらえ2012年老いの超越のモデル図を一般的概念から捉えまとめた図と質的意味としての概念パターンから捉えまとめた図を図5-2と図5-3に示した。

1) 一般用語(説明概念)を用いて捉えた老いの超越モデル

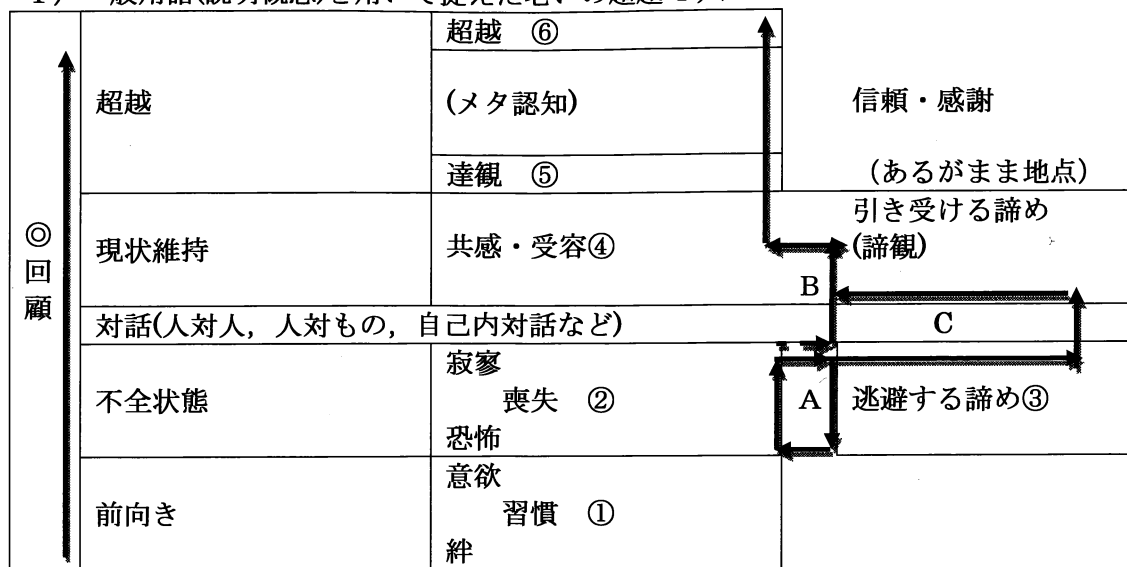


図5-2 老いの超越の捉え方

2) TAE で捉えた老いの超越

TAE で分析した老いの超越は澄む・あきらむをゴールに7つのカテゴリーに分類された

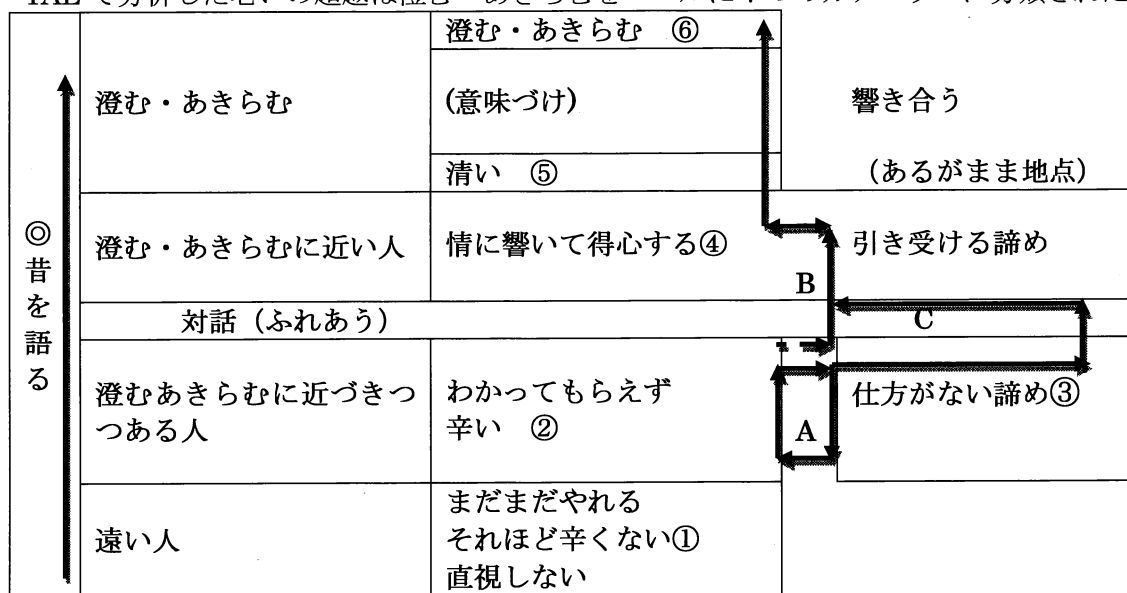


図5-3 澄む・あきらむの捉え方

諦めが諦観に変化する3つのルートA, B, Cが示唆された。(詳細は93頁図5-5参照)

死の捉え方の変化（高齢者50事例の語りの中での変化）

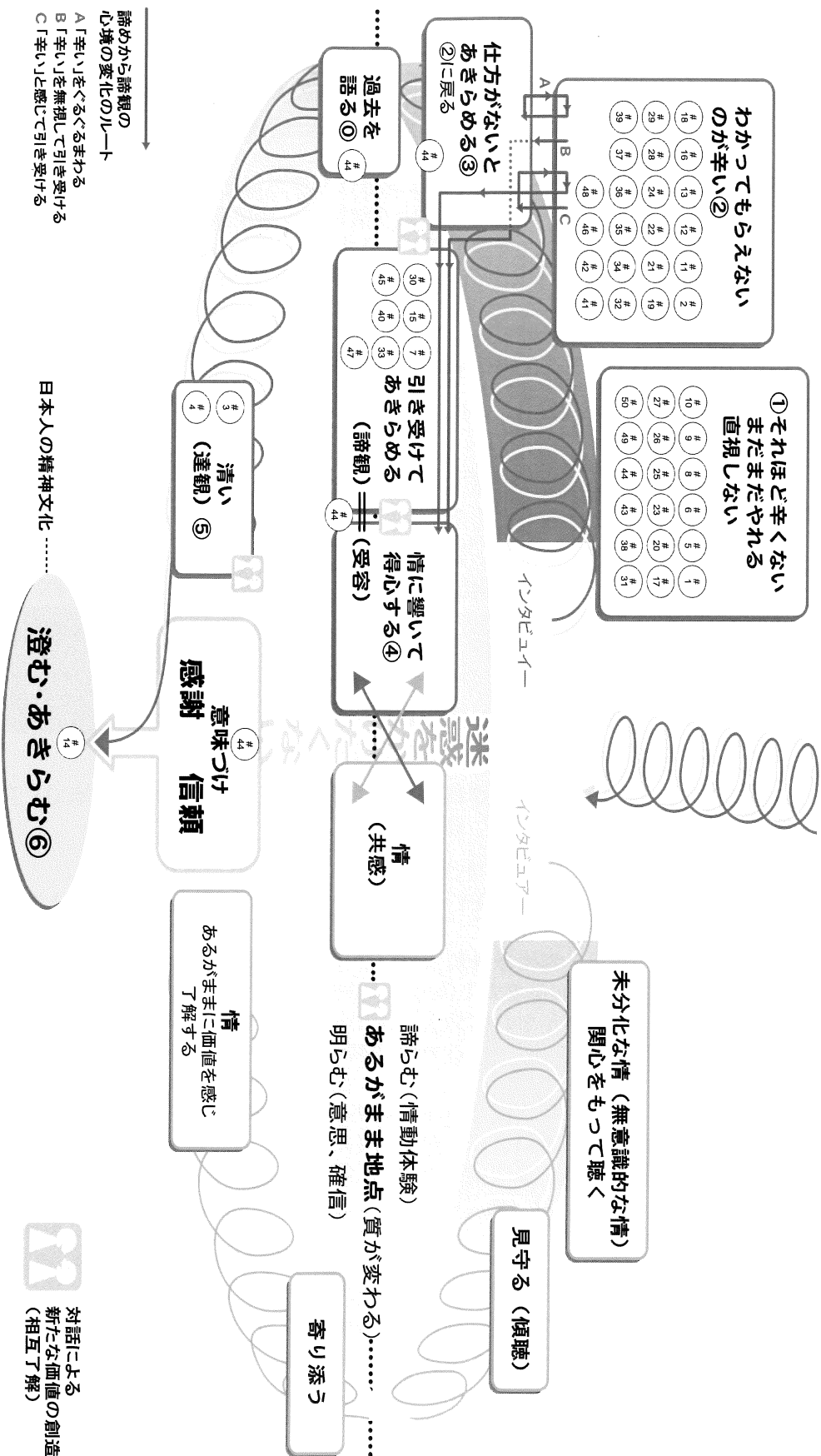


図5-4 老いや死の捉え方の変化（高齢者50事例の語りの中での変化）

3. 諦めが諦観に変化する老いや死の捉え方

高齢者50人にインタビューを実施しTAEで分析した結果、老いの超越の内的構造が可視化された。先の図5-1は老いの超越に至る大枠の流れを示したものである。

図5-4(P91参照)は、個人の観念の構造をつぶさに捉えていった結果、他の49実例に対しても同じ構造内に位置づけられた事を表した。

澄む・あきらむをゴールとした老いの超越のモデルは、エリクソンが捉えた高齢期の発達課題自我統合VS絶望の絶望側から肯定的な側面を見出すべく調査し検討した。

結果一旦辛さを認め得心して引き受ける(受容・諦観)プロセスからの質的な変化(中身が変わること)が起こる中で捉え方が変化することが示唆された。

不全状態からの打開策として諦めが諦観へと変化する3つのルートが検討された。

図5-5はあきらめが諦観へと変化する3つのルートA,B,Cの説明である。

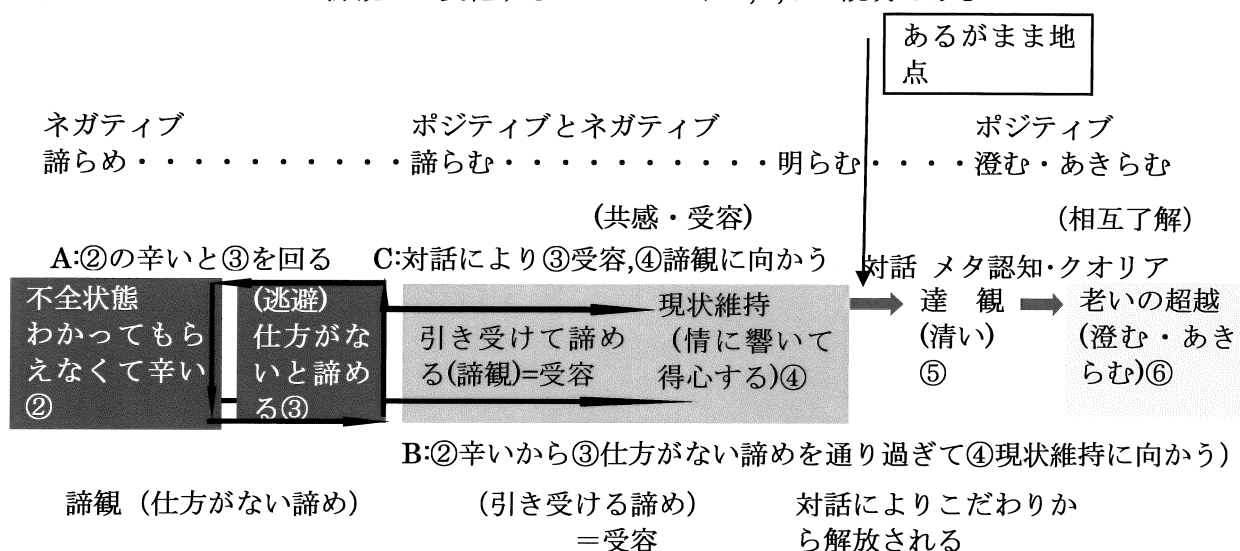


図5-5 諦めが諦観に変化する3つのルート説明

以下A,B,Cは諦めが諦観に変化する3つのルートの説明をまとめた。

A:「辛い」をぐるぐる回る

辛さをありのまま感じる中で「仕方がない」と諦めるが諦めきれず(こだわりに捉われる現象・固着)ぐるぐる「仕方がないと辛い」を回り続き辛い状態から打開できない状態。この過程はネガティブな諦めでわかってもらえないので辛い状態を循環しつづけ不全状態からの打開へは向かわないことが示考察できる

B:「辛い」を無視して引き受ける

辛いことを無意識的に仕方がない諦めを含意するが気に留めず得心し引き受ける。

(Bのルートは外的要因による場合が多い:例としては忙しいなどの理由から他にすることがあるなど不全感を感じている間がないので辛いを一旦乗り切る)

②辛い情動体験から③仕方がない諦めを通過(無意識)して④現状維持に向かうことが考察できる

C:「辛い」と感じて引き受ける

辛いのは仕方がないと諦めて(外的要因)他者や他のものとの対話,自己内対話などを通じて共感・受容の体験が沁みこんで受け容れ引き受ける諦め(諦観)に向かう

②の辛い体験と③の仕方がない諦めを行き来する中で対話によって捉え方の質が変化しあるがまま地点でこだわりからの捉われから解放され④現状維持へと向かうことが考察できる

図5－5に示した老いの捉え方を色分けで説明をすると②の辛いと③の仕方がない諦めはネガティブな側面の情動体験として青色で表した。
③受け容れる諦め(受容)と④諦観では捉え方がポジティブな側面へと変化しそこを水色で表した。

現状維持でこだわりから解放される地点を「あるがまま地点」と捉えた。
あるがまま地点で辛いことと向き合い(現状維持)、ネガティブとポジティブがバランスをとってこだわりから解放される癒しの地点であると考察できる。

TAEで50実例を検討した結果、老いや死の捉え方の内的構造を図5-6に示した。

老いや死の捉え方

(諦観の質的变化)

諦観(諦らむ・明らむ・澄むあきらむ)

諦めが諦観に変化する3つのルート

A: 「辛い」をぐるぐる巡る

B: 「辛い」を感じず引き受ける

C: 「辛い」を感じて引き受ける

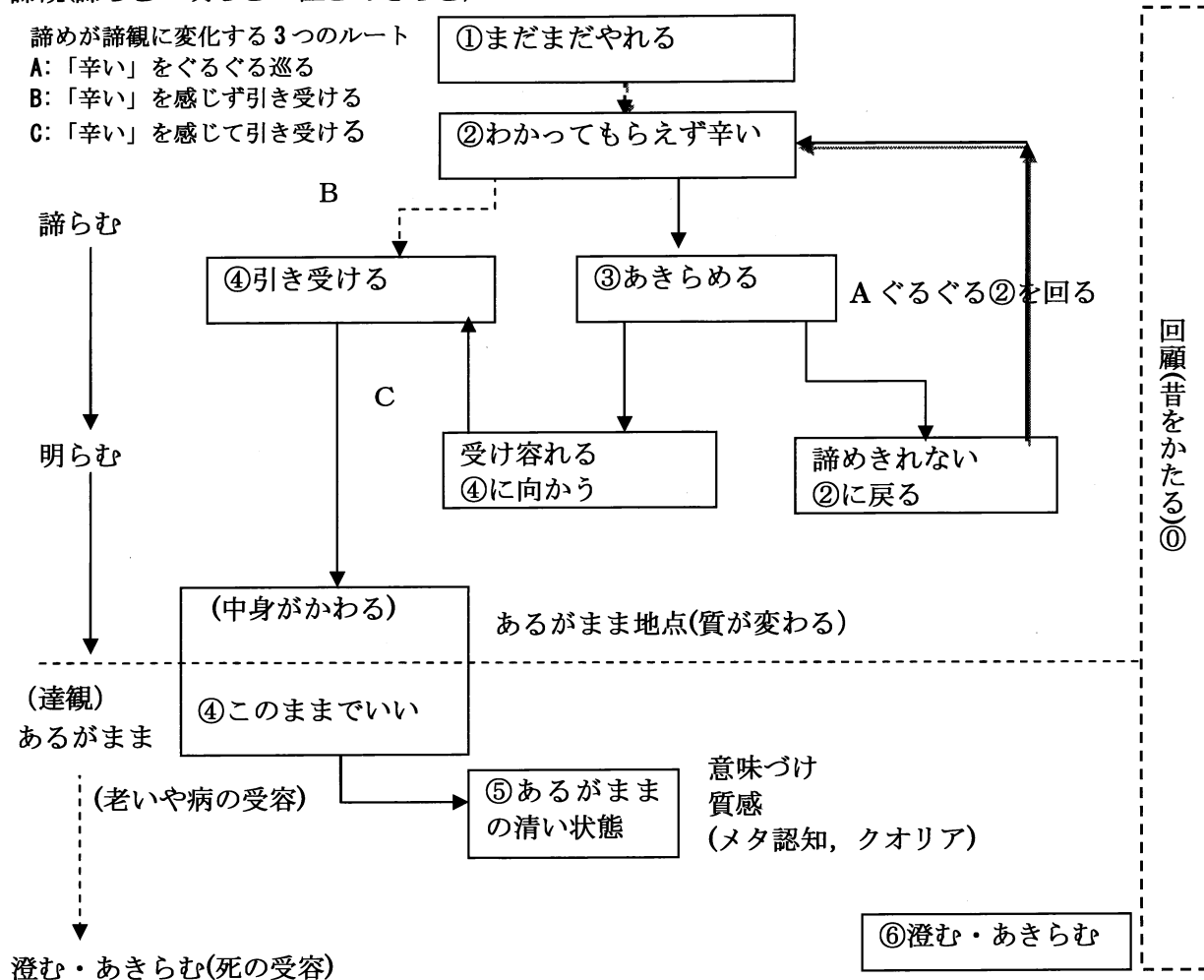


図5-6 澄む・あきらむモデルの新パターンからの検討

TAE で仮説モデルを構築し新パターン(質的意味から概念パターンを捉え直した)から澄む・あきらむに至る道筋をつぶさに検討した。結果エリクソンが捉えた自我統合 VS 絶望の絶望の側から澄む・あきらむをゴールとした道筋はあるがまま地点を境にして質的意味(中身)が変化することが考察された。以下に①まだまだやれる(前向き)から⑥澄む・あきらむ(超越)までの道筋を概念新パターンから検討した内容を表5-1にまとめた。

表5-1 老いや死の捉え方の概念新パターン

①まだまだやれるの新パターン

それほど問題を直視せず氣にとめないでいることが考察できる

②わかってもらえず辛い新パターン

機能の衰退からの恐怖、配偶者の死などの喪失、関係性の阻害からの寂寥などが考察できる。辛い状態はさまざまなネガティブな概念パターンから考察できる。

③諦めきれないの新パターン(仕方がないあきらめ)

例えば「寂しいが我慢するしかない」や「家にかえりたいが迷惑になるから我慢するしかない」などのパターンは「辛い」という根本的な問題と向き合っていないためこだわりに捉われてしまいそれが内的に「わかってもらえず辛い」を循環する現象(固着)の要因となりうると考えられる。この場合「諦め」が、ネガティブな側面に作用し、個々のこれまでの価値観に捉われる事が考察できる。

③受け容れるの新パターン(引き受けるあきらめ)

例えば：病気などによって考え方が変わった、目が見えない分、しあわせだという捉え方のパターンは、一旦問題と向き合って受け容れて(受容)認め(ポジティブな諦め)引き受けて認識している状態が類似性として認められる。これまでのこだわりに捉われず、別の側面から捉えてみると肯定的な側面が発見されパターンのが変化していることが考察できる。トーンスタンは「老いの超越」はライフクライシス(人生の危機的状況)が、阻害要因にも促進要因にもなりうると捉えている。本調査においても「病気をして考え方が変わった」や「目が見えない分幸せだと感じる」などは病気などによる身体機能の低下が原因でそれまでの価値観とは違った捉え方、他の側面を認識することで新たな価値を見出して肯定的な側面を見出していることが考察できる。この事を上田(2002)は障害受容とは、価値の転換であると捉えている。⁹⁹⁾ 老いの超越においてもこれまでの価値観に捉われず、別の側面から体験を捉えることで肯定的な側面を見出すプロセスが価値の転換として考察できる。

④引き受けるの新パターン (このままでいい)

ネガティブな要素とポジティブな要素が内的にバランスをとっていることが考察できる。「このままでいい」パターンはこだわりや捉われから解放された「あるがまま」の状態であることと捉えられる。この地点でパターンの質(中身)が変わることが考察できる。この地点を「あるがまま地点」と捉えた。

⑤あるがままの清い状態

辛い事柄と向き合いそこを受け容れ引き受けていく態度は清く潔い。この状態は捉われ等葛藤がなく素のままの状態であることが推察される。何気ない事に価値を見出し存在の意味へと向かう事が推察される。この状態を捉える他者や他のものの存在を介して意味へと向かう事が推察される。他から見てどのような状態であるかを感じる事によって自らが意志や確信へと向かうことが可能となる事が考察できる。

⑥澄む・あきらむ

他者や他物の存在を介して個としての存在の意味へと向かうことが推察される。

4. 先行研究と2012年老いの超越モデルの検討

老いや死の捉え方をTAE手法を用い、質的に検討した。結果、本調査において第8段階から第9段階の移行のプロセスの内的構造を可視化した。さらに先行研究からトーンスタンやエリクソンが捉えた老いの超越の論考と「澄む・あきらむ」の質的意味の類似性を検討した。

表5-2にトーンスタンが捉えた「老いの超越」の尺度を日本語に訳し表にまとめたものである。

表5-2 超越尺度(10項目)

| | |
|-----------------------------------|--|
| 時空を超えて繋がりを 感じる (5項目) 宇宙(自然) | 私は全宇宙と一体感があると感じる 私はこの世に存在するあらゆるものの一部であると感じている 実際は離れたところにいる人でも強い存在を感じる 私は時々、過去と現在の距離が消えていると感じる 私は祖先との強いつながりを感じる |
| 人生のまとまりを感じ る (2項目) 一貫性 | 私の人生は混沌として良いものではなかった (-) 私が過ごした人生は一貫した意味をもつものである |
| 一人を楽しむ (3項目) 孤独 | 私は他の人というより一人であることのほうが好きである 私は新しい人と出会う事が好きである (-) 平穏で物思いにふけったりする事に幸福を感じている |

トーンスタンの捉えた老いの超越の構成概念・孤独(3項目)と山口が捉えた諦観の質的意味を検討した。

孤独の質問項目は3項目で質的意味から検討すると「一人を楽しむ」ことを意図していると捉えられた。この事から推察すると身体機能が衰退し喪失体験の多くなる高齢期は、心的発達の適用として外的要因(環境)に働きかけるだけではなく内的要因(自己との対話や内面)に向かいやすい特徴があると考察できる。ここで「辛い」と向き合い引き受けるという意味で「個の確立」が認められる。質的意味から捉えた新パターン(P85参照)の引き受ける捉え方の新パターンの実例は「一人旅が好きだ」や「一人で考える事が好き」は孤立ではなく辛さを引き受けて前に進むための内的な適応つまり「個の確立」として捉えられる。ゆえにトーンスタンの捉えた老いの超越の孤独の次元は「澄む・あきらむ」では「辛さ、悲しさを引き受けて前に進む」諦観と類似性が認められることが示唆された。

またトーンスタンの捉えた一貫性の項目と山口が捉えたあるがままを捉えこのままでいいと捉える達観を質的意味から対比させて検討した。一貫性の質的意味は「人生のまとまりを感じる」と捉えられ達観は「とらわれのないあるがままの状態に癒しを感じる」という概念パターンで捉えられ双方を検討した。ここでは各々がこだわりから解き離れて新たな生きる意味へと向かう特徴として「態度的な価値」が認められると考えられる。ゆえにトーンスタンの捉えた老いの超越の一貫性の次元は「澄む・あきらむ」モデルでは達観つまり「態度的価値」としての類似性が認められることが示唆された。

超越とは最後に自分で人生と向き合い肯定的に了解する意図を含んでいると捉えられた。

最終的に老いの超越の質的意味とは生あるすべてのものへの感謝の気持ちが宇宙との一体感と通じていると考えられる。しかしトーンスタンが捉えた宇宙的次元は個人主義的捉え方との指摘もあるよう西洋の個人主義的観点として捉えられがちである。(Jonson&Magusson2001).¹⁰⁰⁾ 一方本論考の「澄む・あきらむ」は「他者や他のものを介して個としての存在の意味へと向かう」ことが質的意味として捉えられた。ここに個人を主体と捉え全体(自然)を客体と捉える西洋的視点と場を重んじ主客未分と捉える東洋的視

点との文化的価値の違いが示唆される。しかし双方に共通の認識として「つながる」という意味で捉えると類似性が認められ老いの超越の新たな可能性としての価値が示唆された。以上、先行研究から検討した老いの超越の捉え方を図5-7、図5-8にまとめた。

図5-7は先行研究から老いの超越の捉え方を検討しまとめたものである

| エリクソン（1997） | トーンスタン（2003） |
|------------------|------------------------|
| 相互依存 | 宇宙的次元 |
| 叡智 | 一貫性 (態度的な価値) |
| 信頼形成からの希望 | 孤独 |
| 第9段階をネガティブに捉えている | ライフクライシス (人生の危機的状況) |

図 5-7 老いの超越の捉え方

老いの超越に至る道筋をネガティブな側面から捉え内的構造を可視化した。老いの超越にはいくつかの次元がある事が推察され先行研究から検討した。結果、老いの超越の次元について以下のような図5-8に老いの超越の捉え方をまとめた

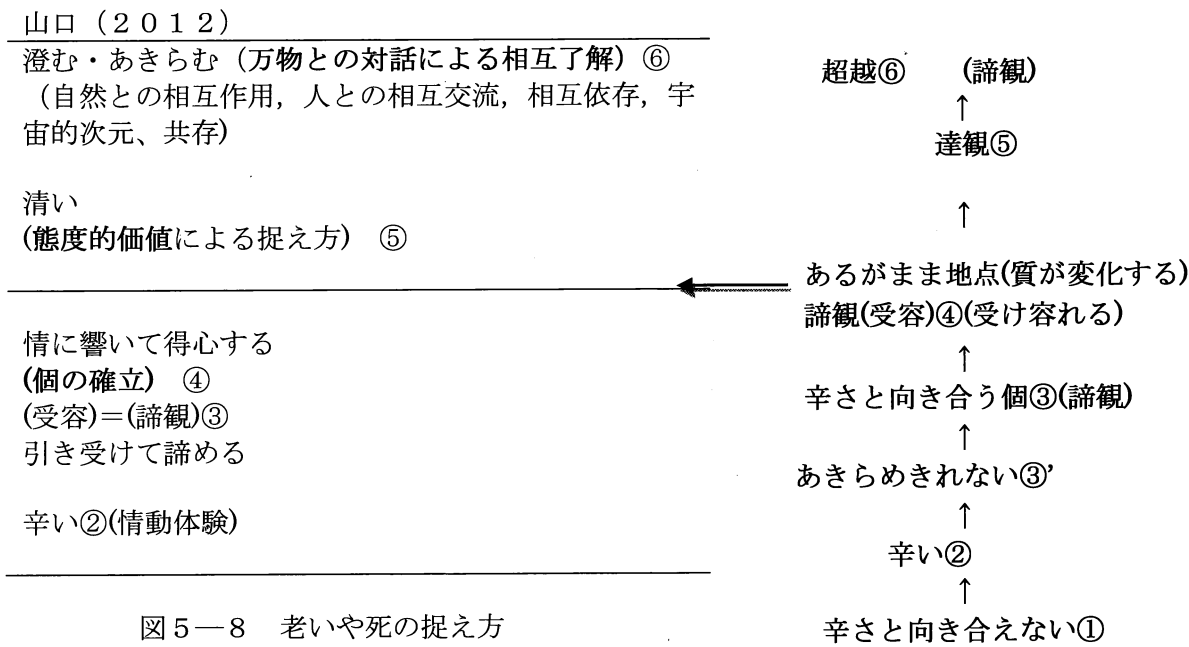


図5-8 老いや死の捉え方

「澄む・あきらむ」の意味について検討した

・「澄む・あきらむ(諦らむ)」を両極性と考えたと辞書的意味から捉えた場合（諦観）

「澄む」の反対語は「濁る」, 「諦める」の反対語は「こだわる」である。

この尺度を両極性として捉えた場合, 「こだわりに捉われる状態」、「一旦受け容れ引き受けた状態」という意味で尺度が一般的に構成される。

しかしあきらむには「明らむ」にみられるようもう一つの意味がある。

・「澄む・あきらむ(明らむ)」を両極性として捉えた場合（達観）

「澄む」は状態であり「明らむ」は明らかにみられるように確信や意志を含んだ意識にあがってくる思考と捉えられる。

この場合, 老いの超越としての尺度として捉えるならばこだわりから解放せしめ明らかな意志や確信を得た状態になるという個としての意識状態であると考えられる。

・「澄む・あきらむ（フェルトセンス独自の意味）」と捉えた場合（超越）

人が澄んであきらかになる意識状態とは, ささいな事柄に対しても価値を見出し純粹にあるがままを感じる中でふっと見えてくる状態であると考えられる。

ここで大切な事は「澄む」は関わる側が捉える状態であると考えられる。そして関わる者が「澄む」を捉えるとそこに「敬意」を感じあるがままを了解することが推察される。

本研究では#14の祖母の潔い姿を「清い」として捉え, 家族はその精神に敬意を表しそれを語り伝え伝承してきた。関わる者がそこを捉えなければ「澄む・あきらむ」には至らないと言えるだろう。当事者は関わる者の「あるがまま」を了解するので潔く「明らむ」確信や意志を認識するのだと推察される。確信が信念として認識される意識状態は「澄む・あきらむ」であると考えられる。

ゆえに「澄む・あきらむ」は互いの見えと捉え方によって相互に了解が生じつながるという意味を含意し意識される状態であると捉えられる。

「老いの超越」を捉える上で互いの関わりあい(対話)の中で当事者の「自己治癒力」は, 潜在性を帯びており他を思いやりありのままを尊重する双方向の気持ちが老いの超越の質的意味を肯定的に変化させ「相互了解」から「共存」としての意味として新たな可能性へと「つながる」ことが推察される。

5. マイナスをプラスにする支援：こころのケア

質的研究でインタビュー分析結果から老いの超越の質的意味と内的構造を検討した。

図5-9は調査研究で老いの超越の第8段階から第9段階の移行のプロセスに諦観、受容、達観の3つの要因が捉えられた。諦観にプラスとマイナスの側面が捉えられその意味を詳細に捉えるには量的調査では難しいので質的調査を実施した。

図5-8は老いの超越の諦観の質的意味としてあきらめが諦らむ・明らむ・あるがまま（達観）へと変化するプロセスを概念パターンから示したものである。これは辛い状態を感じる情動体験から思考（意志や確信と言う意識）へ上がっていきその際老いを受け容れる（受容）プロセスによってあきらめが諦観に変化する過程を概念パターン（体験の捉え方）によって捉えたものを図で示したものである（p83表5-1情動体験に向かう捉え方の概念パターン（新パターン）を参照）

図5-10は老いの超越に向かう過程を概念パターンで示したものである。（p85表5-2意志や確信に向かう概念パターン参照）

図5-9と図5-10では Y_1 と Y_2 の質が変化していることが概念パターンの検討から明らかになった。

図5-9は縦軸を「あきらめ」と捉え横軸は「諦観」を捉えている。「諦観」は仕方がない諦めから引き受ける諦め（受容）に移行する過程をベクトルで示した。対話による関わりの中で内的に変化が生じているプロセスを示した。図5-8は不全状態の内的変化を捉えた。ゆえに図5-9は「諦らむ」図と命名した。（p64, p65, p67 不全状態から現状維持のパターンが散在する図を作成した）

図5-10は縦軸を「老いの超越」横軸は「明らむ」確信や意志として捉えている。

対話を通じた中から内的に変化し認識し捉え方が肯定的に変化することが考察された。

図5-10は現状維持からあるがまま地点（達観）から個人の志向性・関心・質感によって老いの超越に至る内的変化を捉えた図、ゆえに図5-10は「明らむ」図と命名した。

マイナス（不全状態）・・・現状維持（あるがまま）・・・澄む・あきらむ（プラス）
マイナスとプラスがバランスをとっている

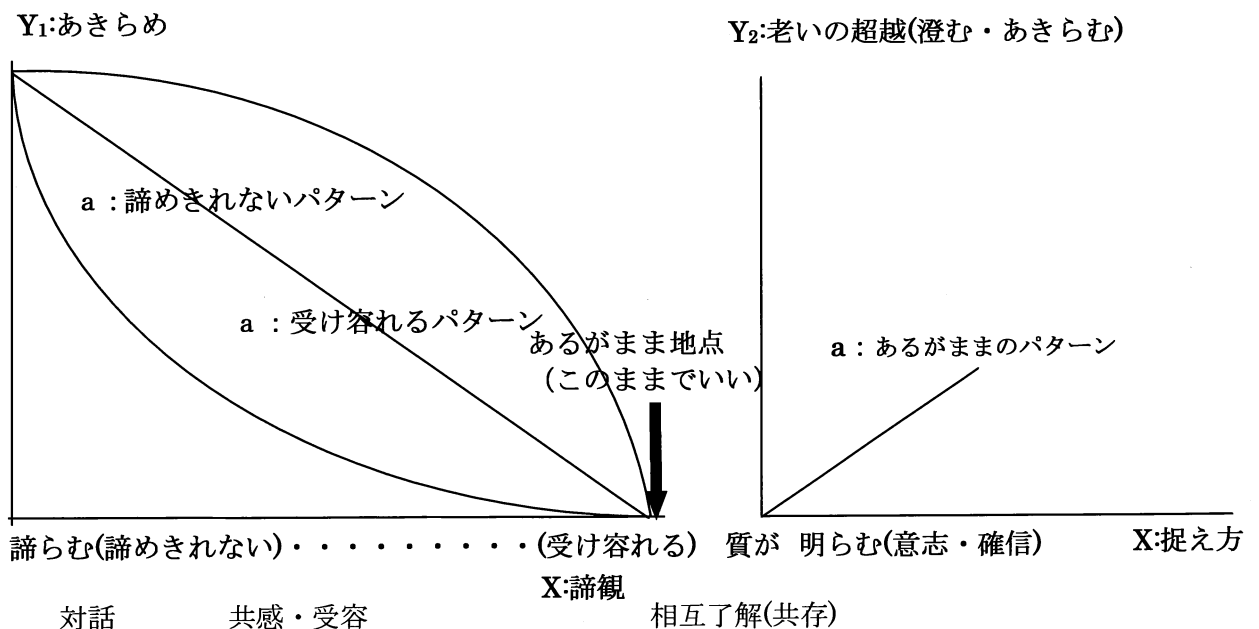


図5-9 諦らむ図 (情動体験)

図5-10 明らむ図(意志・確信)

老いの捉え方は辛いを感じる情動体験が意志や確信と言う意識に上り受け容れ、あるがまま地点でこのままでいいという達観的捉え方に変化を繰り返しながら螺旋状に上がっていくプロセスが示唆される。

一方、死と直面する際諦観の上位次元の意識状態として「澄む・あきらむ」が示唆された。

人間の意識(気づいていること)は意図的である。何ものかへの意識(関心)があり現象を体験していると考えられる。

本研究ではインタビュー場面で老いと死の捉え方を共通了解のもとで捉えて行った。

以下にインタビュー場面での当事者と関わる者との内的変化を検討し図5－1 1にまとめた。

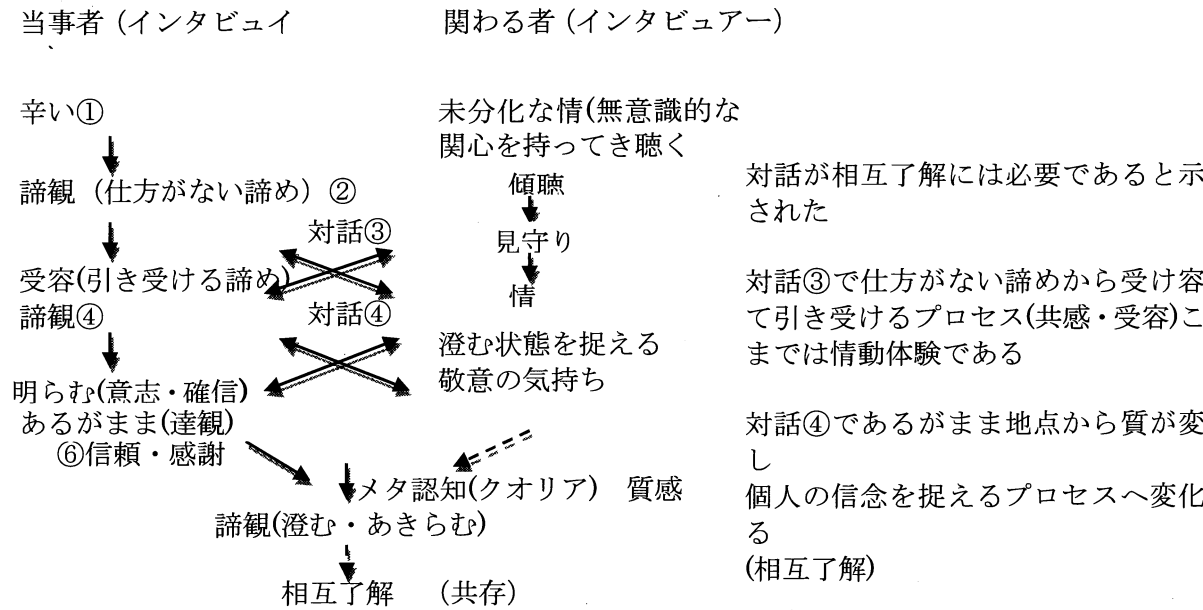


図5－1 1 マイナスをプラスにする支援の検討(相互の関わり)

図5－1 2にインタビュー場面でのプロセスをまとめた

| インタビューイ側 | 現象 | インタビュアー側 |
|-------------------------------|---|--------------------|
| ①まだまだやれる | 自我(意識面)が無意識を押しやっ て問題を向き合っていない | 無意識的な情 関心をもって聴く |
| ②わかってもらえないのが辛い | 辛さと向き合う事が難しい(孤立) | 辛いに関心をもって聴く |
| ③仕方がないと諦める | 辛さを受け容れる事が難しい (固着,捉われる) | 傾聴する(見守る) |
| ④情に響いて得心する(受容)=諦観 引き受けて諦める | 個の自覚 自分を受け止めていく 自分の個を見出す | 共感(寄り添う) |
| ⑤清い | 一貫性(態度的価値を見出す) | あるがままに価値を感じる |
| 意味づけ ⑥澄む・あきらむ | メタ認知(質感) 宇宙や自然の中の一部として捉える (万物との相互作用) つながる | 敬意を抱く |

図5－1 2 インタビュー場面でのプロセス

第2節 質的調査研究からのまとめ

1. 老いや死の捉え方

量的調査研究から見出した老いの超越の因子要因は「諦観」「受容」「達観」を捉えた。それらと環境との要因が老いの超越の内的構造を可視化する上で関係していることを検討課題とした。

老いや死の捉え方 1

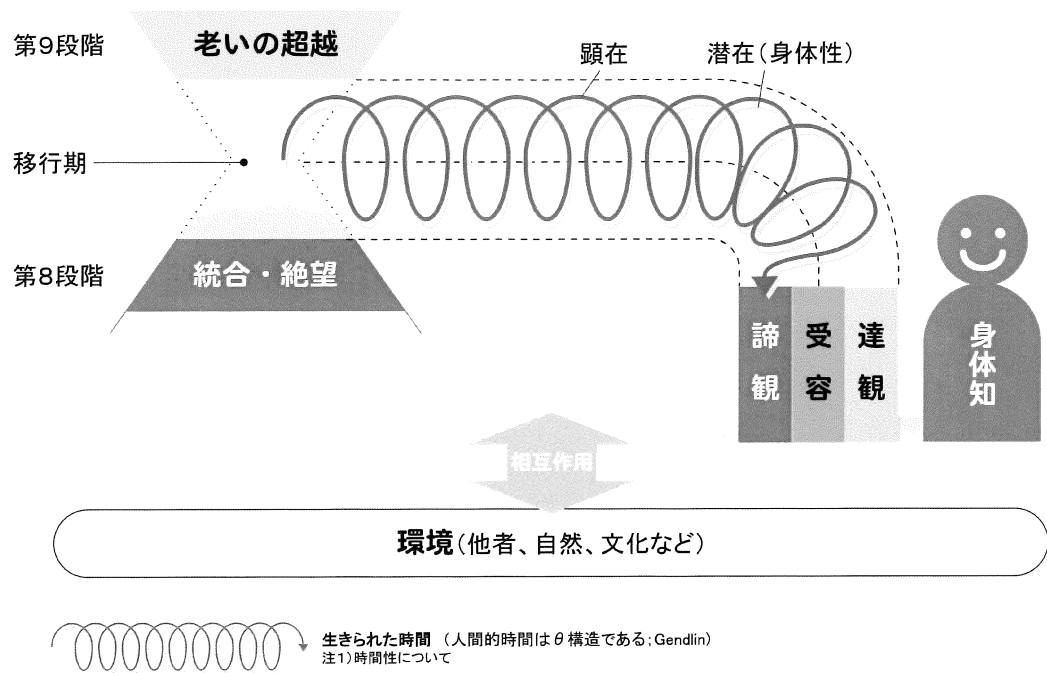


図5-13 老いや死の捉え方 1

図5-13 老いや死の捉え方1からの検討

図5-13は調査研究から導き出した要因を質的調査で詳細に検討し内的構造を捉えたものである。高齢者が老いや死をどのように捉えるかの法則性を質的調査研究で検討した。結果、ネガティブ要因からの捉え方がポジティブな思考へと変化する概念パターンを捉えることができた。

老いや死の捉え方2

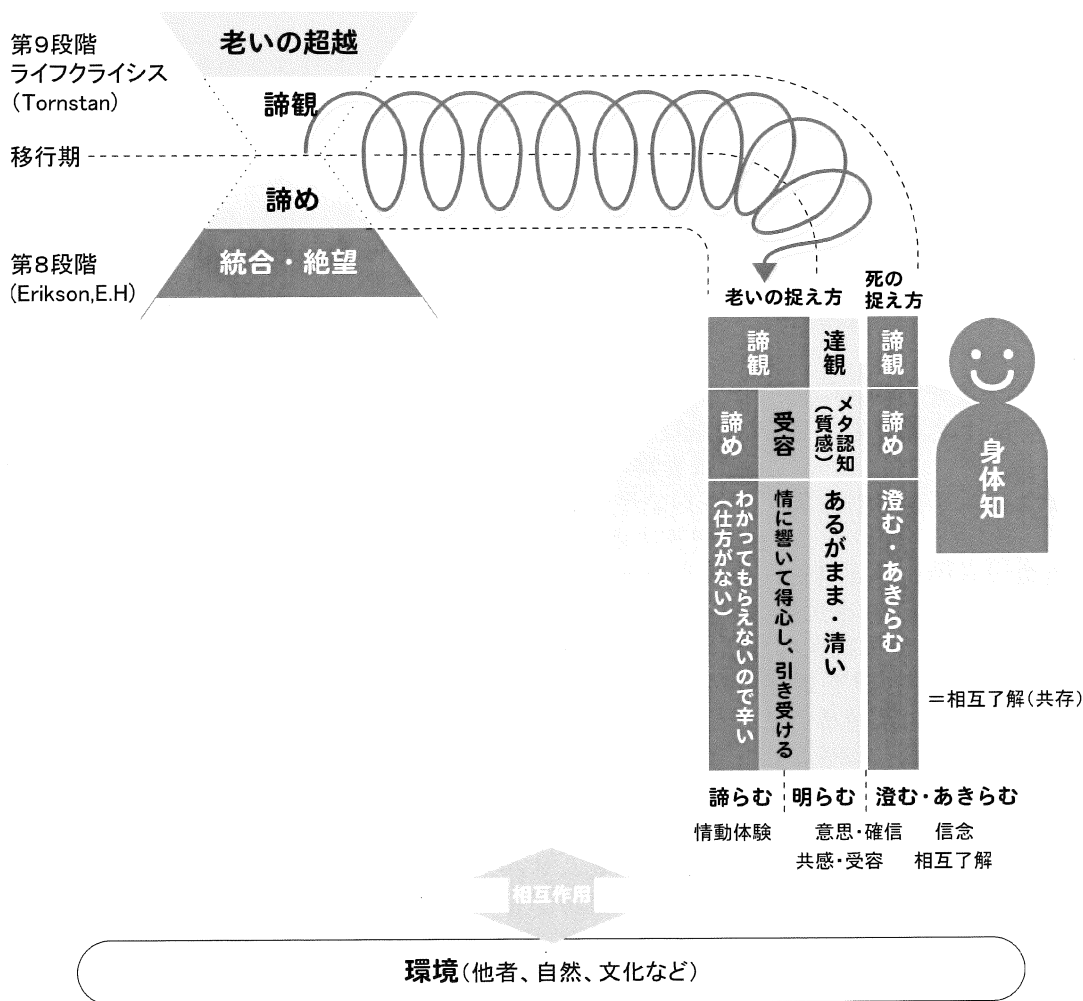


図5-14 老いや死の捉え方 2 (澄む・あきらむ)

老いや死の捉え方2 図5-14(P102,103 参照)の結果を以下に考察する。

山口(2009)の調査研究から見出した高齢者の心的適応の要因の仮説は「諦観、受容、達観」である。結果を質的に検討した結果、「諦め」には諦めきれないネガティブな諦めと受け容れるポジティブな諦めの二つの意味があることが考察された。

ネガティブな感情をそのまま感じ、他者や他のものとの対話(共通理解、相互作用、相互交流など)を通じて受け容れ認識するプロセスがポジティブな受容的諦めつまり「諦観」として捉えられた。これまで「受容」の捉え方は様々な定義が用いられてきた。身体機能の低下に伴う受容に関する定義としては上田(2002)¹⁰¹⁾の価値転換の定義に類似性が認められる。本研究において「受容」とは「諦観」の中に位置しポジティブな諦めが受容を意味する事が明らかにされた。この体験を繰り返す中でふっとこだわりから解放された状態を認識するとこれまで気付かなかった事の意味が浮かび上がってくる。この地点は個々の価

価値観から解き放たれる状態が推察され「あるがまま地点」と捉えた。あるがままとは人間性をそのままの形で認め受け容れるという事で自然のあるべき状態を受け容れることである(長谷川 2010) ¹⁰²⁾ それが「意志」や「確信」という内的動機づけとなり明らかになる。これを他者や他のものが「澄んだ状態」として捉える。すると他者や他のものの存在を介してその意味が了解されるので「澄む・明らむ」へ変化することが示唆された。

最終的に人が覚悟を持って生死と向き合う状態はその場にいるものにとって敬意を抱かせることが推察できる。ゆえに意識状態として「澄む・あきらむ」が捉えられると示唆される。このように捉え方(パターン)には認知と知覚の双方が、環境側(外的要因)と個人側(内的要因)の双方の関係によって絶えず変化すると考えられる。ゆえに関わる者の見え方、捉え方と当事者の見え方、捉え方が互いに影響し関連しあって「今ここで」の現象が起こっているという視点で捉えられる。どちらか一方が存在しなければその現象は起こらないという視点である。エリクソンは超高齢期の第 9 段階を否定的に捉えている。しかしその可能性として「信頼性の形成」からの希望に「相互依存 (Interdependent)」を託している。

老年期は子猫のように親猫に安心して身をゆだねられる状態が癒しや希望へと向かうと捉えている。(Erikson, 1990) ¹⁰³⁾ そこに必要とされるのは関係性からの「和の精神」が重要であると考えられる。従来の日本人の関係性を重視した「和の精神」と意志や確信を重視した「個の精神」の融合として捉えた「清い精神」が高齢期には大切であることが考察された。この清く潔い精神を家族が生活を共に過ごす中で伝承しているのが#14 の実例から捉えた「澄む・あきらむ」である。

本研究の老いの超越「澄む・あきらむ」の質的意味は、他者や他のものを介した状態が、自己の存在の意味を「諦らむ」から確信や意志の「明らむ」に変化させ信念や生き様として「個」つまり内的成長へと向かうパターンだと示唆される。

一方関わる者が「澄む」を捉え「尊敬の気持ち」がなければ、相互の対話による了解が作用しなければ「澄む・あきらむ」は捉えられない事が考察できる。

関わる者が当事者の状態を捉えて敬意を抱き、それが当事者に伝わるので明らかな意志や確信を抱き、その時の意識状態が「澄む・あきらむ」であると捉えられる。

相互の関係性の中で思いやりと敬意の念が双方に必要であるといえるだろう。

エリクソンの捉えた老いの超越の相互依存は、清い精神では「相互了解」に通じており「澄む・あきらむ」は主体と関わる者との相互の了解によって示される意識状態であると考えられる。ゆえに他者を介して捉えられる老いの超越が意味する事とは「共存」に通じていると言える。この互いが互いを思いやり敬意の念を抱ける関係性(相互了解)を、従来は家族が生活を共に過ごす中で伝承と言う形で受け継いできていたことが#14 から考察できる。しかし現代は独居世帯が核家族世帯を上回り、家族が生活を共に過ごす中で清い精神を伝えていくことが難しくなっている。さらに日本人としての価値観も戦後の西洋文化の導入とともに急激に変化している。

個としての確立と関係性の中で育まれる個が融合しあえるような新しい価値の創造が今後の高齢社会を捉える上で大切だという事を真摯に受けとめていくことが課題となるのではないだろうか。

1. 結論

バルテス(Baltes,P.B)は1997年、ベルリン加齢研究の客観的なデータを引用して85歳以降の高齢者を第4世代と捉え、それらの人々は、第3世代の人々に比べて心身の機能や生活適応が困難であると否定的に論じている。このバルテスの捉え方は、超高齢期の適応を個人に還元した捉え方である。¹⁰⁴⁾

一方、エリクソン夫妻(Erikson,E.H.,&Erikson,J.M.)が人間の発達を捉える上で新たに従来の8段階説に加えて、第9段階目に「超越」の課題を加えた。超高齢期は身体機能の低下や身近な人の喪失体験を繰り返す時期であり、ネガティブ要因の多くなる衰退期である。このことからエリクソン夫妻は超高齢期を否定的な視点で捉えている。しかし彼らは他者との信頼関係におけるポジティブな視点として相互依存関係に超高齢期における希望を見出そうとしている。¹⁰⁵⁾

バステスやエリクソン夫妻は、身体機能が衰退し喪失体験が多くなる超高齢期を否定的に捉えている。

トーンスタン(Tornstam,L)は1992年、メタ的な観点から老いの超越をポジティブな視点に捉え、老いの時期における「超越」概念は、ライフクライシス(人生の危機的状況)が阻害要因にも促進要因にもなりえると捉えている。トーンスタンの捉えた老いの超越はイエス・ノークエッションによる調査研究からの結論付けで、個人がどのように超越に向うかの道筋に関しては十分に捉えきれていると言いつつも難しかった。また彼の「超越」の捉え方は西洋の個人主義的観点に立つものであり、他者との関係性による相互作用の問題について、仮説の精緻化の検討は十分になされていない。彼自身が指摘するように、老いの超越という仮説の精緻化については、現象学的な捉え方が必要とされる。¹⁰⁶⁾

一方、本研究で検討した老いや死に対する捉え方は、「澄む」に見られるように自らがそのような潔い状態になり、その状態を他者の存在を介して意識化し、それを「明らむ」と捉える。即ち、老いや死に対するとらえ方は、「澄む・あきらむ」に至るということが示唆された。

日本人は集団帰属が高く、関係性の中で「個」が埋没しやすく、何を考えているのかわからないといった捉え方がされてきた。しかし日本人の本質には、最後は自らが意志をもって終焉するというあるがままの潔い精神と、関係性を大切にしながら機微に触れつつ他者の苦しみを苦しいと感じ悲しみを悲しいと感じる共感的姿勢が仏教観からの和の精神と融合し「清く潔い精神」に存在価値の意味を見出してきたと考えられる。

この精神は生と死に対する覚悟を意味する日本人の死に対する信念であり日本人らしさとして、「個」に通底すると考えられる。

この事は椎名(1948)¹⁰⁷⁾が述べているとおり、人は死から生を対比する時、生は輝き、その意味において生を実感していく。即ち、生きとし生けるもの全てに対して感謝の念を抱きつつ自らの存在の価値を実感し、生きている意味へと向かうと考えられる。ここで大切な事は生を実感し、生きている存在としての全ての生の意味へと向かうということであり、そのことが「澄む・あきらむ」である。つまり「他の生命そのものが自己を存在させる」と言う意味として捉える事ができる。他者や他のものから見て「澄んだ状態」であるから他者は澄んだ状態に対して敬意の念を抱く。当事者には他者の尊敬の気持ちが伝わることによって自己の意志や存在している意味を確信し、澄んで明らかな自己へと向かうのだということが示唆される。その際に大切な事は、衰退期や喪失期は「辛さや悲しさ」をそのまま感じる情動体験の中からその体験の意味を見出す方向性へと向かうことが、人間としての本来性であるということが示唆された。この事は誰に対してもあてはまる事だと考えられる。

超高齢期は衰退や喪失を体験する時期である。周囲の者たちは、高齢者がそれらの体験に耐えうるだけの力が無いのではないかと考えられがちである。しかし人間は感じる力も適

応する力も年齢にかかわりなくそれらの能力を持ち得るのではないだろうか。この場合、決定的に重要な事は、関わる側が当事者の情動体験に関心を持ち傾聴し寄り添うという姿勢によると考えられる。関わる者が当事者の体験過程に寄り添うプロセスの中で、誰においても「個」としての内的成長が促進される可能性を持ち、一方で関わる者の態度によっては阻害される可能性もあるのだという視点をもつことだと考えられる。老いの超越の質的意味の究極はトーンスタンの捉えた宇宙的次元とつながる事が示唆されている。その一方、日本的な老いや死の捉え方として、他との関係性の中からの質が変化し、人間の「個」として「澄む・あきらむ」に至ることが示唆された。

他者の存在によって「澄む」が捉えられ、他者からの尊敬の気持ちが伝わることをとおして「明らむ」という確信へと中身が変化する。それが「澄む・あきらむ」であり、そのことが、「相互了解」され「共存」への意味として捉えられていく。

この事は晩年にエリクソンが捉えた老いの超越の第 9 段階「超越」の鍵となる【「信頼感形成」から「相互依存」】と、人間の成長を漸次的にとらえた意味において、その類似性が認められる。

日本人の他者との関係性を媒介とした清く潔い精神が、高齢社会の癒しや希望となり得ることが本研究から示唆された。

超高齢社会の到来を前に衰退や喪失期から肯定的要素を見出す事が大切であり「対話」にその役割があることが示唆された。何気ない対話を繰り返す中から自己の存在価値の意味を見出していき、ひいては、話す人、傾聴する人双方が内的成長へと向かうことが示唆された。ここでいう対話は、横山(2003)¹⁰⁸⁾が捉えているように、人対人のみで行われるものではなく、人対もの、あるいは自然(環境)、または自問自答する自分との対話(自己内対話)もあり、それによってロゴスの自己発展・追求が進んでいくものと捉えている。

日常生活の中での何気ないささいな関わりあいの中の対話(内的対話を含む)が、老いや死の捉え方の質的変容の過程が認められることが示唆された。

個別の何気ない個々の対話の中に衰退期の心的適応の可能性があり一般化され得るような規則性や法則性(情動体験から意志や確信へと変化する捉え方のパターン)が導き出された。あるがままの状態を受け容れる体験の中で質が変わり捉え方の中身が変化するパターンが捉えられた。本研究は「対話によって得た超高齢期における人間の成長課題として“老いと死”について得た知見」には普遍性があるという意味において意義があると言えるであろう。

2. 支援策の検討

本研究で半構造化インタビューを高齢者に実施したところ、笑顔が見られた。

対話を通じて展開される体験過程への関わりが高齢者支援にとって意味のある事が示唆された。加齢現象は活動機能が低下し生活機能も徐々に低下してくる。

そのこと事体は自然なことである。

一方で人間の本質は社会的動物であり、他者との関わりが必要とされ本質的にそれを求めていると考えられる。

日常生活の中で何の関わりもなく干渉も反応もない状態に置かれることはあってはならないが身体機能が衰退し喪失体験の多くなる高齢期にはそのような状況に陥りやすいと考えられる。

日常生活の中で他との関わりが希薄になっていくと、物事に対する考え方や感じ方の柔軟性が減少し、こだわりに捉われやすくなる。

しかしこだわりが強すぎる中で身体機能が低下すると不全状態に陥りやすくなるとも考えられる。

不全状態から現状維持に至るには、他者や他のものとの対話による共感・受容が必要とされることが推察された。

何気ない関わりの中に対話が生まれる。その対話が「辛さ・悲しさ」を受け容れ引き受け、認め肯定的に老いや死を受け止めていく事につながると考えられる。

本研究を通じて見出された高齢者の心的機構について、今後の高齢者への支援策を検討し高齢者理解の必要とされる視点は以下の点である。

高齢者に関わるにあたって対人援助は相互作用であり、相互の関係性によって当事者の至る境地に変化が生じる。なぜなら援助は主観と主観が交差しあう場であり、主体も関わる者も相互に影響されうからである。

本研究で示された老いの超越の「澄む・あきらむ」とは、一旦辛い（マイナス）を認めて受け止めることが大切だということが示唆された。

主体がマイナスを認めるから関わる者も主体のマイナスを受け止める気持が生じ、そのマイナスを受け止める事ができるようになる。

日本人は自然観照を通じて仏教的無常観に価値を見出してきた。ゆえに他者の苦しみを苦しいと感じ、悲しみを悲しいと感じる共感的気持に日本人は価値を見出してきた。この気持ちを一旦認めて感じなければ「澄む・あきらむ」には至らない。さらに、主体に関わる人の気持ちに気づかなければ「澄む・あきらむ」には至らないということが示された。

そして最後に、自らの意志で存在の意味を実感できることが「個としての存在価値」の意味であり、関わる者がそこに敬意の念をもって共に感じる事が大切であり、そこに「相互了解」の意味があると考えられる。

横山(2003)¹⁰⁹⁾は、対話は真実を分かち合うという真面目な機能を持っているが、人対人のみで行われるものではなく、人対もの、あるいは自然(環境)、または自問自答する自分との対話(自己内対話)もあり、それによってロゴスの自己発展・追求が進んでいくものと捉えている。

日常のおしゃべりは、大切なところ(ロゴス)に至る前に引き返してしまいがちで、どうしても深まりに欠けると述べている。しかし論争やおしゃべりであっても対話になり得ることもある。

人間は他者、他のものと対話し、自己内対話をしつつ生きている。他者や周囲の環境と関わりを持たずに生きていく事はできず、他者や自然との相違・対立・対決を通して人は自らを作っていくのだと考えられる。また単なるおしゃべり(無駄話)はその内容の如何を問わず、人に気持ちのゆとりと遊びの心を提供し、それによって人は安定することも多い。

この事は日常生活で一般的に行なわれている事だと考えられる。一見無駄話にみえる単なるおしゃべりも時には対話としての機能を持ち、深まっていく場合もある。

人間は他者との関わりを通して変化・成長していくと考えられる。

対話の条件とは、金子（1979）^{110）}が述べているように①誠実さ ②率直さ ③対等性 ④可変性を伴なう。

これらの視点は心理臨床と非常に近いと考えられる。誠実さと率直さはロジャーズのいう純粋性や自己一致というカウンセラーの態度つまりプレゼンスの概念と通じると言えるだろう。また、対話における出会いは意図されたものではなく、偶然の出会いであり、意外性を持っている。予測できぬ意外な関わりの中にも内的成長の可能性となることが示唆された。些細な事柄であっても対話が大切であり何気ない話を聞いてもらう中で本人の意識・無意識に何らかの変化が生じることが本研究を通じて示された。

一方関わる者は、理解したいという気持ちを持って関わる事で相手にその意図が通じることが示唆された。無意識的に何気なくやっている事柄に実は意味があるという事であり個人の些細な気づき(志向性)こそが新しい価値の創造となりうるということが本研究から得た知見から示唆された。

本研究は老いや死の捉え方に着目し高齢者の観念の構造を量的調査ではその意味について捉える事は難しいので現象学的アプローチから推察した。結果老いの超越に至る道筋にはエリクソンの捉えた自我統合 VS 絶望の絶望の側から捉え、老いや病、身近な人の死というライフクライシスを経験しつつ諦めが諦観へと変化するプロセスが捉えられた。

さらに諦観の質的意味として、喪失や衰退期の「辛い、悲しい」情動体験をそのまま感じる中で「諦らむ」という一旦はマイナス要因が多くなるがそこから意志や確信へと向かう「明らむ」へと変化しあるがままを認め受け入れていくプロセスが老いの捉え方として示唆された。

一方、どうすることも出来ない諦めもありそれが死と対比するときであり、そこに「澄む・あきらむ」が示唆された。

核家族化や単身世帯が増加する現代社会において、死というものが家庭から一層遠ざかってきている。しかし人間は、いつかはその生涯を終える。そうであるとすれば終末期のあり方や捉え方も今後の高齢社会の中で皆が考えていかななくてはならないテーマとなるであろう。死は避ける事ができないものであり予測できない一回限りのものである。自分の死をもってその意味が初めて理解できるが他者の臨終の場面を体験することや対話をする事でその意味や捉え方も変化すると考えられる。高齢社会になり誰もが健康で幸せな人生を送りたいと願うが平均寿命が伸びだという事はそれだけ衰退や喪失期が長くなったことを意味する。

2055年には国民の2.5人に1人が65歳以上という前代未聞の超高齢社会が到来する。その中で私たち一人一人が生きる意味を死の側から捉え考えていかなければならない時期に来ているのではないだろうか。

今回インタビューを実施した高齢者は比較的元気な高齢者であるがそれでも癌や脳梗塞、身近な人の死を体験した事がある人たちがほとんどである。インタビューを実施した高齢者の方に老いの超越についてその後お聞きした。その中で非常に感慨深いご意見があったのでご本人の承諾を得て以下に載せた。

『Mさんからのご意見』

老人と死についての私見を少し述べさせていただきます。

昔は人は老いて死ぬことは当然のこととして受け止めていたと思います。

今のように、高齢でありながら、若く思われたいと願ったり若造りをする事は逆に恥ずかしいことと、特に男性の場合は若く見られるというのは未熟だと思われ侮られていたと

思います。

年齢相応に老いて死ぬというのがふさわしい状態だったのではないのでしょうか。ですから死ぬという事に今ほど抵抗や恐怖はなかったのでは。

死ねば極楽浄土に生まれ変われるという思想もありましたし。

生きている限りは楽しみも欲しいし、病気でいたくはないし、また健康でなに不自由がなければいつまでも生きたいと願うでしょう。

ただ、今の老人はなにを求めているのはわからない。

若者とおなじものを求めているようにみえます。

普通、人は絶望すると意欲を失い、死にたいと思うようになる。

少しでも希望があればまた立ち直る。だから人は希望がある限り生きられると言われています。でも私のようになんの希望もなくとも生きている人もいます。

この年になるとおいしいものが食べたいとか、いい洋服を着たいとか、楽しい時を過ごしたいとかいうのは利他的な望みであって、生きるための根本的な要素ではないと思うのですが、でも食べる事が生きがいになってしまった老人もいるのでしょうかね。

ただ老人が若い人の重荷になるような状態ではどんなものなのでしょうか。

寝たきり老人や認知症、植物人間とその数は増えるばかりで大勢の若い人たちがこのような老人の介護に心を砕いている姿には頭が下がります。

確かに老いを超越すればポジティブに生きられそうです。でも実際には多くの老人は老いを超越できない、また出来ていないように見えます。老いをそのまま受け止めてはいないように思えます。

私の母は95歳まで生きましたが、死ぬのはいつ死んでもいいけど、死ぬのが怖いと言っていました。私ももう世の中ですることはなくなり、いつ死んでもいいし、早く死にたいという気持ちもありますが、やっぱり死に伴う苦痛は怖いと思います。

だから誰もがポックリ死にたくて、そのために体操をしたり、食べ物に気をつけたりするのですが、そんな事をするから余計に長生きをしてしまうという矛盾もあります。

この超高齢社会では、老人の意識改革が必要です。人間以外の動物で20年も子供の世話をしたり、孫の面倒までみる動物はいないので、人間も過度に医療や薬に頼らず、ほどほどの時点で死ぬのが一番望ましいと思います。たぶん現在が老人にとって一番いい時代で、これからは地球環境が悪化し、福祉も十分いきわたらなくなり、老人がちやほやされることも少なくなるのではないのでしょうか。私は安楽死が早く制度化されればいいと思っています。そうすれば死ぬのが怖いという事もなくなりますし、自分で自分の生を終わらせる自由を持てるからです。

注2) ホワイト(1985)は、内的な動機づけ・コンピテンスは環境との様々な側面に対処していく人間の意識、無意識による「確信」を意味すると述べている。¹¹¹⁾

また行為についてはギブソンのアフォーダンスの概念が挙げられる。アフォーダンスとは「環境側が動物に提供するもの」である。ギブソン(1985)¹¹²⁾

例としてライオンは空腹が空いた時は、目の前の動物を襲うが空腹が空いていない時は同じ対象であっても決して襲うことはないという現象は、その場の状況に応じて対象を襲ったり襲わなかったりし対象が餌に見えたり見えなかったりするという潜在性を帯びていることを意味する。

3 研究の限界と今後の課題

本研究は、老いの超越を捉える上で調査研究では取りこぼされてしまう点を「諦観」というネガティブとポジティブの側面から捉えその意味について探究した。それには高齢者の語りから老いや死の捉え方に着目し内的な構造を可視化する手法で現象にアプローチしていく事を試みた。

先行研究でエリクソンの捉えた自我の統合と絶望から老いの超越に至る道筋に諦めが諦観に変化するプロセスが質的調査によって捉えられた。その意味として身体感覚から情動体験を感じるプロセス（諦らむ）が意志や確信としての思考のプロセス（明らむ）に至りあるがまま地点で質が変わりそれまでの捉われていた価値観から解放されることが推察された。老いの超越に至る流れは辛いを感じる諦らむと意志や確信としての思考の過程（明らむ）を繰り返しながら螺旋状を少しずつゆっくりと変化するプロセスが示唆された。

この道筋を通してトーンスタンの捉えた宇宙的次元である老いの超越に至る道筋が示唆される。

一方で老年期にはどうすることも出来ない諦めが示唆された。究極は人間が死に直面する意識状態として「澄む・あきらむ」が捉えられた。このプロセスを捉えるためには、従来の既存の尺度を用いた調査研究では難しく現象学的アプローチによってでなくては見出すことは不可能である。

50 実例の高齢者からの語りから現象学的アプローチを行ない老いの超越を老いや死の捉え方に着目し意識の流れを可視化した。結果、それまでネガティブな見方が多くされてきた超高齢期の高齢者像が諦観という境地から新しい高齢者像の可能性が示唆された。

老いや死は一般的には衰退や喪失期としてのネガティブなものと捉えられがちだが知的な豊潤化されたポジティブな高齢者像の可能性として高齢者像が変化することが本研究から示唆された。今後はより多くの高齢者を対象に対話的関わりを通じた中から検討して行く事でさまざまな経験値の意味を創造し他者との交差によってより豊かな新たな価値の意味を創造的に捉えていく事が課題でありそこに衰退や発達期の老いや死をポジティブなものへと再考していく可能性があると考えられる。

またこのようなアプローチを繰り返しながら調査研究によって検証を行う事も今後の課題の一つである。

日常生活の何気ない語りの中に内的構造の心的発達の適応の可能性がある事が示唆された。身体機能が衰退し身近な人との喪失体験を経験する高齢期は辛さや悲しさを伴う時期である。衰退や喪失体験を経験する高齢期に辛さや悲しさという感情体験事体は減る事はないが、あきらめが諦観に変化し、そのプロセスに情動体験を実感する「諦らむ」から意志や確信という意味へ向かう「明らむ」を繰り返す中で内的成長が促進され、最終的に死に直面する際に「澄む・あきらむ」へと開かれる意識の流れが示唆された。

この事は、喪失期や衰退期が長くなった高齢期の新たな可能性として高齢者像が豊潤化されることが期待される。

一方で関わる者が、高齢期の心的状態に関心を持ち寄り添うことで漸次的発達が双方に開かれる可能性がありそこに共存の意味が含まれ、エリクソンが捉えた相互依存¹¹³⁾としての類似性が示唆された。

今後人間存在の原理を追求する基礎研究を人間生活に資するよう発展させていく事に寄与すべく関係性の中で体験過程から意味を創造しつつ実践と研究の研磨に励み高齢期の未来が明るい笑顔に開かれることを願い努力していきたいと思う。

引用文献

- 1)内閣府, 2011 平成 23 年度版高齢者白書. ぎょうせい
- 2)ロバート・バトラー(1975) 『老後はなぜ悲劇なのか』 メジカルフレンド社、pp. 1-13
- 3)鷺田清一(2003) 『老いの空白』 弘文堂 p. 121
- 4)黒田文(2005) 高齢社会における「老い」の理解へむけて-高齢者の適用様式に関する考察- 関西福祉科学大学社会福祉学部 pp. 84-85
- 5)佐藤眞一(2003) 「心理学的超高齢者研究の視点 第13号」 明治学院大学心理学紀要 pp. 41-48
- 6)Diener E.Suh MK(1997) Subjective well-being and age; An international analysis. In Annual reviews of gerontology and geriatrics; Focus on emotion and adult development, eds.by Schaie KW.Lawton MP.17,238-265,Springer, New York
- 7)Jopp D, Rott C(2008) Valuation of life in old and very old age The gerontologist,48(5) pp. 646-658,
- 富澤公子(2009) 奄美大島超高齢者の日常からみる老年的超越形成意識;超高齢者のサクセスフル・エイジングの付加要因. 老年社会科学, 30(4) pp. 477-488
- 8)Baltes, P.B.&Baltes, M.M. (1998)Psychological Perspectives on Successful Aging, The psychology of the oldest old:The Fourth Age. Current Opinion in Psychiatry, 11 pp411-415.
- 9) バルテス P. B., (1987) 『生涯発達心理学(第1巻)』 東洋ほか訳 新曜社、p. 173
- 10)Baltes,P.B.,&Smith,J.(2002).New frontiers in the future of aging: From successful aging of the young old to the dilemmas of the fourth age.Gerontology,49(2):pp.121-128
- 11)Roshbaum,F., Weisz, J.R.,&Snyder,S.S.(1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of personality and Social Psychology*, 42, p 5-37.
- 12)Heckhausen,J.(1997) Developmental regulation across adulthood:Primary and secondary control of age-related challenges. Developmental Psychology,33,pp.176-187
- 13)Havighurst, R.J.(1953)Human development and education.New York:Longmans(莊司雅子(監訳)(1958)人間の発達課題と教育 牧書店
- 14) エリクソン, E. H., エリクソン, J. M., (1997) 『ライフサイクルその完結』 村瀬孝雄・近藤邦夫訳(2001) みすず書房、pp. 355-357
- 15)Tornstam, L.(1996a). Gerotranscendence: A theory about maturing into old age.*Journal of Aging and Identity*, 1, pp. 37-50
- 16)Tornstam, L.(1990) Dimensions of loneliness. Aging: Clinical and Experimental Research,3, pp.259-265

- 17) Tornstam, L.(1997). Gerotranscendence:The contemplative Dimension of aging. *Journal of Aging Studied*, 11(2), pp.143-154
- 18) 前提書 14) pp. 359-360
- 19) Tornstam, L (1996)Gerotranscendence: A theory about maturing into old age.*Journal of Aging and Identity*, 1, pp. 37-50
- 20) 中嶋康之・小田利勝 (2001) 「サクセスフル・エイジングのもう 1 つの観点-ジェロトランスセン. デンス理論の考察-」. 神戸大学発達科学部研究紀要 (8), pp. 303-317
- 21) 前提書 20) p. 304
- 22) 前提書 20) pp. 310-311
- 23) フランクル, V. E. (1946). 『フランクル著作集 1 夜と霧-ある心理学者の収容所体験』 霜山徳繭訳 (1961) みすず書房、p. 67
- 24) エリクソン, E. H (1959). 『自我同一性-アイデンティティとライフ・サイクル』 小此木啓吾訳 (1973 初版) 誠信書房
- 25) Lawton, M.P.,(1975) The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale:A revision. *Journal of general happiness. Australian journal of psychology*, 30, pp.85-89
- 26) 前提書 24) p57
- 27) Tornstam, L.,(1996b). Caring for the Elderly, Intorducinng the Theory of Gerotoranscendence as a Suplimentary Frame of Reference for Caring for the Eldery.Scandinavian Journal of Care Sciences,10, pp.140-145
- 28) エリクソン, E. H. , エリクソン, J. M. , & キヴニク, H. Q. 『老年期: 生き活きたかかわりあい』 朝長正徳 朝長梨枝子訳 (1990) みすず書房、p.362
- 29) Cumming&Henry(1961)"*Growing Old*"the process of disengagement New York; Basic Books
- 30) 前提書 27)p.362
- 31) 小田利勝 (2003) 「サクセスフル・エイジングの概念と測定方法: 人間科学研究 11 巻 1 号, p.26
- 32) 佃亜紀 (2008) 「サクセスフル・エイジングの再定式化への考察-ジェロトランスセンデンス理論の到達点と課題-」 『立命館産業社会論集』 p.150
- 33) Yoshika Yamaguchi, Satoko Tokumaru (2010) A TAE-BASED QUALITATIVE STUDY OF SUBJECTIVE WELL-BEING FOR AGED JAPANESE MEN *The Folio*, 22(1), pp .165-175
- 34) 中西信男・坂方哲彦 (2001) EPSI-エリクソン心理社会的段階目録検査- 上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック第 2 版 西村書店 pp.365-376
- 35) 平井啓 (2000) 「死生観に関する研究」 死の臨床 23 (1) pp.71-76

- 36) 吉森 譲・上田 智・有倉巴幸(1992) 「ハッピネスに関する社会心理学的研究 ハッピネス尺度の開発」日本心理学会第 56 回大会発表論集 p. 189
- 37) 竹中星朗(2000)『高齢者の孤独と豊かさ』 日本放送出版協会
- 38) R. W. ホワイト(1985) 『自我のエネルギー 精神分析とコンピテンス』 中園正身訳 新曜社、pp.10-12
- 39) 精神分析入門 (上) Sigmund Freud(1917) 井村恒郎、馬場謙一訳(2006) 日本教文社、pp. 296-298
- 40) ユージン・ジェンドリン(1993)『体験課程と意味の創造』筒井健雄訳 (1996) ぶっく東京、pp.70-71
- 41) 精神分析入門 (下) Sigmund Freud(1917)(2006) 井村恒郎、馬場謙一訳 日本教文社、p.337
- 42) 『東洋的瞑想の心理学ユング心理学選書 5』(1983) C.G ユング著 湯浅泰雄, 黒木幹夫訳 創元社、pp.1140-18
- 43) ユング派の夢解釈(1983) ジェームズ A. ホール著 氏原寛, 片岡康共訳 創元社、pp. 128-130
- 44) C. R. ロジャーズ(2005)『ロジャーズが語る自己実現の道』 諸富祥彦, 末武康弘, 保坂享共訳 岩崎学術出版、pp. 110-112
- 45) 前提書 4 3) pp. 260-261
- 46) 前提書 1 4) p. 366
- 47) 前提書 1 4) p. 362
- 48) Maslow, A. H. (1968) 『『完全なる人間』 上田吉一訳 精神書房、pp. 190-pp191
- 49) 前提書 4 8) p. 190
- 50) Gendlin, E. T., (1982). 『フォーカシング』村山正治, 都留春夫, 村瀬孝雄訳 福村出版
- 51) 前提書 5 0) p. 190
- 52) Gendlin Eugene T. (2004) “*Thinking at the Edge*”, A New Philosophical Practice. *The Folio*, 19(1), pp.12-24
- 53) E. T. ジェンドリン(1999)『フォーカシング指向心理療法 (下) 心理療法の統合のために』金剛出版、p. 340
- 54) 前提書 5 3) p. 340
- 55) Tornstam, L. (2005). *Gerotranscendence: a developmental theory of positive aging*. New York: Springer. pp. 3-5
- 56) 信木晴雄(2007)『フッサールの現象学の多様性』人文書院

- 57) ハイデガー, M. (1962) 『存在の時間』 上・下 細谷貞雄訳 理想社
- 58) モーリス、メルロポンティ (1983) 知覚の本性 存在と所有 加賀野井秀一郎 法政大学出版局、pp. 57-70
- 59) 前提書 40) p.125
- 60) 前提書 53) pp.441-449
- 61) Gendlin E. T. (2009) *"We Can Think with the Implicit, As Well As with Fully-Formed Concepts"* Springer, p.150
- 62) ハーバート・ブルーマー (1991) 『シンボリック相互作用論』 後藤将之訳 勁草書房、p. 191
- 63) ルードリフ・A・マックリール (1974) 『ディルタイ精神科学の哲学者』 大野篤一郎/田中誠/小松洋一/伊藤道生 訳 pp. 286-290
- 64) 前提書 43) p. 128
- 65) 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法 混沌をして語らしめる』 中央公論社、p. 543
- 66) Strauss, A. L. J. Corbin, (1990), *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, pp.13-14
- 67) 木下康二 (2004) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂 pp. 45-75
- 68) 得丸智子 (2010) 『ステップ式質的研究法 TAE の理論と応用』 海鳴社 pp. 2-10
- 69) 前提書 68) pp. 24-27
- 70) 前提書 40) pp. 201-232
- 71) Eugene T. Gendlin (1997), "A PROCESS MODEL" The Focusing Institute, p.140
- 72) 前提書 40) pp. 207-209
- 73) 前提書 68) p. 84
- 74) 前提書 71) pp. 192-194
- 75) 前提書 68) pp. 137-139
- 76) 前提書 68) pp. 5-9
- 77) 前提書 55) pp. 70-75
- 78) 前提書 35) pp. 74-76
- 79) 前提書 36) p. 189

- 80) 前提書 5 5) p. 94
- 81) Wright, B.A.(1960).Physical disability: A psychological approach. New York:Harper & Row
- 82) 大橋明(2008)「諦らめに関する心理学的考察-その意味と概念について-」中部学院大学・中部学院短期大学部 研究紀要第 9 号、pp. 23-24
- 83) 鈴木忠(2008)「諦観と晩年性 -生涯発達心理学の新しい概念として-」白百合大学研究紀要、pp. 111-112
- 84) 上田敏(1980)「障害の受容 総合リハビリテーション第 8 巻」 pp. 515-521
- 85) 南雲直二(2002) リハビリテーション心理学入門 人間性の回復をめざして 荘道社、p. 35
- 86) ハーバート・ブルーマー(1991) シンボリック相互作用論 後藤将之訳 勁草書房、p. 191
- 87) 前提書 2 5)
- 88) Tornstam, L.(1997). Gerotranscendence:The contemplative Dimension of aging. Journal of Aging Studied, 11(2),143-154
- 89) 前提書 5 5) pp. 70-77
- 90) 前提書 2 8) pp. 361-362
- 91) Tornstam, L.(2003). Gerotranscendencefrom young old age to old old age.
- 92) 前提書 7 1) p.99
- 93) 木村敏(1972) 『人と人との間』弘文堂、pp. 20-23
- 94) 尾崎左永子(1987)『古今和歌集・新古今和歌集』集英社、p12
- 95)前提書 9 4) p. 31
- 96)小島憲之, 東野治之, 木下正俊 訳 (1996)『萬葉集 4』 巻第 1 5 から 2 0 小学館、P363
- 97)市古貞次訳(1994)『平家物語 ①』小学館、pp.19-29
- 98) 大森曹玄(1979) 『禅の構想』春秋社、p. 120
- 99) Tornstam, L.(2005). *Gerotranscendence*:a developmental theory of positive aging. New York:Springer.
- 100) 上田敏(1994) 『眼でみるリハビリテーション医学 第 2 版』 東京大学出版会
- 101) Jonson,H.,&Magusson, J.A.(2001) A new age of old age.Gerotranscendence and the re-enchantment of aging. Journal og aging Studies.15,pp.317-325
- 102) 前提書 1 0 0) pp.15-20
- 103)長谷川和夫(2009)『森田療法がわかる本 ありのままの自分を受け容れる』グラフ社、

- 104) Baltes, P.B., (1980) Reese, H.W.& Lipsitt, L.P. Life-Span Developmental Psychology, Annual Review of Psychology, 31 p.77.
- 105) 前提書 28) pp. 142-143
- 106) Tornstam, L (1992) The Quo Vadis of Gerontology; On the Gerontological Research Paradigm. The Gerontologist, 32, pp.318-325.
- 107) 椎名麟三(1981)『永遠なる序章』新潮現代文学、p. 116
- 108) 横山博(2003)『言葉/イメージ/宗教性 心の危機と心理臨床』新曜社、pp. 68-70
- 109) 前提書 108) p. 69
- 110) 金子春勇(1979) 『対話的思考』創文社
- 111) 前提書 38)p. 260
- 112) 佐々木正人(2000) 『知覚は終わらない アフォーダンスの招待』 青土社、pp.32-34
- 113) 前提書 14)p. 355

参考文献

- Archley(1976)The sociology of retirement, Cambridge, Mass.:Schenkman Pub. Co.. New York: distributed by Halsted Press
- Baltes, P.B., (1980)Reese, H.W.&Lipsitt,L.P.Life-Span Developmental Psychology,Annual Review of Psychology, 31 p.77.
- Erikson, E.H.1963 Childhood and society, 2nd ed. New York
- Erikson, E.H. Reflection on Dr.Borg's life cycle.In E.H. Erikson(Ed,)Adulthood. New York:Norton, 1978, PP.1-32
- Gendlin,E.T(2009) *What first and third person processes really are*.Journal of Consciousness Sthdies, 16(10-12),pp332-362
- Robert C.Atchley/Amanda S.Barusch 宮内康二 編訳 (株) ニッセイ基礎研究所ジェロントロジーフォーラム監訳
- Tornstam,L(2005) Gerotranscendence A developmental Theory of Positive aging,New York, Springer Publishing Company
- アンワイザー・コーネル(1996)『フォーカシング・ガイド・マニュアル』 金剛出版
- 伊藤健一,吉良安之,末武康弘,近田輝行,村里忠之『フォーカシングの原点と臨床的展開』 33 p176-177
- エドワードホフマン(1995)『マズロー真実の人間 アブラハム・マズローの生涯』 誠信書房
- 榎本博明 (2008)『(自己と心理学) 生涯発達心理学へのアプローチ』 金子書房
- 岡本祐子(1994)『成人期自我同一性の発達過程とその要因に関する研究』 風間書房、 pp.224-226
- 小倉康継(2003) 再帰的近代としての高齢化社会と人間形成 質的心理学研究 第2号, p.59
- 小此木啓吾(1987)『精神分析セミナーIV フロイトの精神病理学理論』岩崎学術出版社、p.76-77 (抑圧と防衛機制) P288-289 (エディプスコンプレクス) メニンガーpp.204-208
- 小澤勲 (2006)『ケアってなんだろう』 医学書院
- カーシェンバーム・ヘンダーソン(編)/伊藤博・村山正治(訳)(2001) ロジャーズ選集上・下 誠信書房
- 河合隼雄(1967)『ユング心理学入門』 培風館 PP93-94
- 河合隼雄(1978)『無意識の探究—ユングとの対話』 誠信書房 P12
- 河合隼雄(1989)『生と死の接点』 岩波書店
- 河合隼雄(2002)『ユング心理学と超越性』 岩波書店
- 木下康二(1993)『老人ケアの人間学』 医学書院
- 木村敏(1972)『人と人との間』 弘文堂

- 下仲順子(1987)『老人と人格肯定否定』 川島書店 P100
- 下仲順子(1995)『老いる事の意味 中年・老年期』 金子書房 P142
- 西條剛央(2007)『ライブ講義質的研究とは何か』新曜社 P23
- 戈木クレイグヒル滋子(2007)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：理論を生み出すまで』新曜社 pp.2-3
- 佐藤郁哉(2006)『フィールドワーク 増補版 書を持って街へ出よう』新曜社
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社
- 佐藤真理人(1996)『フッサール・ハイデガーの実存の発見』法政大学出版社
- ジェンドリン E.T., (1986)『夢とフォーカシング』村山正治(訳)福村出版 P232-236
- ジェンドリン E.T., (1998)『フォーカシング指向心理療法』(上)心理療法の統合のために』 村瀬考雄・池見陽訳
- ジョン・マクレオッド著 臨床実践のための質的研究法入門 下山晴彦監修/谷口明子・原田杏子訳 PP79-83
- 成瀬悟策(2009)『からだところろ身体性の臨床心理』 誠信書房 p243-244
- 西田幾多郎(2007)『西田幾多郎キーワード論集』書肆心水
- 西平直(2008)『死生学 ライフサイクルと死』東京大学出版社
- 信木晴雄(2007)『フッサールの現象学の多様性』 人文書院
- 鑓幹八郎, 川畑直人(2009)心理学の世界 基礎編 8 臨床心理学 培風館
- 筒井健雄(1985)『人格形成の科学』ぶっく東京
- 都留春夫(1984)『体験過程アプローチ(心理療法家にとっての治療理論)』心理臨床学研究, Vol. 1, No.2, P.25
- ディルタイ全集 第1巻(2003)『精神科学論集』大野篤一郎・丸山高司 法政大学出版局
- ディルタイ全集 第3巻(2003)『論理学・心理学論集』大野篤一郎・丸山高司 法政大学出版局
- デンジン, N. K. ・リンカン, Y. S. (2006)
質的研究ハンドブック 2 巻 質的研究の設計と戦略』(平山満義監訳) 北大路書房
- 土居健郎 2「甘え」理論の展開 岩波書店 P91
- 得丸智子(2009)『TAEによる文章表現ワークブック』図書文化
- 得丸智子(2010)『ステップ式質的研究法 TAEの理論と応用』海鳴社
- バーバラ M. ニューマン フィリップ R. ニューマン著 新版 生涯発達心理学(1988) エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店

フロイド(1912) 夢判断(上) 高橋義孝訳 日本教文社 P10, P39 , P56 P262

フロイド(1912) 精神分析入門 高橋義孝訳 日本教文社 P314-315

フロイド(1978) 『人類の知的遺産』小此木啓吾訳 56 講談社、pp49-56

フロイド(1984)『完訳・世界の大思想3』菊盛英夫訳 精神分析入門 河出書房新社、PP269-295

フロイド(1985)『自我と防衛』 外林大作訳 誠信書房、p.144

フロイド(2002) 『フロイド著作集(2)夢判断』 正末啓三・井村垣郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 編集 p35

フロイド著作集 第6巻 自我とエス 道籟泰三訳 pp.313-378 人文書院

無藤隆・やまだようこ他編(2002)『質的心理学研究 1』新曜社

山村 己 (1975) 老いの意味 美しい老年のために ポール・トゥルニエ P81

湯浅泰雄 (1989)『ユングと東洋』上・下 人文書院 P35

U・フリック著 (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 訳) (2002) 『質的研究入門：〈人間の科学〉のための方法論』春秋社 P11

ユング (2002)『夢分析』入江良平, 細井直子訳

やまだようこ(2006)『質的心理学の方法 -語りをきく-』新曜社 P10

渡辺学 (1991)『ユングにおける心の体験世界』 春秋社 P31

謝辞

老いの超越や統合感に関して質的意味から探究したいと思い探究し始めて今年で 7 年が経過しました。「老いや死」に関するテーマを考えるには筆者の実体験は浅く接近するには難しいテーマで何度もやめようと思いましたが、しかし身内の事もあり自分の大きな一つのテーマと課しました。

本研究を探究するにあたって多くの方達の協力と声援がなければここまで至ることはなかったと思います。先ずインタビューに協力いただいた 50 人の高齢者の方にお礼を申し上げます。いろいろな人生の経験をお聞かせくださってそれが今の筆者に非常にためになっていると思います。

また本学、指導教授の阿部實先生には、筆者を理解しようとご指導をいただいたことに感謝いたします。また同じく指導教授の中島健一先生には自分のやりたい研究でなければ本当のオリジナリティは出せないとおっしゃっていただいた言葉があったから研究を遂行できたと思っています。ありがとうございます。審査委員長の今井幸充先生には研究者としての姿勢について、審査を担当してくださった後藤隆先生には、質的研究に関してご意見をお聞かせいただき学ばせていただきました。また審査を担当してくださった児玉桂子先生のご指導は研究を遂行するにあたって非常に役に立ちました。ありがとうございます。

また本学のゼミの皆さんとの出会いにも感謝いたします。

また TAE をご指導くださった得丸智子先生、読書会を主催されている鷺見成正先生、中谷三保子先生、メンバーの吉川豊さん、宮坂亮さんにはいつも励ましをいただき本当に感謝しております。TAE 質的研究会の皆さん、フォーカシング勉強会のメンバーの木村喜美代さん、箱庭をご指導いただいている伊賀順子さんにお礼を申し上げます。

今後も基礎研究が日常の生活に役立つよう実践研磨と学びを深めていきたいと思っています。

最後にいつも暖かく筆者を励ましてくれる家族に感謝いたします。

2012年8月

山口美香

補論1 対話による変化の分析結果 実例#44

「不全状態」から対話により変化が見られた代表例として#44のデータを分析した結果を以下に示す。#44を実例として選んだ理由は、不全状態からの打開として質の変化の特徴が顕著に見られ可視化した老いの超越のモデルからの説明に適していると判断したからである。

以下は分析のプロセスである。

1) 分析の手続き

分析者は、トランスクリプト（データを逐語化したもの）を読み、データから感じるフェルトセンスをトランスクリプトを覚えるくらい読んで感じ、それを言葉にしていくプロセスで概念、カテゴリーを抽出した。

2) 属性 #44 男性 年齢は76歳 脳梗塞で倒れ介護認定2, 夫婦二人暮らしの元会社員

#44は前向きで仕事に対して一生懸命頑張ってきた。

これからもうひと頑張りという矢先に脳梗塞(病気)で倒れた。

70歳という年齢ではじめて大病をして働くことで得ていた自尊心、価値観から一転し人の世話になるという立場になり内的に不全状態に陥っていることがインタビューから考察された。#44は老いと障害という二重の危機的状況の中、それを受容していくという困難な課題に直面している。その打開策として身体の機能回復を目標にリハビリを展開している。

#44はこれまで仕事を通じて家族や人の為に働くことに価値を見出し、それが生きがいとなっていた。しかし今回、病気を体験し身体機能がこれまでのように自由に機能しなくなった。これまで仕事をする中で人生の価値を見出していたのが病気をきっかけに仕事以外の新たな価値を見出していかななくてはならなくなった。

不全状態からの打破としてまず身体機能を取り戻すことを目標にしてリハビリに励んでいる。#44自身にとって身体の機能を取り戻す事は以前のように仕事をしたいという思いが強くそれが動機づけとなっている事が考察される。

ゆえに機能回復に特化したリハビリ訓練を#44自らが前向きに取り組んでいる。

しかし他の側面、例えば趣味やデイケアでの他者との関係性、家族との関係性について何が不全状態からの打破の要因として関係してくるのか、または阻害している要因があるとすればそれは何かについて関わる側は行為や文脈から読み取り見立てる必要がある。

#44の内的構造は、きっかけは「前向き」で動機づけは「戸惑う」というアンビバレントな構造にあることが推察された。

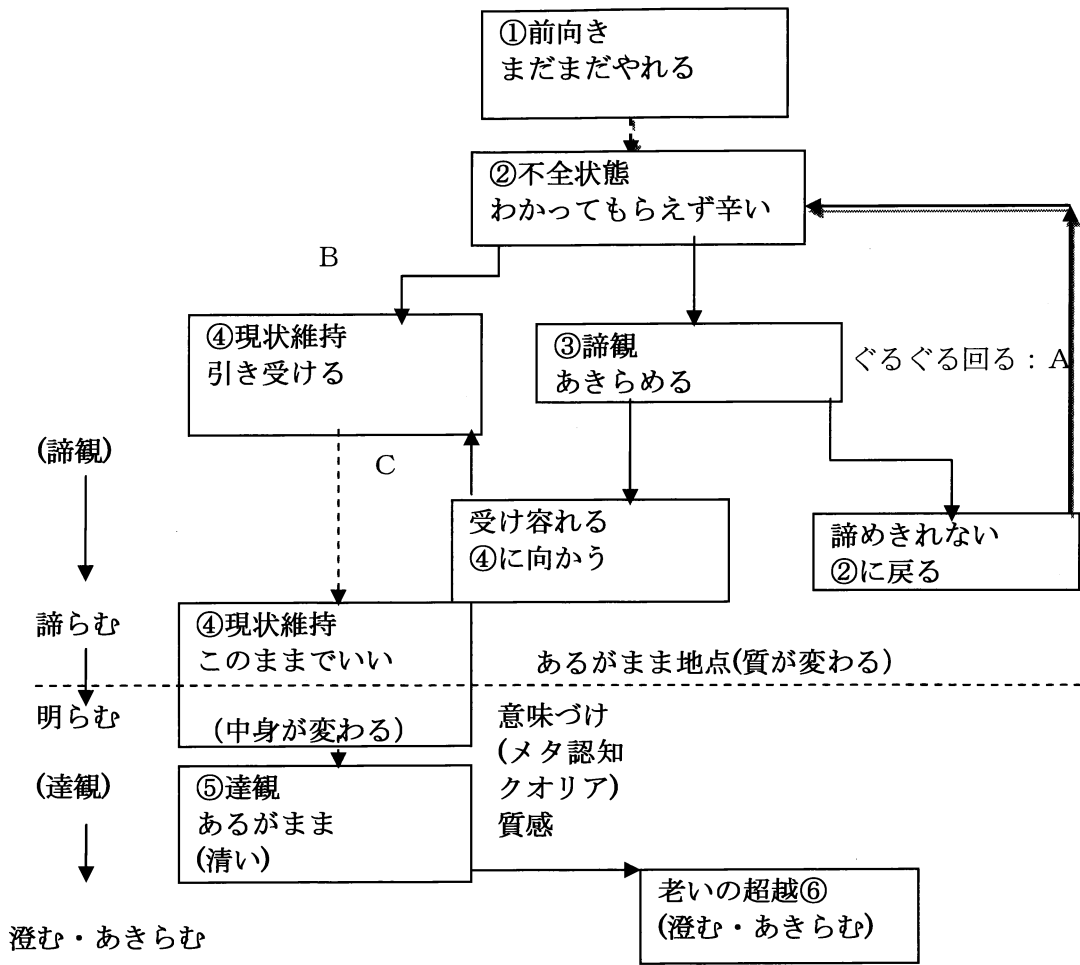
病気というライフクライシスにより新たな人生の意味の価値を模索しなければと無意識的に含意されているがまだ意識化しておらずきっかけを待って戸惑っているという#44の内的な構造が一旦不全状態に陥っている点を捉えている。

この不全状態として「前向きだけど受け身である」「気付いているが言わない」「ある部分を切り捨てる」という3つの側面を体験の捉え方のパターンとして捉えた。

今回の実例#44のポイントを老いの超越モデルの7つの構造をもとに検討する事とした。

1) 「老いの超越」の7つの構造(①回顧②前向き③不全状態④諦観⑤現状維持⑥達観⑦超越)から捉えた場合の実例による検討した

打開策としては、不全状態から現状維持に向かう過程に3つのルート(A,B,C)が推察された。



図補－1 #44 実例による変化

諦めから諦観の心境の変化のルート

- A: 「辛い」をぐるぐる回る
- B: 「辛い」を無視して引き受ける
- C: 「辛い」と感じて引き受ける

#44 の「前向きだけど受け身」の捉パターンは図1のA②わかってもらえず辛いと③諦めきれない諦めがぐるぐると循環している状態が捉えられた。

【No2： 前向きだけど受け身】

筆者： それと同時に体力の衰えというものは その辺はどのように感じておいでですか

#44： う～ん 私は今のところは無いです。

筆者： ああ今のところはお感じになることはないと

#44： ただね 気力・・・・・・落ちてきたなあ 気力って言うか ふふふ面倒臭くなってきて明日でいいわって・・・・字の練習しよってもね、今度の金曜行くって言っても、まあ明日の朝でいいとかね 億劫になってきた

筆者： そういう風に感じるようになったのはいつごろから何でしょうか

#44： 去年はそんな感じなかった。去年の半ばにはあんまりなかったんだなあ 去年の後半からはなんか億劫になってきた

筆者： それは何かきっかけはあるんでしょうか

#44： 別にないです。自然とそうなって来た・・・・ちょっと待てよ。こりゃあまずいなあ と 気力を含めて これも気力かなあという部分とそうじゃあないという部分が交錯してるん・・だ、自分の今環境の中に入って来とるからやろうと思ってただけど・・・・ただ日常生活の中でやること億劫になってきたなあ。ああこれが一般的に年なのかなあって思ってみたりね、しとるんだけれども・・どうなんでしょう

筆者： 何か億劫になってきてるということをご自身では年のせいなのかなあとお感じなのでしょうかね

#44 は体力の衰えは感じておらずこれは①まだまだやれる状態で頑張っている。

しかし気力が落ちてきて字の練習も明日でいいと語り「億劫」になってきたと語っている。

気力が落ちるという事は身体的にも何らかしらの不全を含意することが示唆される。

理由として今回のインタビューで「体力の衰えを感じますか」との質問を高齢者にした際に「体力、気力、知力」の順に低下していくと捉えている人が高齢者に多くみられたからである。

前向きな気質の#44 が「自分の今環境の中に入って来とるからやろうと思ってただけど・・・・ただ日常生活のやることが億劫になってきた」と語りその時の「億劫」にこめられた意味を推察すると「億劫」には、現在の環境の中で#44 自身が「まだまだやれる」と「もういいや」という前向きと受け身が混在していることが推察される。

そのことを加齢現象として捉えようとしている。確かに加齢現象は意欲を一旦失わせやすくなる現象である。しかし億劫の意味を「どうなんでしょう」と筆者に回答を得ようとしている。ここに#44 の寂寥感や喪失感が潜在の中に捉えられ「億劫」という概念に「寂寥感や喪失感」が含まれているであろうと推察された。

「気付いているが言わない」は老いの超越モデルの③受け容れると④引き受けるのプロセスを行き来している事が示唆され、ここに相互作用による何らかの心理的アプローチが入れば#44は「このままでいい」と捉え方の中身が変化しあるがまま地点へと向かう可能性が示唆された。

【No3： 気づいているが言わない】

#44: うん それ以外何もありませんよ。……僕はね 語る事はないと思っている 今ねえあの〜リハビリって言ってね、俺と同じような事はやってるけど、皆どんな思いでやってるのかなあっ……て思う事はありますよ。

筆者: ええ

#44: みんな同じでね。多くは語らない

筆者: ああ 多くは語られない。……どうして語らないのだと思われますか

#44: みんな苦しんでるから。また 何の話もないんだろう。みんな日常の語りの中ではみんなあんまり語らないな うん 当面病院こうだった。ああだったってことはあるにしてもたちいって……皆避けるね。

#44: それで……喉を詰まらせた人もいますよ。大慌てしてね。救急車呼んだりすることもあるけどあっても皆何にも……先生がああだこうだでもない。あれ不思議だなあ……うん 皆で話し合う事もない。……それでね。私もね 今年入ってから みんな こう見て……俺のようなそれっていうのはないんですね。いって見ればこれっていうのがないから あの仲間という……皆も私と同じように年取ってこれで見んな自然と弱って死んで行くのかなあと……最近思えるようになった。……やっぱり皆ねえ 生きるはげがないんだ。はげが……

人間の本質は社会的動物である。ゆえに社会性を奪われることが何よりも内的な不全要因となりうると考えられる。#44は脳梗塞で高次脳機能障害になり身体機能が以前のように自由がきかなくなり言語にも障害をともないそれまでの社会性を一気に失う事となった。関わる側が支援策を検討する上で#44の「社会性の回復」という視点は重要である。

#44にとっての「社会性の回復」の要因として「家族や他者との関わり」という観点が重要視される。#44の内的な構造の中で動機づけられていた仕事を通じた人間関係から、仕事以外のデイケアでの他者とのやり取りや家族との関係性に目を向ける必要があると考えられる。

南雲(2002)は、社会受容に関して他者から負わされる苦しみを捉え、自立生活センターなどの自助グループでの「経験を共有」した人間関係づくりが必要だと捉えている。

分析の中でそのことについて#44は暗に気づいてはいるが仕事中心に価値観を置いてきたためその先の一步が踏み込めないという迷いが生じているという内的構造が推察された。

#44はデイケアとの他の人たちとの交流関係について気付いていることが示唆される。

他の人たちはどのように状態を捉え克服しようとしているのか、どのようにそのことについて考えているのかについて社会的相互作用から意味を見出す可能性を#44は捉えている。しかし実際に行動するまでには至っていない事が「気付いているが言わない」のパターンから考察される。

「ある部分を切り捨てる」パターンとは「超越のカテゴリー」では⑩の「回顧」に入り、ここは過去からの価値観による#44のこだわりがある事が推察される。

【NO4：線引き】

中学じゃあ学校でも野球の選手，勤めた時は会社を代表して野球の選手，学生の際は生徒会長 2 期もやっちゃった

筆者:はあ～

#44:つまないことやって で 生涯どこ行ってもね. 恵まれてたの

筆者:ああ ご自身は恵まれていたと

#44:常に中間より上の立場にいた

筆者:ええ

#44:これが私の人生だったな

一般的に障害者の方は自分と他者との障害の度合いを比べて「線引き」をする傾向があると言われている. それによってリハビリ等をどのように克服して機能を回復していくかの「自己効力感」として「線引き」が内的に作用していることが推察される.

このような場合, 援助者が互いに感じあえるような組み合わせで当事者間のプログラム等を組んでいく事も一つの援助の可能性となりうると考えられる.

また本インタビューの場面での④あるがままでは, #44 へ「人生の一貫した意味について」質問した際に#44 は「それは親・・・」と答え「とにかく好かれた. . . 運命の宝だ」とその意味について自分自身の中から答えを導き出し人徳(意志)として捉えられた.

#44 はインタビュー当初は「生きがいなど何ありません」と否定的側面が捉えられていた. これまでの人生を一生懸命生きてきてもうひと頑張りというところで高次脳機能障害になりリハビリに取り組んでいる. しかし人生の目的がそれまで仕事一筋できたため別の側面に価値を捉える事が難しく躊躇している状態が推察された. インタビューを通じて内的変化が捉え方(パターン)から考察され, 最終的にその瞬間だけではあるが, エリクソンの唱えた人間の本質である「信頼性からの感謝の気持ち」をご自身の中にその時抱かれたのではないかと推察される.

【NO.5 人生の一貫した意味】

#44:これが私の人生だったな

筆者:其のことを振り返られたとして一貫した意味があるとしたらどんな風に感じていらっしゃいますか

#44:・・・・・・う～ん(せき込む)何て言うかなあ・・・・考えたことがないんだけど(笑う)せいぜい言わしてもらおうと親だったかなあと 親

筆者:親

#44: うん まあ夜学行ったから

筆者:ええ

#44:職場でも T さんって言われたり T ちゃんって言われたり とにかく好かれた.

筆者:ああご自身は他の方から好かれたのですね

#44:とにかく・・・・・・自分の持った宝だ 運命の 運命の宝だ

筆者:ああ ご自身はそうにお感じなんですね

#44: 人から厳しくっていうけどされた事はなかった

筆者: ああ なかったですか

今後#44 のデイケアでの他者との関わりや役割などについて何らかの心理的アプローチが行なわれれば不全状態からの打開としての新たな価値の創出の可能性があると捉えられる. 福祉の実践現場での心的アプローチによる介入支援の必要性が今回の#44 の実例によって示された. なお分析が分析者のバックグラウンドに影響されうるという事も分析者は覚悟する必要があると考えられる. 例えば分析の中で分析者が児童・家族支援がフィールドであ

れば【社会性の回復】という関係要因を考慮する場合、家族間の関係性をより重点的に捉えた視点になりやすいことを覚悟する必要があると考えられる。
その際問題となる点は関わる者は何が積極的に援助できるのか、またどのようなサポートができ、限界は何なのかについて検討する必要があると考えられる。

補論 2 : TAE の分析過程について

TAE の各パートの説明について

TAE (Thinking At the Edge) は 3 つのパートの別れている

以下に TAE の分析過程を例示する

1) TAE の分析過程 (パート 1 : フェルトセンスを感じるパートで行なったこと)

① 逐語化されたデータ (トランスクリプト) を何度も何度も覚えるくらい読み込んでフェルトセンスを感じる

↓

② トランスクリプト全体を読んで感じたフェルトセンスをマイセンテンスとして表わす

↓

③ 概念を 3 つ選び選んだ概念の辞書的意味を書く

↓

④ 選んだ概念の辞書的意味で言い表せていない感じられた意味を書く

↓

⑤ もう一度マイセンテンスを書く

↓

⑥ マイセンテンスのフェルトセンスの意味も書く

以下に分析ワークシートに分析過程の実例を示す

分析手順：TAE のステップ 1 は、分析に使用するデータに対するフェルトセンスを感じる
ところから始まる。

データ全体に繰り返し触れ、そのデータに対して「知っているけれどもうまく言えないフ
ェルトセンス」が形成されることが、TAE の分析開始条件である。

分析過程：筆者が、インタビュー # 1 4 のインタビューの文字起こしデータを読み込ん
だ。

データを読み込み、「インタビューの老いと死の捉え方」について、「明確に言語化でき
ないが知っている感じ」を得た。

インタビューの属性

女性 #14 75 歳 家族構成:夫婦二人 (前の家族構成) 夫婦二人と娘,前の職業:専業主婦

分析者にとって、これは先行研究である山口 (2008) で得た「現代日本の高齢者に独特の『老
いと死の捉え方』がある」というフェルトセンスにつながるような感じられ
たが、その点についてはあえて追求せず、漠然としたままにしておいた。それとは別に、
インタビュー # 1 4 のデータから直接的に形成されるフェルトセンスをしっかりと感じる
ように努めた。

以下の分析は、終始、この分析者が得た「データが含意するインタビューの老いと死の
捉え方」のフェルトセンスを感じ、このフェルトセンスに照合しながらおこなっていく。

1) ステップ 1 から 5 パート 1 : フェルトセンスを感じる

分析手順：ステップ 1 から 5 では、フェルトセンスの非論理的なところに注意を向けた上
で、フェルトセンスから出てきた言葉の公的 (辞書的) 意味と、フェルトセンス独自の意
味の両方にアクセスし互いを応答させ、どのように違うかを言葉にしていける。その過程で、
公的な意味ではないフェルトセンス独自の意味が気づかれるようになっていく。

分析過程：筆者が分析開始前に浸って得た「データが含意するインタビューの老いと死
の捉え方」のフェルトセンスに浸りながら、中核を数語で表現した。

1. 情け。2. 清い死。3. ケッセラセラ

筆者がそれを短い 1 つの文にし、文中のキーワードの通常の意味ではない、フェルトセン
ス独自の意味を言語化した。

1. 生活を共にしたこと、生活歴史、血ではない・・・

2. 清々しい、濁りのない、混じりけのない、誠実、真実・・・

3. あきらめ、しょうがない、許す、受け入れる、ぐちぐちしない、さっぱりしている、
なるようになる、ありのまま・・・

この過程を数回繰り返し、ステップ 5 の終わりに、次のような「データが含意するインタ
ビューの老いと死の捉え方」の中核を表す文を得た。

中核を表す文：「清い」を受け継ぐ感じ

図4は分析に使用したマイセンテンスシートである。

このシートがステップ1～5までのプロセスをまとめたものである。

| | | |
|---|--|---|
| ①テーマ ※テーマを1つ選び、「この感じ」として持つ。下に事柄をメモする 清いを伝承しこだわらない感じ | | |
| ②浮かんでくる言葉 ※「この感じ」のフェルトセンスを感じながら書く ケッセラセラ, しょうがない, 情, 伝承, 歴史, 失われていく, . あきらめ, 積み上げたもの, 伝えられたもの, 清い死, 学問でない, 体験, 目上の人, 自分で, 迷いが消える ※大事な言葉に下線を引く | | |
| ③仮マイセンテンス ※フェルトセンスを短い1つの文にする。語も文型も自由に作る 清いを <u>受け継ぐ</u> 感じ ※最も大事な言葉に線を引く | | |
| ④空所のある文 ※仮マイセンテンスの二重線の部分を空所にした文を書く 清いを（ ）感じ ※空所に入る言葉をフェルトセンスから引き出す | | |
| ※キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く | | |
| ⑤キーワード1 情け | ⑦キーワード2 清い | ⑨キーワード3 ケッセラセラ |
| ⑥通常の意味 人間みのある, 他人をいたわる 男女の情, もののあわれを知る | ⑧通常の意味 よごれ, にごり, 曇りが無い, 美しい, 態度がさっぱりして思い切りがいい | ⑩通常の意味 なるようになる |
| ⑪フェルトセンス独自の意味 生活を共にしたこと, 生活歴史, 血ではない, | ⑫フェルトセンス独自の意味 清々しい, 濁りのない, 混じりけのない, 誠実, 真実 | ⑬フェルトセンス独自の意味 あきらめ, しょうがない, 許す, 受け入れる, ぐちぐちしない, さっぱりしている, なるようになる, ありのまま |
| ※大事な言葉に波線を引く | | |
| ⑭拡張文 ※空所に, すべてのキーワードと波線を引いた言葉を並べる 情けがあって清い (けれども) さっぱりしている (<u>あつけらかんとしている</u>) | | |
| ⑮マイセンテンス=キャッチコピー ※フェルトセンスを短い1つの文にする。 語も文型も自由に作る 清いを <u>受け継ぐ</u> 感じ | | |
| ⑯マイセンテンス=キャッチコピーの補足説明 ※ほかの人にもわかるように書く 人生を受け入れて自分の運命, 病, 死を受け入れて自分で決める い人生を共にすること, そこで伝える事, 生まれた事を大切にする | | |

図1 マイセンテンスシート

2) ステップ6から9 **パート2：抽象化の段階**

分析手順：ステップ6から9では、まず、重要だと感じられる1まとまりの話を1つの実例とし、それぞれの実例からパターンを見つける。パターンとは、他の実例にも適用できる一般化された表現の文である。

次にたとえば、実例1から抽出したパターン1を実例2に適用してみて気づいたことを書き出し、実例2から抽出したパターンを実例3に適用するというふうに、実例とパターンの組み合わせを「交差」させて総当たりで適用する。そして、そのつど、フェルトセンスと応答させる。すると、実例の中から、以前には気づかれなかった実例の細部間の関係が、気づかれてくる。

分析過程：インタビューデータに戻り、「データが含意するインタビューイの老いと死の捉え方」のフェルトセンスの全体が表現できるような実例を集めた。全データの多様な側面を捉える全14の実例が選ばれた。選ばれた14の実例からパターンを表4－18に抽出したパターンとしてまとめた。

表1 抽出されたパターン

| 抽出されたパターン | | |
|------------------|------------------|--------------------|
| 1. コミュニケーションが楽しい | 6. 知的に分析する | 11. 清い死を送りたい |
| 2. 主人はやさしい | 7. 伝承が大切だ | 12. これからさきになるようになる |
| 3. あの時代は～だった | 8. 家族には生活の歴史がある | 13. 失う事を受け入れる |
| 4. スパッとあきらめた | 9. 看病するために生まれてきた | 14. 自然に癒される |
| 5. 長く生活すると情けができる | 10. 最後まで理性的である | |

ここで、オリジナルTAEにはないが、該当パターンが当てはまる他の実例を全データから書き出す「パターンシート」を使用した。

パターンシートは、研究としておこなう場合、代表例にもれがないか、反対例がないかなど、網羅的にチェックする段階が必要だと考えたからである。チェックする段階で、類似の実例が多く出てきた場合はまとめながら作業すると効率的であると判断し、パターンシートを使用した。尚、実際の作業は、パターンの抽出とパターンシートの作成を同時並行的におこなった。パターンシートを図4－19に例示する。表中の番号はインタビューデータの発言番号である。

表2 パターンシート

| パターンシート No.3 | |
|---|---|
| P405 | あの時代は～だった |
| | #14: そう遊びに行くのは日比谷公園だったからバレーボールしかないのよ あの当時遊ぶものが それで日比谷の通りね。車が走ってないもんで平気で渡れたもん あの当時は あったとしても外車ばかりだしね |
| 同じパターンが現れている実例 | |
| いい時でしたよ。ほんと それで皆あそこでバレーボールかなんかして それこそヘッパースンダルはいて 銀座闊歩してお昼休みいられた時代だったからいい時代でした。 メモ：昭和。平成。その時代時代について | |

さらに、すべてのパターンを相互に交差させ、フェルトセンスと応答させながら、新たに浮かび上がってくる知見を書きとめた。実例1のパターンを実例2のパターンに適用し、

実例2のパターンを実例3のパターンに適用するというように順次14のパターンを182の組み合わせを検討した。

その後、ここまでの分析で気づいたことを、自由に書きとった。

図2 パターン交差シートはステップ8パターンの交差を例示した。

| 1. コミュニケーションが楽しい | |
|------------------|--|
| パターン | 交差して気づいたこと |
| 2 主人はやさしい | ご主人とのコミュニケーションを楽しむ、一番気が合う |
| 3～の時代だった | あの時代は人とのつながりは豊だった 豊かな時代 |
| 4.スパッとあきらめる | 父との関係でもっとコミュニケーションをとっておけばよかったのに・・・家族の関係に後悔しあきらめる |
| 5 長く生活すると情けができる | 家族は生活を長く一緒に暮らすことでコミュニケーションが生まれる・・・家族は情け |

図2 パターン交差シート

表3はパターンの中で重要だと思われるものを挙げた

表3 14パターンのうち重要だと思われるもの

コミュニケーションが楽しい

～の時代だった

長く生活すると情けができる

清い死を送りたい

これから先なるようになる（ケッセラセラ）

失う事を受け入れる

伝承が大切

知的に分析する

家族には生活の歴史がある

スパッとあきらめる

ステップ9

ここまでの作業を終了して全体を感じその感じを表現する

全体を感じてその感じから浮かんできた事を表現し図4－6にまとめた

情け、清い死、なるようになる、ケッセラセラ、失う事を受け入れる、伝承、あきらめる。

家族には生活の歴史がある

図3 全体を感じて浮かんできた事

ここまでの作業が従来の質的研究での作業プロセスである。

TA Eはパート3として理論構築段階がステップに位置づけられている。

3) ステップ 10～14 パート3：理論構築の段階

分析手順：ステップ 10 から 12 は、理論を構築する段階である。

ステップ 10, 11 では、ここまでの分析過程で重要と感じられた用語を、「とりあえず」選定し、論理的に関連づけられた文に試行錯誤的に当てはめ、フェルトセンスに照合する。

これを繰り返し、文を修正したり気づいたことをメモしたりする。この過程では、外から与えられた文型の推論力とフェルトセンスの応答力の両方が活用される。これにより、用語間の論理的関係が気づかれてくる。

オリジナル TAE では、“A is B” “A is inherently B”の文型に用語を当てはめて試行する。本研究では日本語に翻訳し、「A は B である」(Step10)。「A はもともと B の性質をもっている」(Step11) の文型を用いた。

ステップ 12 では、最終的な用語を選び直し、1つの用語を、残りの諸用語を使いながら説明する文を作っていく。用語の数と同数の文ができる。これに必要な用語を追加し、追加した語も残りの諸用語を使って説明することを繰り返し、徐々にフェルトセンスの全体を表現していく。追加したい用語が尽きたと感じられたら、作業を終了する。この作業により、分析者によってデータから読み取られた意味連関の総体が、諸用語が互い組み込まれた意味連関の構造体として表現される。TAE ではこれが「理論」として定義されている。構造体に組み込まれた「用語」は「概念」と呼ばれる。最後に、諸「概念」を用いて「理論」の骨格を表現する。

以下に TAE で理論構築をする過程を示す

フェルトセンスから感じタームを 3 つ選択した

A 諦観

B 意味づけ

C 共振、響応（情け、感動）

分析過程：ステップ 10 として、フェルトセンス全体を表現する用語（語句）を 3 つ選んだ。

A「諦観」 B「意味づけ」 C「響応」が選定された。

「A は B である」に語句を補足する方法で修正し、「データが含意するインタビューの老いと死の捉え方」のフェルトセンスに合う文を作った。BC, CA も同様に行い、下の文を得た。

| | |
|-----|----------------|
| A=B | 「諦観」は「意味づけ」である |
| B=C | 「意味づけ」は「響応」である |
| C=A | 「響応」は「諦観」である |
| B=A | 「意味づけ」は「諦観」である |
| C=B | 「響応」は「意味づけ」である |
| A=C | 「諦観」は、「響応」である |

以下分析ワークシートはステップ10である。

である文シート

①パート2までのプロセスを踏まえ、フェルトセンスをもとに3つの用語A,B,Cを選ぶ
 $A=B, B=C, C=A, B=A, C=B, A=C$ ここでは論理（文法）と非論理（フェルトセンス）とを
 ジグザグに行き来する思考から形式と応答させ経験を捉える （ステップ10）

分析過程：ステップ10として、フェルトセンス全体を表現する用語（語句）を3つ選んだ。
 A「諦観」B「意味づけ」C「響応」が選定された。「AはBである」に語句を補足する方法
 で修正し、「データが含意するインタビューイの老いと死の捉え方」のフェルトセンスに合
 う文を作った。BC. CAも同様に行い、下の文を得た。

図5ステップ10『であるシート』のプロセスをまとめたものである。

| | | |
|---|-----------------|----------------------------------|
| タームを「は」と「である」で結んで文を作り、フェルトセンスで感じて修正する | | |
| テーマとしているフェルトセンスを感じ直す 『#14について』 | | |
| 3つのターム*フェルトセンスの中に大きな三角形を描くつもりで、頂点におくタームを選ぶ | | |
| A：諦観 | B：意味づけ | C：響応 |
| タームをイコール（「である」）で結びフェルトセンスに合うように加筆する。気づいたことをメモする。 | | |
| ターム | 形式的に論理的な文 | 形式的に論理的で、かつ、フェルトセンスに合っている文 |
| A=B | 「諦観」は「意味づけ」である | ⑦「諦観」は「意味づけ」を安定させるものである |
| ⑧（メモ）くよくよしないを繰り返す。口ぐせのようにしている | | |
| B=C | ⑨「意味づけ」は「響応」である | ⑩「意味づけ」は「響応」に引き続いておこるものである |
| ⑪（メモ）どんなふうにしてでも生きていける | | |
| C=A | ⑫「響応」は「諦観」である | ⑬「響応」は「諦観」に至る通過点である |
| ⑭（メモ）清い死の方、看病、やるだけやった、手からはなれていく・・・駄目とわかっていてもやる タクシードライバーの方、助けても駄目な人もいる・・・それでも助ける | | |
| B=A | ⑫「意味づけ」は「諦観」である | ⑬「意味づけ」は「諦観」を前向きにするものである |
| ⑭（メモ）祖母、母の清い死を受け継ぎたい。「わたしもあんなふうに・・・死ぬ時はなりたい」 | | |
| C=B | ⑮「響応」は「意味づけ」である | ⑯「響応」は「意味づけ」の始まりとなるものである |
| ⑰（メモ）情けが意味づけにむかうと（清い）の始まりになる感じ | | |
| A=C | ⑱「諦観」は、「響応」である | AC「諦観」は「響応」をより強固にする（より強くする）ものである |
| ⑳（メモ）雑念がなくなると感謝できるという感じ（人は諦めたときに、もっと優しくなれる＝人の気持ちがわかるようになる・・・死を覚悟すると人の気持ちがわかるようになる） | | |

図5『であるシート』

であるシートの過程

①TAE ステップ1～9までの作業を終え浮かんできた事柄を自由に書いたものが下記である。

情け、清い死、なるようになる、ケッセラセラ、失う事を受け入れる、伝承、あきらめる。
家族には生活の歴史がある

ここで清いに向かうには①なるようになる受け入れて諦める、

②家族の生活歴史の中で情けが育まれ伝承されるというような捉え方が浮かんできた。

ここで辛い事を受受け容れて諦めることがポジティブな諦観と言う意味の連関から「諦観」をタームとして選択した。

またそれが家族に伝わるという意味の連関から「響応」をタームとして選出した。

【ステップ 11】

以下はステップ 1 1 もともとシートである

もともとシート

ステップ 11 として、「A はもともと B の性質をもっている」の文を作り、「データが含意するインタビューイの老いと死の捉え方」のフェルトセンスと照合し、AB の本来的关系を表す語を呼び出した。BC, CA も同様に行った。

| | | |
|--|-----------------------------------|------|
| タームを「もともと」で結んで文を作り、フェルトセンスで感じてメモを書き、新タームを見出す | | |
| テーマとしているフェルトセンスを感じ直す 『#14を感じて』清いを受け継ぐ感じ | | |
| ②3つのターム＊フェルトセンスの中に大きな三角形を描くつもりで、選んだタームを書く | | |
| A：諦観 | B：意味づけ | C：響応 |
| タームを「～はもともと～（の性質）を持っている」の文にあてはめ、フェルトセンスで感じて気づいたことをメモし、新しいタームを追加する | | |
| ターム | 「～は本来（もともと）～である（の性質をもっている）」 | |
| A, B | 「諦観」は本来（もともと）「意味づけ」である（の性質をもっている） | |
| ⑦（メモ）諦める事の中に前向きの要素を感じる。それが取るに足る感じ。もう十分だ。雑念がなくなる。欲がなくなる。自分の中に向く、自身に向く、自己言及的になる。自分の中にあるより本質的なものに向く | | |
| 新しいターム 「足るを知る」 | | |
| B, C | ⑧「意味づけ」は、本来、「響応」である | |
| ⑨（メモ）「響応」しなければ、意味に納得しない。自分が納得しなければ意味づけたことにならない。理解、納得、得心がいく | | |
| 新しいターム 「得心がいく」 | | |
| C, A | ⑩「響応」は、本来、「あきらめ」である（の性質をもっている） | |
| ⑪（メモ）あきらめて人にやさしくなる。自分を一步引くことで他にやさしくなったり、感動したりする。無心になる | | |
| 新しいターム 「清い」 | | |
| B, A | ⑫「意味づけ」は、本来、「響応」である（の性質をもっている） | |
| ⑬（メモ）意味づけるとあきらめが前向きになる。意味づけということの中に、前向きな | | |

| | |
|--|--------------------------------|
| 性質が入っている。意味づけると得心できるから、得心するから前向きになる、わからないと混乱、わかると前向きになる | |
| 新しいターム 「前向き」 | |
| C, B | ⑭「響応」は、本来、「意味づけ」である（の性質をもっている） |
| ⑮（メモ）人の経験の中に、自分の経験と似たものをみつける＝人とつながる、より普遍的なものをつながる | |
| 新しいターム 「つながる」 | |
| つながり | |
| A, C | ⑯「諦観」は、本来、「響応」である（の性質をもっている） |
| ⑰（メモ）あきらめるところに感動がある。ネガティブだけれどもポジティブ。ニュートラル、ナチュラル。自然な状態。きばらない。無理しない。悟りというほどではないが、それに近い状態。雑念が消えてかるくなる感じ。澄んでくる。 | |
| 新しいターム 「澄む」 | |

図6 『もともとシート』

出てきたタームをまとめた

| |
|--|
| 「諦観」「意味づけ」「響応」「足るを知る」、「得心がいく」、「清い」、「前向き」、「つながる（つながり）」、「澄む」 |
|--|

【ステップ 12】 タームを選び直し、すべてのタームによる連環システムを創った。

「データが含意するインタビューイの老いの超越」のフェルトセンスに照らし、ここまでの作業を通して再度タームを選び直した。ステップ 11 でタームとタームを文法(論理)に当てはめて身体感覚的なところと照合を行なった。A はもともと B の要素を含んでいる。どうしてそう言えるのかをフェルトセンスと照合していった。

その際、フェルトセンスが選択したタームと違った感じであれば「う～んちょっと・・・違う」とか「・・・そうじゃあないなあ・・・」などというような有意味性を身体感覚から感じたりくる感覚をジグザグ思考から照合していった..

ステップ 11 で見出された新しいタームも候補として選定した。

ここまでの作業から最終的に用語 O「得心がいく」P「情け」Q「澄む」を選んだ。

次に、フェルトセンスを、O「得心がいく」で始まり P「情け」、Q「澄む」を最低 1 回含む文、P「情け」で始まり Q「澄む」、O「得心が行く」を最低 1 回含む文、Q「澄む」で始まり P「情け、O「得心がいく」を最低 1 回含む文という、それぞれを主語とし他を含む文で表現した。この作業を「相互に組み込む」、できた文を相互定義文と呼ぶ。

表現し足りないところを表現すべく、ステップ 11 で見出した新しいタームを第一候補とし、追加するタームを選定していった。R「わかってもらえたこと」をタームに追加し、既に作った 3 つの文に最低限必要な修正と共に加えた後、R「わかってもらえたこと」で始まり O「得心がいく」P「情け」Q「澄む」を最低 1 回含む文で、フェルトセンスを表現した。同様に、S「辛さ」を加えた。S「辛さ」で始まり O「得心がいく」P「情け」Q「澄む」R「わかってもらえたこと」を最低 1 回含む文で、フェルトセンスを表現した。6 つのタームを相互に組み込んだ 6 つの相互定義文からなる文群ができた。T「意味づける」で始まり O「得心がいく」P「情け」Q「澄む」R「わかってもらえたこと」S「辛さ」を最低 1 回含む、文でフェルトセンスで表現した。

7 つのタームを相互に組み込んだ 7 つの相互定義文からなる文群ができた。

「澄む」の状態は自然な悟りとまではいかないが、何かを得た感じであり「諦観」の質感を感じそこからふっと抜けた開かれた状態として捉えた。ふっと抜けた状態と #14 が家族で伝承してきた捉え方「清い」とが響きあい「澄む」を捉えた。

家族が捉えた「清い」状態は、当事者にとって家族の意図が通じている事が推察されるため「明らかな意識状態」であることが示唆された。

ゆえに澄んで明らかになる状態として「澄む・あきらむ」に一括置換し、フェルトセンスに照らした。

この精緻化をおこなったおかげでフェルトセンスの中核が表現できたと感じたので、作業を終了した

TAE では、この文群で表現される「意味の連環構造」は「理論」と呼ばれ、タームは概念と呼ばれる。最後に、すべての概念を最低 1 回使って「意味の連環構造」を、なるべく簡潔に表現した。これを「理論の骨格」と呼ぶ。

ステップ 12～12 後半のプロセス

ターム組み込みの過程 *新しく組み込んだ部分に下線を施した

③出てきたタームをまとめる. まとめたタームから 3 つの概念を選ぶ (ステップ 1 2)
O,P,Q の概念を選び相互定義文をフェルトセンスを感じつつ表現していく

① $O=PQ, P=OQ, Q=OP \rightarrow$ 新しい用語 R を選ぶ

新しく選らんだ概念「R」を加えて定義文に組み込んで表現していく

② $O=PQR, P=OQR, Q=OPR$

最後に R で始まる定義文で表現する

$R=OPQ \rightarrow$ 新しい用語 S を選ぶ

③ $O=PQRS, P=OQRS, Q=OPRS, R=OPQS \rightarrow$ 新しい用語 S を加える

このプロセスを繰り返し相互に用語の組み込んでいきフェルトセンスで表現しきれたと感じたら作業を終了する

最後にすべての概念(ターム)を使用して文章にする

図 7 は相互定義文である

| ターム (概念) | 相互定義文群 |
|---|---|
| O: 「得心がいく」 P: 「情け」 Q: 「澄む」 | O: 「 <u>得心がいく</u> 」は、共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」に触れ、「 <u>わかってもらえたこと</u> 」を納得することである P: 「 <u>情け</u> 」は、それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」に「 <u>得心がいき</u> 」, 「 <u>澄む</u> 」ことに開かれていく. Q: 「 <u>澄む</u> 」は, 「 <u>情け</u> 」にふれ, 「 <u>わかってもらえたこと</u> 」に「 <u>得心がいく</u> 」ことである |
| O: 「 <u>得心がいく</u> 」 P: 「 <u>情け</u> 」 Q: 「 <u>澄む</u> 」 R: 「 <u>わかってもらえたこと</u> 」 | O を <u>PQR</u> で定義 「 <u>得心がいく</u> 」は共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」に触れ, それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」を納得することでありそれにより「 <u>澄む</u> 」ことに開かれていく P を <u>OQR</u> 「 <u>情け</u> 」は他者が辛いことに共感する事を可能にし, それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」に「 <u>得心がいき</u> 」, 「 <u>澄む</u> 」ことに開かれていく Q を <u>OPR</u> 「 <u>澄む</u> 」は共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」にふれ, それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」に「 <u>得心がいく</u> 」ことである R を <u>OPQ</u> で定義する 「 <u>わかってもらえたこと</u> 」は共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」にふれ「 <u>得心がいく</u> 」ことで, それにより辛さを意味づけるをすることが可能になり「 <u>澄む</u> 」ことに開かれていく |
| O: 「 <u>得心がいく</u> 」 P: 「 <u>情け</u> 」 Q: 「 <u>澄む</u> 」 R: 「 <u>わかってもらえたこと</u> 」 S: 「 <u>辛さ</u> 」 | O を <u>PQRS</u> で定義 「 <u>得心がいく</u> 」は共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」に触れ, それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」を納得することでありそれにより「 <u>辛さ</u> 」を受け入れ「 <u>澄む</u> 」ことに開かれていく P を <u>OQRS</u> 「 <u>情け</u> 」は他者が「 <u>辛さ</u> 」に共感する事を可能にし, それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」に「 <u>得心がいき</u> 」, 「 <u>澄む</u> 」ことで開かれていく Q を <u>OPRS</u> 「 <u>澄む</u> 」は「 <u>辛さ</u> 」に共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」にふれ, それにより「 <u>わかってもらえたこと</u> 」に「 <u>得心がいく</u> 」ことである R を <u>OPQS</u> で定義する 「 <u>わかってもらえたこと</u> 」は「 <u>辛さ</u> 」に共感してくれる他者の「 <u>情け</u> 」にふれ「 <u>得心がいく</u> 」ことで, それにより辛さを意味づけるをすることが可能になり「 <u>澄む</u> 」ことに開かれていく |

| | |
|---|--|
| | <p>S「辛さ」を OPQR で定義する</p> <p>S「辛さ」は、共感してくれる他者の「情け」にふれ、「わかってもらえたこと」に「得心がいく」ことで、それに「自分で」意味づけ「澄む」ことに開かれていく。</p> |
| <p>O:「得心がいく」</p> <p>P:「情け」</p> <p>Q:「澄む」</p> <p>R:「わかってもらえたこと」</p> <p>S:「辛さ」</p> <p>T:「意味づける」</p> | <p>Oを PQRST で定義</p> <p>「得心がいく」は共感してくれる他者の「情け」に触れ、それにより「わかってもらえたこと」を納得することでありそれにより「辛さ」を受け入れ「意味づけ」、「澄む」ことに開かれていく</p> <p>Pを OQRST</p> <p>「情け」は他者が「辛さ」に共感する事を可能にし、それにより「わかってもらえたこと」に「得心がいき」、「辛さ」を「意味づけ」「澄む」ことで開かれていく</p> <p>Qを OPRST</p> <p>「澄む」は「辛さ」に共感してくれる他者の「情け」にふれ、それにより「わかってもらえたこと」に「得心がいき」、「辛さ」を「意味づける」ことで可能になる。</p> <p>Rを OPQST で定義する</p> <p>「わかってもらえたこと」は「辛さ」に共感してくれる他者の「情け」にふれ「得心がいく」ことで、それにより辛さを「意味づける」ことが可能になり「澄む」ことに開かれていく</p> <p>T「意味づける」を OPQRS で定義</p> <p>「意味づける」は、「辛さ」に共感してくれる他者の「情け」にふれ、「わかってもらえたこと」に「得心がいく」ときに可能になり、「自分で」「辛さ」を「意味づける」ことで「澄む」ことに開かれていく。</p> |

図 7 相互定義文

【ステップ 1 2 後半 理論の精緻化の過程】

④最後に理論の精緻化を行なった
図 8 に精緻化した理論をまとめた

(ステップ 1 2 後半)

| | |
|---|---|
| <p>Q:「澄む」を</p> <p>Q1:「澄む・あきらむ」 に変える</p> | <p>Oを PQRST で定義</p> <p>「得心がいく」は共感してくれる他者の「情け」に触れ、それにより「わかってもらえたこと」を納得することでありそれにより「辛さ」を受け入れ「意味づけ」、「澄む・あきらむ」ことに開かれていく</p> <p>Pを OQRST</p> <p>「情け」は他者が「辛さ」に共感する事を可能にし、それにより「わかってもらえたこと」に「得心がいき」、「辛さ」を「意味づけ」「澄む・あきらむ」ことで開かれていく</p> <p>Qを OPRST</p> <p>「澄む・あきらむ」は「辛さ」に共感してくれる他者の「情け」にふれ、それにより「わかってもらえたこと」に「得心がいき」、「辛さ」を「意味づける」ことで可能になる。</p> <p>Rを OPQST で定義する</p> <p>「わかってもらえたこと」は「辛さ」に共感してくれる他者の「情け」にふれ「得心がいく」ことで、それにより辛さを「意味づける」ことが可能になり「澄む・あきらむ」ことに開かれていく</p> <p>T「意味づける」を OPQRS で定義</p> <p>「意味づける」は、「辛さ」に共感してくれる他者の「情け」にふれ、「わかってもらえたこと」に「得心がいく」ときに可能になり、「自分で」「辛さ」を「意味づける」ことで「澄む・あきらむ」ことに開かれていく。</p> |
|---|---|

補論 3：高齢者の統合感とその可能性について(2008 年の研究)

問題・目的

戦後、わが国は高度経済成長を遂げ、人々は物質的豊かさを追求してきた。しかしバブルが崩壊し、これまでのような経済発達は得られなくなってきた。現代社会は年功序列制度が崩れ、企業がリストラを行うといった不透明な時代にある。同時に、超高齢社会への突入を目前にして、老年期のあり方が問われ始めている。

すでに到来している私たちの高齢社会において今日、医療や福祉、介護等の現場で多くの議論がなされている。議論の内容としては介護費用や介護者の労働負担に関する問題、そしてまた介護する家族のサポートなどさまざまである。

しかし先行研究には介護する側に焦点を当てた研究は多いが、介護される側（高齢者自身）の心の理解や高齢者の立場から老年期を考えるという視点からの研究は少ない。

老いをネガティブに捉えることが一般的であるが、竹中も言うように老いをもっとポジティブなテーマとして考えていく必要がある。従来の日本社会は目上の人を尊重し、敬う事をよしとする社会であった。しかし戦後 50 年が経過し、西洋の個人主義の思想が蔓延する現代において東洋の関係性を重んじる考えは薄れ始めてきているのかもしれない。従来の日本人に備わっていた和を重んじる考え方、地縁を重んじる考え方が今日薄れ、他方で血縁のみの核家族化が一般化している。そしてまた我が国は高齢社会にすでに突入している。このような状況の中で人間が生きる意味を考え、衰えと死に直面する中でより豊かになることを求めていくという課題にいかに取り組みでいくのかという過程は誰もが考えていかなければならない高齢社会のテーマである。

本研究は高齢社会といわれる今日、高齢者自身の心理的状态や高齢者が老年期をいかに生きるかという問題について、トーンスタンのジェロトランスセンデンスの概念を参考にし、我が国における高齢者の統合達成のプロセスについての仮説を生成し検討することを目的とした。

仮説

本研究では、東洋のジェロトランスセンデンスとの関係を調べ高い段階のジェロトランスセンデンスに達している高齢者は満足感が高くなるという視点から検証した。

定量的研究

本研究は老年期を発達という観点から捉え東洋におけるジェロトランスセンデンスという概念を新たに提唱する。東洋におけるジェロトランスセンデンスとは、従来の日本人に潜在的に備わっている自然に対する関わりや和を重んじ関係性を重視する考え方が老年期の生活満足感を高めるという概念でありライフサイクルにおける高齢者の統合感と東洋的ジェロトランスセンデンスとの関係について検討する。

予備調査は筆者の知り合いの 65 歳以上の高齢者男性 2 名、女性 3 名に対して質問紙調査を実施した。その際、答えにくい項目等を検討した。

分析方法 SPSS

調査対象、C 葉県生涯大学校 T 学園 A 校、園芸学科 専攻過程在学中の 65 歳以上の学生と H 校、生活学科、専攻過程在学中の 65 歳以上の学生を対象に質問紙調査を依頼、実施した。具体的な手続きは、東葛飾学園長に電話で質問紙調査を依頼し、調査票を持参し説明を行なった上、浅間台校、園芸科専攻代表者と江戸川校、生活学科代表者の了解を得て実施。調査依頼状、質問票、および返信用封筒を持参し授業終了時のミーティング時間を利用し調査内容を説明した上で質疑応答をへて配布。110 部配布し 77 部を回収（回収率 70%）、そのうち無記入部分がおおいもの（2 部）を除いた 75 部 68 部（有効回答率 68%）SPSS を使用した統計処理を行なった。

4-1. 研究デザイン

質問紙法：老年期の価値観の質的变化との関係を調べるために Tornstam(1997)のジェロトランスセンデンス尺度 10 問を使用。Tornstam のジェロトランスセンデンス生成の関係要因として 3 つの次元、「宇宙的次元」「自我の次元」「個人と社会の関わりの次元」が挙げられている。これらは西洋におけるジェロトランスセンデンス生成の関係要因であるためキリスト教的ニュアンスが強い。そこで東洋におけるジェロトランスセンデンスとはどのようなものであるかを考え質問紙作成項目として加えた。

老年期の発達課題として「統合」対「絶望」が挙げられていることからエリクソン心理社会的段階目録全 56 問のうち後期発達課題 28 問中高齢者の質問として適切でないと思われるものを省いた 20 問の質問項目から選択、老年期の統合感には死をどのように捉えるかという視点が大切であると考え臨老式死生観尺度から質問項目を選択、老年期の人生満足感を調べるために幸福感尺度を使用 植田,吉森, 有倉 (1992)、老年期の孤独が自己内省の際に大切な要素となるという視点から高齢者の孤独と豊かさ 竹中 (2001) から孤独に関する質問を抜粋し計 50 問 5 件法にて質問紙を作成。なお、質問紙は 5 件法（全く当てはまらない＝1 点、よく当てはまる＝5 点）とした。質問紙には性、年齢、職業の有無（前の職）などの個人属性をたずねるとともに、4 項目からなる因子：人生観（宇宙的次元は予備調査の段階で『気持ち悪い』との意見から日本人に親しみやすい自然的次元と訂正、さらに自己、個人と社会の関わりと孤独感）を含んだ。

図表 1 高齢者の統合感尺度の分析 (Promax 回転後の因子パターン)

| 項目内容 | I | II | III | IV |
|---|-------|-------|-------|-------|
| ボランティア活動など、これまでと違った役割や人間関係は大切であると思う | 0.74 | -0.21 | -0.07 | 0.12 |
| 人との関わりの中で自分にできる事があればしたいと思う | 0.71 | -0.29 | -0.12 | 0.32 |
| 人間は助け合って生きてゆくことが大切 | 0.70 | -0.07 | 0.16 | -0.10 |
| 未来を担う子どもたちとの関わりを大切にしたいと思っている | 0.69 | -0.01 | 0.13 | -0.02 |
| 無理をせず今の自分にあったやり方でボランティアに参加する事は大切だと考えている | 0.66 | -0.23 | -0.03 | 0.27 |
| 周りの出来ごとに関心をもち、自分にとっての意味を考えることは大切だと思う | 0.60 | -0.15 | 0.19 | 0.23 |
| 楽しみながら何か新しい事に挑戦することは必要だと思う | 0.60 | -0.01 | 0.22 | -0.21 |
| 地域とのつながりを持つ事は大切である | 0.60 | -0.04 | 0.05 | -0.11 |
| 人からしてもらって嬉しかった事は自分もしてあげたいと思う | 0.57 | -0.03 | 0.17 | 0.20 |
| 自然の中にいると心地よく一体感を感じる | 0.50 | -0.03 | 0.38 | -0.26 |
| 物事に対してやる気をもっている | 0.49 | 0.30 | -0.23 | -0.18 |
| 人のために役に立ったと感じることもある | 0.47 | 0.17 | -0.24 | 0.21 |
| 近年、自分のための時間を有意義に使えるようになった | 0.42 | 0.19 | -0.08 | -0.15 |
| 普遍的なもの（山、川、海、月）などで癒される | 0.42 | 0.19 | 0.38 | -0.22 |
| 私は新しい人と出会う事が好きである | 0.41 | 0.14 | -0.01 | 0.06 |
| 自分の生きた証は世代を超えて受け継がれると思う | -0.26 | 0.78 | 0.08 | 0.42 |
| 私の人生には一貫した意味があると感じている | -0.10 | 0.69 | 0.10 | 0.17 |
| 自分の人生をまっとうしていると思う | 0.01 | 0.67 | -0.12 | 0.14 |
| 祖先とのつながりを感じる | 0.02 | 0.57 | 0.41 | -0.03 |
| 人生にははっきりとした意味と目的をもっている | 0.23 | 0.55 | -0.31 | -0.14 |
| 自分の人生は意味があり価値あるものであると感じている | 0.17 | 0.54 | -0.07 | 0.16 |
| 自分に安心感を与えてくれる心のよりどころがある | 0.36 | 0.50 | -0.12 | -0.04 |
| 過去の過ちや偽りを許す事に安らぎを感じている | -0.15 | -0.50 | 0.09 | 0.35 |
| 自分の考え次第で人生は変わると感じている | -0.29 | 0.41 | 0.26 | -0.01 |
| これから先、楽しい事があるだろうと思う | 0.26 | 0.41 | -0.11 | -0.17 |
| 草花の手入れをすることで癒される | 0.08 | 0.06 | 0.63 | -0.29 |
| 人の生死は目に見えない力（運命など）によって決められていると思う | 0.13 | 0.05 | 0.57 | -0.05 |
| 近年、表面的な人付き合いに関心が少なくなった | 0.13 | 0.19 | 0.54 | 0.10 |
| 生きるということは厳しいことである | 0.09 | -0.16 | 0.52 | -0.03 |
| なるようになると開きなおることが大切だと思う | 0.06 | 0.08 | 0.49 | 0.25 |
| 私には目標があり達成したい事がある | 0.07 | 0.36 | -0.48 | -0.16 |
| 人間はもともと一人ぼっちであると感じている | 0.07 | 0.36 | 0.47 | 0.09 |
| 体力の衰えは自然な事であると思う | -0.04 | -0.01 | 0.47 | 0.25 |
| 私は自分自身に誇りをもっている | -0.01 | -0.01 | 0.45 | 0.17 |
| 近年、平穏で物思いにふけったりする事に幸福を感じている | 0.03 | 0.3 | 0.42 | 0.26 |
| なにもしないでぼんやりと過ごす時間を楽しむようになった | -0.26 | 0.23 | 0.16 | 0.80 |
| 以前より独りでいることを楽しむようになった | -0.26 | 0.21 | 0.13 | 0.59 |
| 夜、1人になると寂しいと感じる | 0.07 | -0.10 | -0.01 | 0.51 |
| 物事に対するこだわりが減ってきた | 0.34 | -0.06 | 0.32 | 0.44 |
| 因子間相関 | I | II | III | IV |
| I | — | 0.52 | 0.06 | 0.27 |
| II | | — | -0.02 | 0.26 |
| III | | | — | 0.2 |

表 2 高齢者の統合感に関する下位尺度間相関と平均, SD, α 係数

| | 個と全体 | 自己 | 自然なプロセス | 統合 | 平均 | SD | α |
|---------|------|--------|---------|--------|------|------|----------|
| 個と全体 | — | 0.55** | 0.45** | 0.27** | 4.21 | 0.40 | 0.87 |
| 自己 | | — | 0.39** | 0.32** | 3.56 | 0.53 | 0.86 |
| 自然なプロセス | | | — | 0.42** | 3.73 | 0.43 | 0.70 |
| 統合 | | | | — | 2.90 | 0.78 | 0.70 |

** $p < .01$, *** $p < .0001$

高齢者の統合感尺度の 4 つの下位尺度に相当する平均値を算出し、「個と全体」下位尺度得点(平均 4.21 SD0.40)、「自己」下位尺度得点(平均 3.56 SD0.53)、「自然なプロセス」下位尺度得点(平均 3.73 SD0.43)、「統合」下位尺度得点(平均 2.90 SD0.78)とした。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、個と全体で $\alpha = 0.87$ 自己で $\alpha = 0.86$ 、自然なプロセスで $\alpha = 0.70$ 、統合で $\alpha = 0.70$ と十分な値が得られた。

第 2 節 第 1 節 第 I 研究のまとめ

第 3 節 第 2 節 本研究では我が国における前期高齢者の統合感のプロセスが 4 つの次元と関係しているという事がわかった。4 つの次元とは「個と全体」「自己」「自然なプロセス」「統合」である。さらに「統合の次元」はジェロトランスセンデンスに何かしらかの影響を与えているという事がわかった。

男性と女性では統合感達成に違った傾向が窺えた。

| 男性 | 女性 |
|-------------------------------------|---|
| 「個と全体」→会社組織 | 「個と全体」→地域や家族など |
| 「自己」→自分自身 | 「自己」→家族などを通じて自己を形成 |
| 「自然なプロセス」→それまでの価値観と質的に違っており移行しにくい | 「自然なプロセス」→日常生活から自然に移行できる |
| 「統合」→超越と関係があるが前期高齢者の活動的な段階では得点が高くない | 「統合」→超越と関係があるが前期高齢者の活動的な段階ではあまり考えられていない |

前期高齢者の統合感のプロセスに 4 つの次元が関係している事が統計的数値で実証された。しかし各次元が具体的にどのようなになっているのかについては定量的調査では具体化しづらい。

ゆえに第 II 研究として定性的研究を実施した。

第 II 研究 : 定性的研究

本研究では高齢者の統合におけるプロセスと関係について検討する。まず従来の日本人に潜在的に備わっている自然に対する関わりや和を重んじ関係性を重視する考えがジェロトランスセンデンスにどのように関係しているかを調べ老年期に移行する段階のプロセスを明らかにする。ジョロトランスセンデンスが高ければ高い程、生活満足度は高くなるという仮説を参考にし、わが国における高齢者の内的(心理的)実態がどのようなになっているかを検討した。そして今後このような状況を考察していく際に有効であろうと考えられるいくつかの仮説を生成する事を目的とした。

II—1 方法

a 研究のデザイン: 第 I 研究の質問紙回収後、統計処理を行なった結果を元にインタビューガイドを作成。インタビューガイド作成にあたってはスーパーバイザーと協議に予備調査による不適切な箇所(宇宙の一体化感を感じるようになったとの質問に対し「気持ち悪い」との回答から宇宙という名称を自然という名称に変更。また死に関する質問に対して「答えにくい」との回答から「大地に返るということに関してどう思うか」というように言い回しを変えて作成。これらインタビューガイドに沿って半構造化面接によるインタビ

ューを実施。高齢期にいかに関心をもつて過ごすかのプロセスと関係について調査した。

b 調査協力者の属性 1（前期高齢者）：

T地区の生涯学習大学に通う学生

前期高齢者として生涯大学で園芸を受講している学生と生活科で学ぶ学生 4名

半構造化面接調査は一人あたり平均2時間程度である。面接は、対象者に同意を得てICレコーダーに録音した後、完全な逐語録を作成した。

【調査者の属性（前期高齢者）】

| 実 例 NO. | 半構造化面接実施日 | 性別 | 年齢 | 前職業 |
|---------------|------------|----|-----|------|
| #14 | 2007年9月19日 | 女性 | 68歳 | 元会社員 |
| #18 | 2007年9月20日 | 男性 | 65歳 | 元会社員 |
| #39 | 2007年9月18日 | 男性 | 73歳 | 元会社員 |
| #76 | 2007年9月17日 | 女性 | 70歳 | 専業主婦 |

b 調査協力者の属性 2（後期高齢者）：

老人ホームに入所している高齢者 4名

半構造化面接調査は一人あたり平均1時間弱である。

面接は、対象者に同意を得てICレコーダーに録音した後、完全な逐語録を作成した。

【調査者の属性（後期高齢者）】

| 実 例 NO. | 半構造化面接実施日 | 性別 | 年齢 | 前職業 |
|---------------|------------|----|-----|-------|
| #1 | 2007年8月13日 | 女性 | 88歳 | 専業主婦 |
| #2 | 2007年8月14日 | 男性 | 83歳 | 元会社員 |
| #3 | 2007年8月15日 | 女性 | 90歳 | 元会社員 |
| #4 | 2007年8月16日 | 女性 | 86歳 | パート職員 |

c 調査日時と場所：

（前期高齢者） 2007年9月17日～20日

インタビューの居住区域付近の公民館を借りて実施

（後期高齢者） 2007年8月13日～16日 老人ホーム内談話室

d 倫理的配慮：調査倫理に関わる注意事項を記載したものを添付しICレコーダーにて面接内容の録音の許可を得て実施した。

【調査倫理に関する内容 例】

調査の結果は、統計データとして研究目的のみに使用され、他のことに使用される事は絶対ありません。

回答の処理からデータ保管と処分まで、回答は厳重に保護されます。

インタビューでの内容をICレコーダーに録音させていただきます

ご質問やご意見がある場合は、調査実施者の連絡先まで遠慮なくお問い合わせください。

e 分析方法 逐語をテキストデータに起こしM-GTA（修正版グランティドセオリーアプローチ）を使ってプロトコル分析を実施

【M-GTA(修正版グランティドセオリーアプローチ)に関して】

質的研究とは質的データを用いて意味の解釈(問題意識)を目的とするものであり、質的データの特性は多様性や複雑さをそのまま表現したディーテールの豊富な内容にある。質的データを用いた研究は、ヒューマンサービス領域を中心にとくに実践の理解に有効。しかし、面接データや観察記録などはどのように記録したらよいのかは、簡単そうに見えて実は難しい。解釈とは字面をみてできるものではなく、字面や行間の奥にあるであろう意味の世界を見出していく作業である。これはさまざまな検討を経て徐々に見えてくるものである。作業プロセスとしては新たな解釈を見つけ出していき、発見ではなく生成しデータと分析は交互作用によるものである。

【M-GTA の調査・分析手順】

研究テーマの設定⇒分析テーマの設定&分析焦点者の設定⇒データ収集とデータの整理：面接調査、観察調査など⇒データに照らして、分析テーマ&分析焦点者の設定の確認⇒分析ワークシートの作成：概念生成。概念 1、概念 2⇒カテゴリー生成（いくつかの概念がまとまったもの）の生成⇒カテゴリー相互の関係とコアカテゴリーを中心とした全体のまとまりを生成する

【分析ワークシートの作成】

概念生成時には必ず、生成した概念の名称、その定義（データの解釈を論理表現。名称は仮であっても定義により論理的密度は設定できる）、最初の具体例を記入する。概念ごとにワークシートを作成する：1 概念に 1 ワークシートを作成する。

【分析ワークシート例】参照

【逐語起こししたテキストデータ】

筆者：田舎がいいなって思われるのはどういうところからなんだろうかね。やはり自然があるからいいんでしょうかね。」

Aさん：ああそうだね。自然だろうなあそうだね。それからなんか うーんそうだなあ 自然だなあ。そうだね。自然だなあ。

筆者：それはご自身が新潟のほうのお生まれで親しみがあると感じていらっしゃるからなんだろうかね。」

Aさん：いや～そうじゃあないなあ 家の奥さんは東京生まれなんだよね。

筆者：ええ

Aさん：でもね。そういう都会のそういうのはね、若い頃はやっぱりね。パリとかロンドンとかそういうところと一緒に二人で歩いたけど今は田舎いくとね。フランスでもイギリスでも いやあ 年のせいだなあ。田舎はすばらしいんだよとを感じるようになったんだね。

筆者：ああそれはやはり若い頃にはお感じにならなかった事なんだろうかね。

Aさん：若いときはロンドン、パリのほうが絶対にすばらしいしわあ～って感激して

筆者：ええ

A：そりゃあ若い時はね。絶対にノートルダム寺院だとかね。ロンドン塔なんか見たりね。わあ～すげ～え。あれがビックバーンか・・・なんて感動するけれども田舎行って羊見たって若い人は感激はしませんよ。年のせいだなあ。

筆者：それでは自然を感じるようになったのは年のせいだとお考えなんだろうかね。

Aさん：年 としだよ・・・今あんににいわれて気がついた。

筆者：ああそうですか。

Aさん：若いときとやっぱり興味の対象が違っているんだ。そうだよ。うん やっぱりね。そうだよ。そうだね。年のせいだね。

【分析ワークシート例】

| | |
|-----------|------------------|
| 概念名 #18-8 | 興味の対象の変化(所有から存在) |
|-----------|------------------|

| | |
|--------------------------------------|--|
| 定義 | 静寂を好む 静寂に対して居心地よさを感じる |
| ヴァリエーション | <p>田舎がこんなにもいいなってほんと知らなかった (9-18)</p> <p>ああそうだね. 自然だろうなあそうだね. それからなんか うーんそうだなあ 自然だなあ. そうだね. 自然だなあ (9-21)</p> <p>若いときとやっぱり興味の対象が違っているんだ. そうだよ. うん やっぱね. そうだよ. そうだね. 年のせいだね (9-38)</p> <p>そうだなあ. あれえでも若いときもそういったものに癒されていたけどでもそれだけ心地よさを感じるのはそうだ 僕 年をとったせいだね. 奥さんもそうだとうちの思うけどね.</p> <p>若い頃には全然考えなかったね. あははは 全然考えなかった あったけど家の奥さんもハンドバックやらを買ったりしたけど. 今そんなのうちの奥さんもそんなのにもるっきり興味も示さなくなったし (10-19)</p> <p>で 僕年取ってから勉強するのもB大学でたくさんあるセミナーの中から仏教を選択するっていうのもね. これ よく言われると年取ったせいだなあ. うーん (10-29)</p> <p>やっぱり経済 マーケティングとか新しいそういう事かなあ. (10-37)</p> |
| 理論メモ (解釈の検討記録. その時の疑問、アイディアなどを記録) | <p>自然に対して心地いい 安らぐという気持ちを深く感じるようになったのは年を取ったからなのだろうか.</p> <p>興味の対象が若い頃と年を取ってからでは変化してきている.</p> <p>年をとると安らぎや心地よさを深く感じるようになる それは体験が積み重なって人間に深みが増すからなのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日常生活の中でこれまで感じられなかった(役割等の縛りから)些細な事柄の中から感じる安らぎのようなものを感じているのではないだろうか ・ 若い頃と比べて興味の対象が変化してきている. 外見的なものに対してより内面的なものを大切に感じるようになったのではないだろうか. これは年を取ったということも関係しているのではないだろうか |

【分析の進め方とまとめ方】

①概念ごとに、それと関係するほかの概念を検討していく



②複数の概念のまとまりがカテゴリーとなる



③カテゴリーは明らかになりつつあるプロセスを照らしても検討する



④概念を生成していくと、相互の関連性が見えてくる. 目安としては概念を 10 個前後生成したときにカテゴリー化する.

【理論の飽和化】

どこまでやれば飽和化と言えるかの判断は研究実践上難しい: 論理的必然性と研究者による説明を考えて出来るだけいくつもの解釈可能性を挙げる事でよしとした. (C/O 2007 西條ライブ講義 質的研究とは何か P233)

【スーパーバイズ】

修正版 M-GTA をもとにスーパーバイズを受けた。また 12 月 22 日、23 日に質的研究合宿を開き普遍性を検討した

f データの種類と質

質的研究の特性は、ディテールの豊富なデータの分析であり、逐語化した面接データの使用が多いが、観察記録も参考。

g 資料の収集

今回の分析資料の収集は次のようにして行なった

高齢者の統合感と関係要因を調査するため、2007 年 7 月に行なった量的調査表の統計処理による結果をもとにインタビューガイドを作成し半構造化面接を 1 回から 2 回、計 1 時間から 2 時間行なった。

面接時の様子などを観察記録に記録した。資料の量は対象者で異なるが多い対象者では A4 用紙 36 枚、少ない場合では 8 枚である。後期高齢者は体調の具合（会話の最中に咳が続く、長時間の会話は疲れる）により沈黙等もあり逐語としてデータを起すと枚数の少ない物もあった。統計処理したデータをもとに作成したインタビューガイドの例を表に示す。

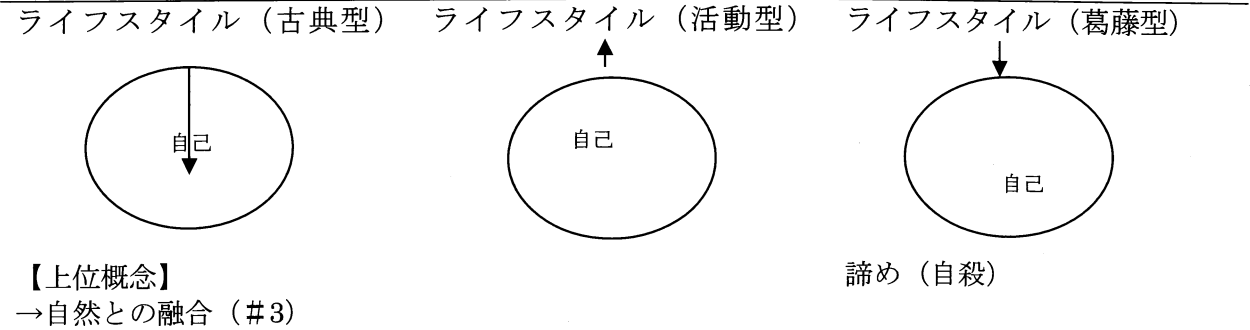
【表 1 例：インタビューガイド】

| | |
|---------|---|
| 他者との関係性 | 地域とのつながり（ご近所との関わり）は大切であると思われますか どうしてそのように思われますか いつ頃からそのように感じるようになりましたか |
| 自己 | 人のために役に立ったと感ずることがありますか どのような時にそんな風に感ずますか そのときの気分はいかがですか |
| 人生経験 | 挫折や悲しみ、失敗などといった一見否定的な事柄がご自身の人生に意味を持っていると感じられますか |
| 自然 | 大地に帰る、自然に帰るということに対してどのように感じておられますか どのような時にそんな風に感ずますか そのように感じられたのは若い事からですか それとも歳をとられてからですか |
| 自然なプロセス | 無理をせず今のご自身にあったやり方で活動に参加する事は大切だと考えていますかそれとも大切ではないと考えていますか どのような時にそんな風に感ずますか そのように感じられたのは若い事からですか、それとも歳をとられてからですか |
| 統合 | 以前に比べて内的な世界（一人で考え込むこと）に幸福を感じるようになったと思われますか どのような時にそんな風に感ずますか そのように感じられたのはいつ頃だと感じておられますか |

インタビューガイド作成にあたってはクローズドエンドになるような質問は避け具体的な例をあげるように求めるような形で行なった。

第Ⅱ研究の結果のまとめ

本研究では、我が国における高齢者の統合達成プロセスが 3 つのタイプにわけて捉えられた山口（2008）. 以下にプロセスの概念化と仮説生成について示す



| | | |
|---|---|--|
| 年齢を自然に捉え、死に対して肯定的に捉えられる→ジェロトランスセンデンス的価値観 (Disengagement2) | Disengagement2 をどのように捉えるか (#2、#14、#18、#39、#76) | 寂しさやつらさなど否定的概念→孤独 2 (#1、#4) |
| 利己主義から利他主義的になりすべての事柄に感謝する→おかげと諦念 | 非ジェロトランスセンデンス的価値観(ポジティブ型) Type1 挑戦型 # 18 # 76 Type2 アンチエイジング型 # 14 Type3 友達形成型 # 2 | 否定的概念としての迷い 2 |
| 加齢を自然に捉え、死に対して肯定的に捉えられる→ジェロトランスセンデンス的価値観 (Disengagement2) | 他者との関係性 (Soul-making) ①ルールに基づいたもの ②自然的なもの | 非ジェロトランスセンデンス的価値観 (ネガティブ型) →過去に捕らわれている |
| ポジティブな概念としての孤独 1 を楽しみ内省を好む | ポジティブな概念としての迷い 1 (これから先をどのように過ごしていこうかを試行錯誤する) | 現状への不満 (老人ホームでの限られた生活に対する不満) |
| 潜在的に次世代の継承が存在し癒す・安らぎが自然に対してある | | |
| Disengagement1 から所有から存在へ自己の探求 | | |

考察と今後の課題

前期高齢者 4 名、後期高齢者 4 名の協力により半構造化面接で面接内容を IC レコーダーで録音し、逐語録を作成したデータから概念化し理論化していった。
後期高齢者に対しては、時間的な制限や配分の不十分さがあったため、内的心情の変化についてあまり深く聞くことができなかった。そのため量・質にばらつきがみられる。今後は前期高齢者が後期高齢者に移行した場合にどのような事態が残るのだろうか。さらなる加齢によって活動性は間違いなく低下するだろう。その際、これらの高齢者のライフスタイルがどのようなものになりうるだろうか。今後の時系列の研究が重要な課題であるかもしれない。

今回高齢者のポジティブな可能性について研究をするにあたってものの捉え方をエッジから考えられるようにと TAE (THINKING AT THE EDGE)^注を学ぶ機会があり参加した。その際に作ったマイセンテンスは以下の用である

「相互依存は **life-forward** を生起し人間の心的発達を促進する」が筆者のフェルトセンスに響き合っている。人間が生きる中で相互依存とはどのような可能性があるのでしょうか。この事についても今後の課題としたい。

^注「内的成長を可能にする方法として、米国の哲学者でありセラピストでもあるユージン・ジェンドリン博士と夫人のメアリー・ヘンドリクス博士が開発した理論構築法